

明治元年(1868)

〔表紙〕

忠義公史料 明治元年四月 一

〔扉に、表紙の文字の外に、市来四郎編の記載あり〕

目録

- 一 宿駅役所ヲ京師ニ置キ諸道逋伝ノ事ヲ掌ラシム、又一周年ヲ限り夫馬ノ雇錢ヲ増加ス四月朔日
- 記 駅通司布達三四件

- 総督徳大寺治定書并省費之策四条
- 東海道平均一ヶ宿改正諸入用見込書
- 宿駅役所布達書三通

- 一 御親征行幸中節朔ノ礼ニ及ハサルコトヲ令ス四月朔日

記 達書

藩記

- 一本藩兵京都庚申口ニ於テ操練ス、忠義列卿侯ト俱ニ之ヲ覽ル四月朔日

参照 大久保利通日記節録

- 一 大久保一藏顧問詰所勤務ヲ命ス二月朔日

記 御沙汰書

参照 大久保利通日記節録

- 一 各藩兵ヲ城内ニ集メ操練 天覧ヲ達ス三月四日

記 達書

- 一 軍艦春日号ヲ清国上海ニ修繕セントシ、英国旗章ヲ仮用

センコトヲ長崎裁判所ニ請フ、之ヲ聽ス三月四日

記 汾陽次郎右衛門申請書并ニ附札

- 一 伝駅ニ令シ、公卿・諸侯・吏人等ノ陪隸横暴ヲ為スモノアレハ、直ニ所在官庁ニ訴ヘシム、隠庇スルモノ其

罪ニ座ス四月四日

記 達書

- 一行在所參候ノ諸侯ニ其扈從員ノ制限ヲ令ス四月四日

記 達書三通

- 一 操練 天覧ノ順序ヲ達ス四月四日

記 達書

一 太政官日誌頒布ノ旨ヲ布達ス四月五日

記 達書

一 島津久光檄ヲ西海道諸藩ニ伝フルヤ、諸藩皆勤王式ナ

キヲ陳ス、因テ忠義其状ヲ奏シ諸藩ノ答書ヲ上ル四月五日

記 奏状并ニ諸藩答書二十六通

一 藩士海江田彦之丞外一名内国事務局雇ヲ命セラル四月五日

記 辞令

藩記

一 長崎裁判所各領事ト議定シ、支那人ノ各国ニ隸スル

モノ、我ニ対シ法ヲ犯サハ、国律ニ処スルコトヲ通牒

又四月五日

記 蘭岡士ヘ宛タル通牒文

一 徳川氏ノ臣黒川嘉兵衛ヲ津藩ニ預ケ、後命ヲ俟タシム

四月五日

記 徳川家来有志共歎願書并ニ別啓

参照 黒川大華筆記節録

一 肥前邸ヘ参伺公卿・諸侯等参集ス四月五日

参照 大久保利通日記節録(得能一条云々・会計方一条

議事・肥前邸参伺公卿・諸侯参集等ノ事ヲ記ス)

一 諸藩兵ノ操練ヲ大坂城ニ於テ天覧アラセラル四月六日

記 御行列次第書

参照 土方久元日記節録

一 諸侯ニ令シテ、其家眷及ヒ臣隸ノ江戸ニ住スルモノヲ

封地ニ移ス、因テ其已移未移ヲ具申セシム四月七日

記 御沙汰書

二六六 宿駅役所ヲ京都ニ置キ諸道駅通ノ事ヲ掌

ラシム

明治元年四月朔日、宿駅役所ヲ京師ニ置キ、諸道駅通ノ

事ヲ掌ラシム、又伝駅疲弊シテ供億ニ堪ヘサルヲ以テ、

一周年ヲ限り夫馬ノ雇錢ヲ増加セラル、

二六六ノ一  
今度

御一新ニ付、五街道筋宿々並脇街道筋宿々共、継人馬

備方勿論、都テ道中筋相掛候御用向、自今以後於当

御役所支配申付候間、其旨相心得被

仰出之儀可有之候ニ付、宿・助郷共申合、不取締無之

様可相守、右之趣可触知モノ也、

京都

宿駅

辰四月朔日

御役所

二六六ノ二

近來物価沸騰イタシ、宿村共及困窮候段被 聞召、人馬賃錢、当辰四月ヨリ来已四月迄一ケ年之間、當時割増ヲ除キ、前々定有之候人馬元賃錢之上、六倍五割増錢被下之候間、依之宿村困窮立直り候様可心掛、右之趣今般諸向へ御達有之候間、以後被仰出候賃錢受取、人馬無遲滞可継立モノ也、

京都

宿駅

辰四月朔日

御役所

二六六ノ三

閏四月五日再達書

今般

御一新ニ付、人馬定賃錢割増之儀、先般申触候処、中ニハ一里五拾文余之上へ、六倍五割増賃錢受取之宿村モ有之趣相聞候、以之外之事ニ候、以来東海・中山両道之元定賃錢ニ準シ、人足一人一里元賃錢二拾文ト相定、右之上へ六倍五割相増、都合百五拾文ト相成、馬一匹ハ一里元賃錢四十文ト相定、右之上へ六倍五割増、

都合三百十二文ト相成、宿々ニオキテ右賃錢受取之、

御用并諸家通行之節、人馬無滞継立可致候事、

但触書之通写取、宿々問屋場へ張出シ置可申事、

宿駅

辰閏四月五日

御役所

駅通司布告留

二六六ノ四

以上四条、諸侯家記並ニ之ヲ載セス、五月二十八日ニ至リ諸藩ニ令セシモノアリ、宜シク参看スヘシ、

駅通司布告留ニ云、四月十五日、総督徳大寺殿越前殿

へ出ス治定、左之通、

一今般元賃錢ニ六倍五割増被

仰出候得共、物価騰貴之節、其実尚雇賃錢之半ニ不過、於諸道駅々足賄候処之通計、一ケ年凡九十万余金、依之沿道之民不平ヲ抱、愁訴無休時候ニ付、下情探索之上、今三四倍相増、時価公平之賃錢ニ立替、年限ヲ以申渡候欵、定賃錢ヲ廢シ、都テ相對賃ニ仕候欵之事、一天下ヲ関東・関西・中国・四国・九州之五等ニ分チ、各境平等助郷ニ組合、諸駅正人馬之費用ヲ出サシメ、衆力ヲ以為足賄候事、

但関東ハ未タ御平定ニ不相成、中国・四国・九州ハ

海路之便有之、宿駅之患格別不深、先関西諸道京

攝迄ヲ以急務ト仕、其余ハ時機ニ随ヒ、次第ニ廻

置仕候事、

一是迄助郷村々犬牙錯雜不便ヲ極候ニ付、今般改之、宮・

堂上方領地ニ不拘、其駅々最寄次第、一円ニ組込、大

路ニ七万石、中路ニ三万五千石、小路ニ一万石程之見

積ヲ以、先一ヶ年之間助郷ニ組立候事、

但手明村々ハ、追テ難村出来イタシ候節ハ、交代為

相勤候事、

書朱三ヶ条之内、末之策御聞濟ニ相成候事、

二六六ノ五

省費之策四条

一諸藩參勤之節、従者之數ヲ減シ、成丈無用之人馬ヲ不

取、並家来・小者共道路不法之儀無之様、屹度御制度

被為立度候事、

一無賃上下人馬並木錢・米代之休泊、一切廢之事、

一宿助郷常々ニ矛盾ヲナシ、其間ノ諸雜費不少、依テ以

来一体トナシ、其費ヲ去リ、人馬ハ戸口ノ數ヲ以テ募

之、賃錢ハ税額ノ多寡ヲ以テ取之候事、

一東海道五十七駅、中山道六十九駅ノ内ニテ、間狭ノ場

所式拾駅計休宿為致、成丈宿駅ノ費用ヲ節縮スル事、

以上、

書朱右四ヶ条聞濟之事、

二六六ノ六

東海道平均一ヶ宿改正諸入用見込書

一立馬式拾匹

此料金千兩

一先触持千八十人

此料足千八十貫文

一杖払持・高張持百人

此料足百貫文

一助郷村々呼出シ人足千八百人

此料足千八百貫文、但シ一日五人之見込

一宿駕百挺蒲団共

此料足貳百貫文

一同桐油百枚但損共貳百貳拾枚見込

此料足三百六十貫文

一筆紙墨代但宿郷役人三十人前之見込、一日一人別紙一枚、一ヶ月筆墨代三百文

此料足千貫文

一油・蠟燭・炭但油一夜一升、蠟燭一人別、炭一日一俵見込

此料足貳千百貫文

一宿助郷役人三拾人搗込卷人卷ケ年五十兩

但問屋貳人・勘定役貳人・年寄六人・帳付貳人・人

馬差四人・下小遣三人・勘定役貳人・総代六人・

帳付貳人・人馬差四人

此給料金千五百兩

一宿場諸雜用 此金百兩

合金貳千六百兩

錢六千六百四十貫文、此金六百六拾四兩

都合金三千貳百六拾四兩

外ニ

一通行人足拾万人卷人ニ付卷貫文

一同馬貳万八千匹卷匹ニ付貳貫文

内七千貳百匹立馬分引

此賃金卷万四千六百六拾兩

内金九千八百五拾九兩 御定賃錢被下候分

差引

金四千三百卷兩足賄分

差引二口

合金七千五百六拾五兩

宿助郷失費分

右卷ケ年雜費改正仕候処、如斯御座候、以上、

○按スルニ、第九款但書ノ人員三人ヲ衍スルニ似タリ、

二六六ノ七

過日以來人足之儀ニ付、先触申付候様御書付御廻シニ

相成、然ル処、唯人足何人ト有之候而已ニテハ、不都

合之儀モ有之候哉ト存候間、以來別紙之通御記シ御廻

シ被下度候、以上、

民政役所

戊辰四月

宿駅掛

御掛中

二六六ノ八

録附宿駅役所布告書三通

今般

御一新被

仰出候付テハ、太政官代ヨリ国々又ハ出陣有之候

総督 鎮撫使方、都テ其外へ被差立候往返之御用物、

御用状等継送り之砌、於宿駅、御紋附又

襟裏御用杯ト相認候絵符提灯等、区々相用候趣相聞候、

自今以後右様之節ハ、

御用ト相認候絵符提灯相用、猥ケ間敷義無之様急度相心得可申事、

宿駅

辰四月

御役所

駅通司布告留

辰閏四月

御一新被  
仰出候付テハ、向後  
御用通行ヲ始、諸家往来之面々、繼立人馬共都テ定賃ヲ以、無遲滞可繼立モノ也、

但馬一匹一里ニ付、元賃錢四十八文ト相定、  
右へ六倍五割増受取之可申事、

伏見宿

是迄、於其宿方繼立人馬附出賃錢受取之居候処、今般

御一新被

仰出候付テハ、向後

御用通行ヲ始、諸家往来之面々、都テ定賃錢ヲ以、無

遲滞可繼立モノ也、

但諸家遣高之儀ハ、追テ可被仰出候間、夫マテノ処、

東海道ニ準シ繼立可申事、

辰閏四月

駅通司布告留

二六七 親征行幸中節朔ノ礼ニ及ハサルコトヲ令

ス

明治元年四月一日、御親征行幸中、節朔ノ礼ニ及ハサル

コトヲ令セラル、

二六七ノ一 御親征行幸中、節朔不及參賀候事、

右去月三十日可相達御沙汰之処、行違之儀有之、及漏

脱候間、今日申渡候事、

四月一日

守口宿

是迄、於其宿方人足而已繼立居候処、今般

二六七ノ二  
(記)

藩記ヲ載ス、

右辰四月二日、太政官代弁事務局より御呼出有之、永  
山<sup>(盛輝)</sup>左内罷出候処、非藏人松室甲斐を以、御触下江御  
布告相成候様被相渡、御触下江ハ廻達いたし候趣、  
内田<sup>(政應)</sup>仲之助より主殿殿江首尾書有之、

二六八 本藩兵京都庚申口ノ操練ヲ島津忠義列卿  
侯ト俱ニ覽ル

明治元年四月朔日、本藩兵京都庚申口ニ於テ操練ス、忠  
義列卿侯ト俱ニ之ヲ覽ル、

(記)

本日、在京ノ本藩兵庚申口ニテ操練ス、  
忠義、岩倉<sup>(貞徳)</sup>・徳大寺<sup>(実則)</sup>・萬里小路<sup>(博房)</sup>・岩倉侍従<sup>(貞定)</sup>・具經ノ列  
卿、蜂須賀侯<sup>(頼茂)</sup>ト俱ニ之ヲ覽ル、此日阿波藩兵モ又練  
兵アリタリ、

【参照】

大久保利通日記

四月

朔日

今日於庚申口大隊調練有之、君公御出、岩倉卿・徳

大寺卿・萬里小路卿・岩倉侍従卿・阿州公御出、尤阿  
州大隊調練モ有之、壯観也、相濟阿州侯へ御出供奉、

二六九 大久保利通顧問詰所勤務ヲ命セラル

明治元年四月二日、大久保一藏顧問詰所勤務ヲ命セラル、

大久保一藏

小松<sup>(清應)</sup>帯刀・後藤<sup>(元勝)</sup>象次郎下坂中、顧問詰所出仕、諸事当

職同様可相勤

御沙汰候事、

四月二日

(記)

大久保先キニ顧問ヲ辞セリ、尋テ木戸孝允又之ヲ辞ス、  
此際小松・後藤ハ下坂、行在所ニ勤仕シテ顧問ナシ、  
仍テ岩倉副総裁親シク来邸、忠義ニ大久保拝任ノ旨ヲ  
懇囑セラル、忠義大久保ニ伝フル所アリ、遂ニ此日顧  
問所勤仕ノ命アリシナリ、

【参照】

大久保利通日記四月

二日

一太政官へ出席、今日後藤・小松上京迄之間、顧問詰所へ相詰、当職御用相勤候様被 仰付候、

右ハ木戸準一郎顧問徵士御断申出、岩倉卿ヨリ段々御説得相成候処、色々申立候テ、詰ル処一人ニテハ不堪大任候間、小子江顧問被仰付度、左候ハ、共ニ尽力可仕トノ事ニテ、岩倉卿御邸江御出、太守公江御受イタシ候様御沙汰被下度趣、御相談被為在候由ニテ、今朝御召ニテ、思召之処モ其方御受不致、木戸迄モ御受不申上候テハ、現事不可然存候間、御受仕候様御沙汰奉拜承候、

二七〇 各藩兵ヲ城内ニ集メ操練天覽ヲ達ス

明治元年四月三日、各藩兵ヲ城内ニ集メ 天覽ヲ達セラ  
ル、

達書

明後五日卯ノ刻

御発聲、銃陣為

天覽、城内へ

行幸被為 在候旨被 仰出候事、

御道筋之儀ハ、表御門ヨリ安土町通塚筋右へ、本町通谷町迄右筋左へ、大手筋ヨリ

御入場之事、

但雨天之節ハ御順延之事、

(記)

同五日雨天ニ付、

行幸御順延之旨被 仰出タリ六日  
參看

二七一 軍艦春日丸上海ニ於テ修覆ノ為、英国ノ

旗章ヲ仮用センコトヲ請ヒ許サル

明治元年四月三日、軍艦春日ヲ清国上海ニ修繕セントス、因リテ英国ノ旗章ヲ仮用センコトヲ長崎裁判所ニ請フ、之ヲ聴ス、

蒸氣軍艦

春日丸

右船底へ損所致出来候処、当港ノ儀修繕台無之、修覆相叶不申候ニ付、上海へ遣度御座候間、御免被 仰付被下度奉願候、左候テ此節ノ修覆向英商ヒユースト申者へ相頼候処、上海ノ義未日本政府ノ出役無之、日本



国旗相用候テハ都合不宜候ニ付、英国ノ旗章相用致航

海度申出候間、被聞召置被下度、此段申上候、以上、

四月三日

薩州

〔光通〕

汾陽次郎右衛門

御附札

書面之趣承届候、

長崎県記

(記)

軍艦船底破損アリ、英国人ニ託シ、清国上海ニ於テ修

繕セントス、当時未タ日本ト通交ノ条約ナキニ由リ、

仮ニ英国ノ船籍ニ入レテ之ヲ託スルカ為メ、英国ノ旗

章ヲ用フルコトヲ西海道鎮撫使ニ請ヒ、聴サレタルナ

リ、

二七二 伝駅ニ令シ公卿・諸侯・吏人等ノ陪隸ノ横

暴ヲ為スモノアレハ之ヲ訴ヘシム

明治元年四月四日、伝駅ニ令シ、公卿・諸侯・吏人等ノ陪隸、横暴ヲ為スモノアレハ、直ニ之ヲ所在ノ官庁ニ訴ヘシム、隠庇シテ告ケサルモノハ、其罪ニ座スルヲ令ス、

斯ル

聖業御隆興之上ハ、天下万姓各得其所候様、深ク御

仁恤被為在、凡百之宿弊尽ク御一洗之 御趣旨ニ付、

五畿七道、其他諸道筋通行之節、是迄幕吏等ノ如キ悪

業有之候テハ、決テ不相濟事ニ候、尔来宮・堂上方・

諸侯及小吏・陪臣等往来致シ候節、随従之者共下部ニ

至ル迄、万一威權ケ間敷、又ハ賄賂等ヲ貪リ、総テ不

法之振舞有之候ハ、早速其筋裁判所、又ハ其向々之

役所へ可訴出候、若シ隠置後日於相頭候ハ、屹度曲事

可申付者也、

四月

太政官日誌

二七三 行在所参候ノ諸侯ニ、雇従人員ノ制限ヲ

令ス

明治元年四月四日、行在所参候ノ諸侯雇従人員ノ制限ヲ令セラル、

達書

二七三ノ一  
行在所へ

天機伺トシテ下坂之面々、供奉供連同様、左之通被相  
定候、当正月戰爭以來莫大之夫役ニテ、宿駅難渋セシ  
メ候事ニ付、全ク立婦之心得ヲ以、万端簡易ニ致シ、  
往来下々迷惑筋ニ不及様、可相心得候事、

中藩以上

近習拾人・手廻り拾五人迄之内

小藩

近習六人・手廻り拾人迄之内

右之通被

仰出候事、

四月

二七三ノ一  
行在所へ

天機伺トシテ下坂之面々供連之儀、御布告被 仰出置  
候趣モ有之候処、宿駅人足ニ不相拘、兵隊召連之儀ハ  
被差免候、尤中藩以上百人ヨリ以下、小藩五十人以下  
ト被相定候条、可成丈簡易之 御趣意ヲ奉シ、致往来  
候様被 仰出候事、

四月

黒田長知・毛利元徳家記  
非蔵人日記

二七四 操練天覽ノ順序ヲ達ス

明治元年四月四日、操練 天覽ノ順序ヲ達セララル、

一天覽兵隊規則、明五日卯之上刻、城中ニ郭揃之事、

但各藩標札之下へ屯集之事、

一本丸へ 着御之上、直ニ第一兵隊整列ヲシテ、時刻之

指揮ヲ相待、令ニ随テ操練場ニ進ミ、運動放発ス、其

節第二兵隊本丸門際ニ進ミ、整列可有之、第一兵隊操

練畢テ退キ、第二兵隊可相進事、

但第三兵隊ハ準之、

第一兵隊ヨリ第二兵隊各操練相濟次第、指揮ヲ相待、

勝手次第可罷歸事、

操練兵隊順序

第一 薩州兵隊一中隊

藝州兵隊一小隊

越前兵隊一小隊

第二 長州兵隊一大隊

肥後兵隊一大隊

第三 柳澤甲斐守一小隊

北條相摸守一小隊

揃場順次

加藤明実家記  
園部藩記

前軍兵隊

右御本門前通柵門外、標札之処屯集之事、

前軍公卿・諸侯

右御堂筋柵門内、御本門右側之事、

後軍公卿・諸侯

右御堂筋柵門之内、御本門左側之事、

後軍兵隊

右柵門之内、備後町五丁目標札之本屯集、

於城内屯所ハ、各其標札之下ニ混雜無之様屯集、

還御可相待事、

御出聲合図之次第

一番目ニテ、又供之者其揃場ニ屯集可致事、

但草履取一人、御門内御玄関前へ可集事、

二番目ニテ、又供整列可致事、

但柵門締切、供奉之面々タリ共通行被差留、整列之

後ハ猥ニ列ヲ離レ候事被禁候間、其旨厚相心得、

其主人々々ヨリ固可申付事、

三番目ニテ、前軍ヨリ順次ヲ以行進之事、

還行之節同断、

二七五 太政官日誌刊行頒布ノ旨趣ヲ公示ス

明治元年四月五日、太政官日誌刊行頒布ノ旨趣ヲ頒布セラル、

近來太政官ニテ日誌ヲ出版シ、広ク天下ニ御布告被遊候儀ハ、上下貴賤トナク御政道筋ヲ敬承セシメ、一意

ニ方嚮スル所ヲ知り、其条理上ヲ踐行セシメントノ御仁慮ニ被為在候ニ付、諸國裁判所・諸道鎮撫使・諸藩

留主居等へ御渡シニ相成事ニ候間、大切ニ取計ヒ、遐邇辺陬末々ニ至ル迄、不洩様速ニ相達シ、右之御趣旨貫徹候様、屹度可相心得候事、

但元幕府ノ預所、元郡代・元代官支配所へハ、此度

取締被仰付置候藩々ヨリ可致通達、寺社領・陣屋向等へモ、其最寄ノ藩ヨリ可相達候事、

四月

(記)

太政官日誌ハ、二月二十日ニ刊行頒布アリ、此日頒布

ノ趣旨ヲ公示セラレタリ、

二七六 島津忠義・久光ノ檄ニ応シテ、九州諸藩勤

王二ナキヲ誓約セル答書ヲ上ル

明治元年四月五日、島津久光ノ檄ヲ西海道諸藩ニ伝フル  
ヤ、諸藩皆勤 王式ナキヲ陳ス、是日島津忠義其状ヲ奏

シ、諸藩ノ答書ヲ上ル、

二七六ノ一

当正月、徳川慶喜並會津・桑名等暴挙ニ付、九州之諸

(島津久光)

侯へ同氏大隅守ヨリ使等差立、別紙之通布告文相渡、

左候テ、口上ヲ以申入候趣ハ、於各藩追々伝聞モ有之

候通、徳川ハ勿論、會津・桑名等之党与、於伏見逆臣

之色ヲ顯シ、征討ニ被及候処、悉ク致敗亡、大坂迄モ

速ニ落城、実以

皇運挽回一同難有仕合ニ候、仍テハ於各国、勤

王補佐之志志ヲ勉励候儀ハ、申迄モ無之候得共、到此

節候テモ人心難量、方向一定之存慮承届候様、

勅諭被為 在候趣ヲ以、為致演説候処、此節使者罷帰、

(慶順、熊本藩主)

細川越中守初各侯ヨリ、別紙式拾六通請書等差出候段、

国許ヨリ申来、猶此末各藩厚親睦、同心協力

皇国ノ御為奉尽微忠度志願御座候、布告文等相添、此  
段申上候間、御執奏被下度奉願候、以上、

四月五日

島津少將

島津忠義家記

二七六ノ二

諸藩答書

此度

王政御復古、

皇室御多難之折柄ニ付、天下之列藩速ニ尽力竭忠、共

ニ翼戴

王室、上奉安

宸襟、下解民苦、

皇国之全疆ヲ静鎮スヘキノ御告諭、逐一承知仕、御同

前一際

王事ニ力ヲ尽シ候心得ニ御座候、

正月廿九日

(飯肥藩主)

伊東右京大夫

祐相印

御布告ノ旨趣敬テ拝承、種殷不肖ト雖トモ、先祖對馬  
守春實逆賊征伐以来、累世ノ遺訓ヲ守リ、尊

王ノ外他ナシ、敎賦ヲ尽シ、身命ヲ抛テ、官軍ノ偏裨ニ加ハリ、

王室ニ寇ナス者ヲ誅戮シ、

宸襟ヲ安ンシ奉ラン事ハ固願フ所、神明ニ誓ヒ決テ他心

無之候、

慶應四年戊辰二月三日

〔高橋藩主〕  
秋月長門守大藏種股花押

島津中将殿

起請文

今般於

朝廷

王政復古、

聖運開興之際變動差起、御布告之文御示諭之趣、謹て具

二伏誂仕候、勤

王之素志小子始士民共、毫末忒心無御座候、依て為後証

誓詞如件、

慶應四年二月五日

〔賴基 人吉藩主〕  
相良遠江守印花押

島津大隅守殿

御請

御布告之御文御示諭之趣、奉恭遵候、去冬

御召之砌病氣ニ付、少モ快候ハ上京之筈ニテ、先供着

坂之折柄、不凶モ野田口警衛被申付、人数差出候趣之

処、蒙

御不審奉恐入候、不肖之身候得共、逆徒誅戮蒙

朝命候ハ、大義ヲ立、聊無遲延出兵、死力ヲ尽勤

王之赤心相顕申度、偏御執成奉願候、以上、

慶應四戊辰年二月七日

〔延岡藩主〕  
内藤備後守

島津中将殿

政舉花押

〔柳川藩主〕  
立花鑑寛答書

今般以御使者御口上之趣具ニ拝承、一々御尤至極之御事、大慶仕候、且又

朝廷之御趣意御布告文御投与被下拜受、感服之至奉存候、既ニ先般以使者申上置候通、勤

王宿志之 奏功ハ、各藩並立協力之義ヲ第一ト相心得、就中於尊藩ハ諸事預御教示、厚ク奉倚頼罷在候、抑普天之下総テ、

王臣 皇土一般之義ニ候得ハ、諸国藩名ヲ異ニスルト

イヘトモ、一藩中ニテ許多之巷名有カ如ク相心得、九州ハ勿論、勤

王之列藩千里之封疆ヲ隔ルトイヘトモ、一国一家之親睦和信之熱交ヲ結ヒ、智謀器械諸資有無ヲ共ニシ、各自国旧染之弊塵ヲ洗去シ、同心協力ヲ以テ幕習ヲ感化シ、其化及ハサル藩々ニヲキテハ、天誅疊滅シテ尺地モ王土ニ非ルハナク、渾然一串之

神州ニ帰シ候テ、早ク可奉安

宸襟事ト奉存候、拙劣微忠之次第ハ、先般以使者奉伺、御賢慮置候処、此節以御使者御教示之趣、誠ニ奉敬服大慶不斜候、尔来弥以奉高諭尽力可仕候、此段以書取奉復如是御座候、已上、

二月九日

御告文謹読仕候、今般

皇威御旧復之時、勤

王尽力之忠志於有之ハ、共ニ可奉翼戴

王室段、感伏御同意奉存候、小藩微力ニ候得トモ、尊

王尽力之義ニ於テハ、(島津忠義)挙国同一致之覚悟ニ候、右御請

之義ハ、不日上京、修理大夫殿へ可申達候得共、一応

赤心御答申上置候、已後別テ御懇信緩急御示談被下候

様、深奉依頼候、猶委細両士へ申含置候、恐惶謹言、

二月十日

(副筆士)  
中川修理大夫

久昭花押

島津中将殿

此度

王政御復古之義ニ付テハ、応

召追々企上京候折柄、京師騒乱之聞有之、殊ニ徳川家暴動之趣、何共意外之次第、不堪驚愕憂苦罷在候処、去ル正月九日議定諸侯方ヨリ被奉

勅旨、御触達之趣謹テ奉領承候、然ル処私儀ハ、(小笠原長行)嫡子壹岐任職中ニ付、於

朝廷モ御不審之議可有之欵、最諸家之嫌疑深重之趣ニモ致承知、

王臣之信義不明相成候ハン事、何共迷惑痛苦之至ニ不相堪、右ニ付テハ、此頃肥前中将ヲ頼、京師之御不審等為氷解不日上京之支度中、

中将様被奉

勅諭、列侯へ御布告之件々細縷感佩仕、私今日動

王之志願大ニ得力候条、重疊難有仕合奉存候、私儀ハ

軍旅等之儀微力之事ニ付、佐賀・筑前兩侯之旨趣ヲモ  
相待致動靜候義ニモ候得共、猶其

御許様ニハ兼テ

皇國之御為筋御依頼申上置候通、至今日候テハ別テ御  
依頼申上候、然ハ君臣上下之名分ハ天地之大經ニテ、  
壹岐ニハ父子之親ミ断然及義絶、剩赤心報國之至誠ヲ  
以

王事ニ抛身命、擢誠忠候様可仕候間、宜御憐察被下度、  
猶上京之上、

修理大夫様へ懇願可仕心底ニ御座候、以上、

辰二月十三日

〔唐津藩主〕  
小笠原佐渡守

長國花押

御布告文拜見仕候、私儀隱退之身分、殊小藩微力ニハ  
御座候得共、素ヨリ為

朝廷抛身命尽忠可仕志願ニ御座候、伊勢守儀モ他念無

御座儀ニハ候得共、猶御布告文差越拜見為仕可申候、  
右御請申上候、以上、

辰二月十三日

〔前佐伯藩主〕  
毛利安房守

高泰花押

有馬慶頼答書

一輪啓上仕候、春寒兎角去兼候得共、先以益御安清被  
為涉奉欣賀候、然ハ追々伝聞仕通、徳川氏ハ勿論、會  
津・桑名等之党与、於伏見逆臣之色ヲ顯シ、被及征討  
候処、悉致敗亡、大坂城迄モ速ニ落城、実以  
皇運挽回、一同難有仕合奉存候、仍テハ於各國勤  
王輔佐之忠志ヲ磨候儀ハ申迄モ無之候得共、此節ニ至  
候テモ人心難量、勤

王否哉之存意ヲ屹度被成御承知、弥勤

王別儀無之ニ於テハ、益御親睦被下、御互ニ

王事ニ抛身命度御存慮ニ付、御家来叢田〔長尾〕傳兵衛・肥後

直次郎、態卜御差越被下、不堪雀躍、兼テ勤

王之微衷ハ御熟知之通ニ御座候得ハ、別テ

皇運挽回之際、一身ヲ以抛

王事ニ、聊奉報

天恩度至願ニ候間、微力之限り致励精尽力度、猶更御  
戮力御垂示モ相願度奉存候、先ハ御使者之御答旁宜敷  
如此御座候、頓首、

二月十四日

〔久留米藩主〕  
中務大輔

大隅守様

二白、折角時下御厭被成候様奉存候、乍末筆其後御不快如何ニ被成御座候哉、御安否モ何度、且皆々様へモ宜敷御鶴声奉希候、不日使者ヲ以御尋問可申心得ニ御座候、去月家来之者差出候節ハ、御懇之御取扱被下候由申出、深ク忝奉存候、其節モ申上候通、猶又厚御依頼申上度奉存候、扱ハ小子儀モ昨年来不快ニテ、イマタ全快ニハ無御座候へ共、押テ上京仕候、就テ一日ニテモ速ニ出帆仕度心得ニハ候へ共、何分仕度等ニテ不任心底、漸廿日出立仕候、段々及延引候、就テハ兼テ之志モ如何哉ト、其辺ニ深ク苦心罷在候、御憐察可被下候、不備、

久留米藩老臣副書

春寒之砌御座候得共、愈御堅勝被成御座、珍重思召候、尔ハ追々伝聞致候通、徳川氏ハ勿論會津・桑名等之党与、於伏見逆臣之色ヲ顯シ、御征討ニ被及候処、悉致敗亡、大坂城迄モ速ニ落城、実以  
皇運御挽回、一同難有仕合ニ御座候、仍テハ於各国勤王輔佐之忠志ヲ磨候儀ハ、申迄モ無之候得共、此節ニ

至候テモ人心難量、於此方様勤

王否哉之御存慮ヲ屹度御聞届、弥以勤王別儀於無之ハ弥御親睦被下、御互ニ  
王事ニ被抛身命度思召ニ付、御口上之趣申上候処、勤王御尽力之儀ハ、從來之御宿志御座候間、厚忝思召候、委細ハ御直書ヲ以被仰進候、

勅諭被為在候ニ付、御使者ヲ以御布告之趣奉謹承候、  
聖旨遵奉、

王室守衛之儀ハ勿論、此度徳川慶喜以下賊徒御征伐、  
宇内御鎮静之御条件一々奉畏候、何レニモ  
朝命次第馳走進退仕、奉報

天恩度從來之至願ニ罷在候、此段宜御執奏奉頼候、  
慶應四年  
(日并藩主)  
稻葉右京亮

辰二月十四日

久通花押

島津中将殿

今般御布告之旨趣謹テ奉畏候、国家之力ヲ尽、勤王仕候存念罷在候間、万端御依頼申上候、此段御請申上候、以上、



慶應四戊辰

(中津藩主)  
奥平大膳大夫

二月廿一日

源昌服花押

島津中将殿

今般被奉

朝命、普各藩へ御布告之趣謹テ拜見、件々奉畏候、大坂表意外之挙動ニヲヨヒ、於私モ奉恐入候、不肖ニハ御座候得共、至此期候テハ私親之顧念毛頭無御座、大義一途奉安

宸襟、殉

御困難尽忠仕候赤心ニ御座候、此段可然御執奏可被成下候、以上、

二月

(島原藩主)  
松平主殿頭

忠和花押

謹奉復

天ニ無二日、地ニ無二王ノ大経アルニ、往時

皇国衰弱ノ弊ニ乗シ、徳川氏兵権ヲ專ニセシヨリ以来、畏クモ奉輕蔑

朝威之罪状、君臣上下ノ名分ヲ失シ、剩ヘ日頃

王政復古之大典ヲ怨望シ、終ニ天下ノ乱魁ト成リ、

王畿二千戈ヲ動セシ逆謀顯然タルニ依リ、誠忠有志之六大藩、其他勤

王之諸侯、義兵ヲ以テ賊徒ヲ所々ニ退散セシメ、或ハ

彼ノ親従タル三藩モ、自ラ官軍ニ属シ、尔後賊魁等ヲ

誅伐シテ、早ク

皇国之鎮静ニ立到ルヘキノ旨、若シ首鼠兩端ヲ抱テ擬

議猶予スル族ハ、邪正判然タル

天裁アルヘキノ条件、謹テ奉拜読、深ク肺腑ニ銘スル

所也、抑弊邑徧小ノ離島ナリト雖、辱布告ノ命ヲ蒙リ、

欣喜不可過之、素ヨリ名分大義ノ重事、神明ニ誓テ微

忠ヲ竭シ、聊可奉報

天恩赤心也、故ニ士民等へ速ニ告諭シテ、堅ク旨趣ヲ

守ル者也、依テ奉復如件、

二月

(盛徳、五島藩主)  
五島飛驒守印

佐伯藩老臣答書

(毛利高謀、佐伯藩主)  
御布告文謹テ拜見仕候、伊勢守為上、京出立、留守中

ニ御座候得共、素ヨリ勤

王之志願ニ御座候得ハ、家臣拳テ粉骨之外敢他念無御

座候、以上、

辰二月十三日

西名兵右衛門

長道花押

勝昌花押

熊澤作右衛門

古川左近右衛門

正興花押

可韜花押

佐久間儀右衛門

府内藩老臣答書

盛承花押

今般

園田彦左衛門殿

大政御一新中、不慮之御變動被為在、誠ニ以奉恐入候、

久保田新次郎殿

就テハ御列藩報

平戸藩老臣答書

国尽忠之折柄、於弊邑モ一入奮発仕、尽微力不申候テ

御布告之御文書奉拜見候、〔松浦監〕寡君肥前守在京中ニ付、早

ハ不相濟候之处、〔天輪説、府内藩志〕左衛門尉關東ニ罷在隔絶、急速音信

速送達可仕候、乍恐勤

モ難計、此俥推移候テハ深奉恐入候間、故長門守孫増

王之誠意ハ主人累代宿志ニ御座候得ハ、家臣一統銘胆

澤虎之丞儀、左衛門尉帰国迄摂位仕、一藩指揮ヲ受、

服着罷在候ニ付、聊御趣意ニ相悖候筋無御座候、仍此

朝廷へ御奉公仕度志願ニ御座候間、既ニ

段鄙意之次第奉申上候、謹言、

朝廷へ奉願上置候儀御座候、右ニ付、今般御布告之旨

二月十六日

松浦内膳

下候、恐惶敬白、

信賢花押

慶應四戊辰二月十六日

岡本主水

松浦外記

安行花押

重光花押

岡本外記

小倉衛守

政倫花押

園田彦左衛門殿

久保田新次郎殿

方今

御大政御變革ニ付テハ、列藩為

天朝御尽力被為在候折柄、於弊邑モ一同戮力、尽丹忠

可申処、左衛門尉儀關東ニ罷在、山海阻絶、俄ニ帰国

仕候儀出来不申候処ヨリ、一藩奮発勤

王ニ決議仕、左衛門尉帰国迄私指揮ヲ受申度段、

朝廷へ奉懇願候儀ニテ、既ニ

御親兵ヲモ午聊登

京為仕置候、扱今般之御布告謹テ拜見仕候処、一々感

泣仕候儀ニ御座候、右御布告左衛門尉へ拜見為仕度候

得共、東西隔絶仕居候ニ付、急速之運如何可有御座哉、

同人帰国之上ハ勿論勤

王可仕、縦令帰国不仕候テモ、於私並藩臣共赤心報

国之外他念無御座候、依之御請如此御座候、謹言、

増澤虎之丞

慶應四年戊辰二月十六日

近篤花押

御請

從

島津中将様御布告文御渡相成候処、(木下俊憲、日出藩主) 鐵次郎儀留守中付、

乍恐私共拜見仕、一々奉感銘候、弊藩之儀先代以來抱

勤王之志罷在候得共、小藩殊去ル亥年ヨリ為幕府所抑

留、長々滯府仕候、旁不任心底候次第モ有之、無拠因

循押移候処、去ル卯冬天下一新、王政復古、早々上京

可仕旨蒙

詔命候折柄、鐵次郎賤恙差発、少々延引仕候得共、当

早春上京仕、赤心報国之素志相達、相応之御用相勤候

心底ニ御座候、然処去月近境馬城峯へ浮浪之徒屯集之

儀有之、領分中民心動揺鎮静之為帰邑奉伺候処、本月

五日御暇被下置、同六日京地出立、西帰旅中ニ御座候

得ハ、近々下着次第御布告書相渡可申候、勿論前件之

通、鐵次郎始於国論モ同心勤

王之段ハ、先私共ヨリ御請奉申上候、此段宜御執成奉

頼候、以上、

木下鐵次郎家来

帆足蔵人

慶應四年 二月十八日

通去花押

宮崎直記

敬之花押

杵築藩老臣答書

方今

王政御復古之大典被為 行候折柄、京師彼是御混雜之儀モ被為 在候付テハ、為

天朝諸藩共ニ戮力尽忠候様、就テハ弊藩之決議モ御承知被成度、且於京師

修理大夫様被為奉

勅諭、

大隅守様へ被

仰進候御旨趣ニ依テ之

御布告文、主人へ御直達可被成筈之処、當時〔松平親良〕中務大輔並世子但馬守留守中ニ付、拙者共へ御達之趣、謹テ奉

拝承候、右

御書面ハ中務大輔へモ申達候様、但馬守方へ早速可申遣候、尤弊藩之決議

朝廷遵奉ハ素ヨリ之儀、只大政之被為 行候処ニ随從致候儀、則勤

王卜奉存候、乍併小藩之儀ニ付、廉立候儀モ難出来候

付テハ

朝廷 御聞込モ如何程ニ可有之哉卜深心痛罷在候、尤從

朝廷御達之儀モ御座候得共、中務大輔江戸表ニ罷在、遠路隔絶、久々書通モ無御座候付、但馬守儀不取敢伺

天氣、且相応之御用モ相勤度心底ニテ致上京候、右ニ付於一藩モ聊別心無御座候、此段宜御執成可被下候、以上、

慶應四戊辰年

二月十九日

坂西武兵衛

正雄花押

中根源右衛門

正脩花押

園田彦左衛門様  
久保田新次郎様

小倉藩老臣答書

今般以御使者

御勅諭之趣、謹テ奉拝承候、固ヨリ為 皇國微衷ヲ尽シ、賊徒誅戮

皇威相耀候様因議決定罷在候、此段〔小笠原忠茂、小倉藩主〕豊干代丸幼年ニ付、

私共ヨリ御請申上候、以上、

慶應四戊辰年二月廿三日

小笠原織衛

長民花押

小笠原内匠

長頤花押

小笠原甲斐

花押

小笠原出雲

長匡花押

猶以小笠原〔貞正、小倉新田藩主〕近江守儀〔長教〕ハ同様之決議罷在候、同幸松丸〔昌季、安志藩主〕ハ

ハ早速可申達候、同加賀守儀〔辰義〕ハ當時在江戸ニ候得共、

時〔天分恩〕枝表へ相残候家来之分ハ、弊藩同様決議罷在候、以

上、

御請書

此節

御勅諭被為在候由ニテ、御布告文謹テ一々拝承仕候、

於弊藩從來勤

王一般之本志御座候処、方今

朝廷多難之日ニ当テハ、猶更勉勵可仕心得ニ御座候、  
伊豫守〔久留島通賢、森藩主〕上京中ニ付、右之段以急飛可申達候得共、其内  
從私御請書如斯御座候、謹言、

久留島伊豫守家老

慶應四辰年二月廿六日

通尚花押

園田彦左衛門殿

久保田新次郎殿

筑前藩老臣答書

大隅守様御口上之趣、具ニ御承知被成候、被仰進候通、

是迄

尊王之御居リ御動可被成様モ無之、

朝廷之御為御忠勤ヲ被尽候思召ニ付、右之辺程能及御

答候様御含被成候事、

二月

小川民部

櫛橋内膳

御布告書謹テ奉拝見、

御趣意之件々難有奉感佩候、誠ニ普天之下、率土之濱、  
王民王土ニ非ルハナク、君臣上下之名分ハ古今之大經  
通義ニテ、

王家ニ勤ムヘキ儀ハ勿論之事ニ御座候、況ヤ

天朝多難之際ニ当テハ、為臣子者尚更尽力竭忠、可奉  
報

天恩之秋ト奉存候、今度東賊潰走、近畿穩靜ニ付テハ、  
追々天日清明可相成候得共、若シ今日ニ至リ命ヲ拒ミ、  
賊ニ党シ、或ハ首鼠兩端ヲ抱ク族ハ、速ニ誅裁シ、上  
奉安

宸襟、下万民塗炭之苦ヲ解キ、勤

(大村純熙、大村藩主)

王之実効ヲ顯シ度志願ニ罷在候、丹後守へ早速可申聞  
候得共、上京中ニ付、乍恐私共ヨリ御請迄通奉申上候、  
頓首謹言、

大村丹後守家来

二月

大村右近

直行花押

稲田中衛

熙正花押

肥後藩答書

一細川越中守様ヨリ御請之儀ハ、(細川護美)  
同氏良之助殿ヨリ直書  
ヲ以

中将様江被申上候事、

右襄田傳兵衛・肥後直次郎ヨリ差出、

書中所謂直書原記ヲ佚ス、

肥前藩答書

口上手覚

御口上之趣申達候処、遠路預御使者忝被存候、勤

王事ハ平生之素志ニテ、尽力之儀不能申述候、当時肥  
前守上京中ニ付、御使者之趣申越儀御座候、此旨宜及  
御答候様被申付候、

答書中、花押ヲ署スルハ、原書ヲ存スルモノニ係リ、

其花押ト書スルハ、原書ナキモノニ係ル、又布告ハ

正月二十六日遣使ノ条ニ載セタリ、参看スヘシ、

二七七 藩士海江田彦之丞外一名内国事務局雇ヲ

命セラル

明治元年四月五日、藩士海江田彦之丞外一名、内国事務局雇ヲ命セラル、  
二七七一

薩州

海江田彦之丞

岸良七之丞

右内国事務局当分御用有之候条、御雇被 仰付候事、

二七七二  
(記)藩記ヲ載ス、

右太政官代内局より辰四月五日御呼出ニ付、御留守居  
附役田中清之進罷出候処、岩倉少将様より被成御渡、  
御請書差上候様被成御達候旨承知之段、内田仲之助よ  
り主殿殿江首尾書有之、

二七八 長崎裁判所各国ニ属スル支那人我ニ対シ

法ヲ犯サハ国律ニ処スルコトヲ通牒ス

明治元年四月五日、長崎裁判所各国領事ト議定シ、支那人ノ各人ニ隸スルモノ、我ニ対シテ法ヲ犯サハ、国律ヲ以テ之ヲ処断スルコトヲ通牒ス、

各人ニ属セシ支那人、日本人ニ対シ法ヲ犯セシモノ

ハ、日本ノ国律ヲ以処置セン事、当月五日原註 西洋 四月廿七日 各  
国岡士ト決議イタシ、且其他当地居留ノ支那人ト不致  
混同様取調、分別ヲ立候ニ付テハ、其筋掛ノ者ニテ、  
各国付属支那人共ノ儀モ、厳密ニ人別相改候間、貴国  
従民ヘモ此段被相達度、右ハ書翰ヲ以致告知候様、足  
下ノ希望ニヨリ申進候、謹言、

慶應四年辰四月九日

大隈(重信)八太郎

佐々木(高行)三四郎

井上(重)聞多

町田(久慈)民部

蘭岡士

E. P. Tombrink

エスクワイル

長崎県記

○按スルニ、本件宜ク議決ノ条約書アルヘシ、而シ  
テ之ヲ俟ス、其訂議ノ顛末モ亦見ル所ナシ、因リテ  
此書翰ヲ填ス、○大隈重信以下四人並ニ長崎裁判所  
判事ナリ、但シ重信嚮ニ京師ニ出テ、三月十七日ヲ  
以テ、参与外国事務局判事ニ任シ、横濱駐在ヲ命セ  
ラル、蓋シ其報未タ長崎ニ達セス、故ニ同ク名ヲ署

セシナリ、

二七九 幕府目付黒川嘉兵衛ヲ津藩ニ預ケ後命ヲ

俟タシム

明治元年四月五日、徳川氏ノ臣黒川嘉兵衛〔雅敷〕大華、目付役ヲ津藩ニ  
監護、後命ヲ俟タシメラル、

(記)

徳川氏ノ目付黒川嘉兵衛哀願ノ内命ヲ含ミ、二月初旬  
江戸ヲ出立シ、微行シテ京師ニ入り、同二十四日書ヲ  
本藩邸及ヒ長州・尾州・越前・土州ノ諸藩ニ投シ、又  
同二十七日津藩ニ赴キ、其主ノ為メ救解ヲ乞フ、津藩  
黒川ヲ留メテ其書ヲ上ル、本月ニ至リ旨ヲ請フ、乃チ  
本日令シテ之ヲ監護シ、後命ヲ俟タシメラル、八月ニ  
至リ釈サレテ江戸ニ帰レリ、其哀願書ヲ載ス、

二七九ノ一

寡君政權奉還之砌、諭群臣云、祖宗已來三百年繼承之  
政權、一朝ニシテ奉還致候ハ、如何ニモ遺憾之様ニハ  
候得共、方今海外之交際盛ニ相成候得ハ、政令一途ニ  
不出候テハ、

皇國ヲ維持シテ海外之國ト可並立事アタハス、還テ彼

カ悔ヲ受ル事眼前之義ニ候得ハ、政權ヲ奉還

天朝、政令一途ニ出テハ、國家之治乱人心之居合關係  
尤大矣、平心ニシテ勸考スルニ、威權之有ル所ニ從ヒ  
政權ヲ与へ、政令之一途ニ出候ハ自然之理也、雖然吾  
皇國ハ名分國体ト云モノ有之候得ハ、政權ヲ奉還

天朝、

天朝ヨリ一途ニ出候様ニ無之候テハ、上下之名分不相  
立、人心之居合モ不宜候間、政權ヲ奉還

天朝、謹テ臣下之分ヲ守リ候社、君臣之大道ト可申モ  
ノニ候、乍併知ラサル者ヨリシテ觀之ハ、諸藩之為ニ  
兵威ヲ以被脅、無拋政權ヲ奉還候杯ト申欵モ不知候得  
共、左様之義ニハ無之、所謂兵ハ凶器、容易ニ不可動、  
討之テ天下治ハ可討、討之テ天下乱ハ不可討訊ニハ無  
之哉、又政權ヲ奉還シ、身ヲ安ニ逃ル杯ト申者モ有之  
欵モシレス候得共、是以左様之義ニハ無之、今日ヨリ  
後ハ猶更勉勵致シ、君臣一致、上下不隔絶候様心懸、  
万事

天朝之御不都合不被為在候様不致候テハ不相成候間、  
第一幕臭ト云モノヲ去リ、諸藩へ対シ候テモ叮嚀ニ心  
ヲ用ヒ候様ニ致シ、仮初ニモ愾忽ハ無之様可致ト云々、



又去十二月九日大御變革被 仰出候節、會・桑之者、  
旗下之士大ニ沸騰致候ニ付、循々トシテ相諭、既ニ群  
臣ヲ庭前ヘ呼寄、是非兵ヲ挙ルナラハ、此方之首ヲ切  
テ後ニ可拳兵ト迄モ被申聞候、又正月三日於伏見駢戰  
争之事承リ、深ク奉恐入、大坂城ヲ尾・越ニ家ヘ托シ、  
速ニ東下致シ、又江府ニ歸リ候テモ、殊之外恭順致シ  
居、決シテ無佗心罷在候、乍恐奉対

天朝、聊モ御叛キ申上候杯ト申義ハ、決シテ無御座候  
得共、只座右之奸臣共、己カ非ヲ蔽ヒ、尽ク壅閉イタ  
シ、伏見戰爭之事スラ多クハ包ミ隱シ候事ト相見ヘ、  
天朝ヨリ被 仰出候趣トハ、少シク齟齬イタシ居候様  
ニ奉存候、既ニ板倉伊賀杯モ時情ヲ不解、今般  
天朝ヨリ御追討ト申ハ何等之事ニ候哉、況又朝敵杯ト  
申ハ、以之外之事ニ御座候、決シテ

天朝ヨリ討手ヲ受ル之理ナシト被申居候由伝承仕候、  
左スレハ伊賀スラ情実ヲ不弁様ニ致置候状ト奉存候、  
其故ハ前文申上候通り、皆奸臣共己カ罪ヲ蔽ハン為、  
都テ潤飾致シ置候故之事ト相見ヘ申候、誠ニ可惡奸臣  
共之所業ニ御座候、其故ハ寡君在橋府時ヨリ、第一ニ  
尊

王之道ヲ尽シ、諸藩ヘ対シ候テモ、如今日愚ナル事ハ  
無之義ハ、路人モ所知、何ソ独リ先ニ智ニシテ後ニ愚  
ナル哉、徳川氏之大統ヲ継候後、前後左右其人ニアラ  
ズ、是ヲ以今日之場ニ到リ候義、御推察可被下候、寡  
君之生質極テ実直、決シテ世ヲ欺キ候様之人ニハ無之、  
去冬十月政權奉還之折モ、薩州之小松帶刀殿始夫々親  
敷御懇談モ有之、種々御託旨モ御座候由承知致居候、  
依之觀之ハ、素ヨリ異心ヲ挾ミ候訳ニハ無之、只是迄  
之派党ヲ破リ、同心協力、共ニ

皇国ヲ維持シ、海外之国之侮リヲ不受様ニトノ旨意ニ  
御座候、此義ハ小臣共ヘモ親敷被申聞候間、兼々承知  
仕居候得共、今般之一義ニ至リ候テハ、真ニ奉恐入候  
次第、小臣共ニ至迄手足之所厝ヲ不知、是ヲ以只管哀  
訴歎願之外無他事候間、是迄之情実委曲ニ相認奉呈左  
右候、何卒

太守様へ御披露被下置、別紙歎願之旨御聞届被成下候  
様、御周旋之程偏ニ奉懇願候、頓首謹言、

徳川家来

辰二月

有志共

## 別紙二通

寡君、宇内之形勢、人心居合ヲ洞察シ、政權ヲ奉還  
 天朝、広天下之衆議ヲ尽シ、天下之公論ニ從ヒ、  
 皇国之基本ヲ立、与海外之國可並立之旨意ヲ以、及  
 奏聞候処、於

天朝モ御尤ニ思召被

聞食候処、其後親藩・譜代之内臣子之情不忍之論ヲ立、  
 挽回之議ヲ起シ、諸方會議致候者有之哉ニテ、人心洶  
 ヲ所向ヲ不知ニ至リ候、当此時当路之有司共寡君之旨  
 意ヲ熟察シ、速ニ天下ニ貫徹致候様大尽力可致筈之処、  
 不及其儀、盲然トシテ一日之無事ヲ安シ、却テ諸藩所唱  
 之説ヲ喜ヒ、因循姑息日ヲ度リ候処、去十二月九日於  
 朝廷非常之御變革被 仰出ニ及テ、始テ驚愕致シ、時  
 事之因テ来ル所ヲ不弁、憤然トシテ大ニ激動致シ、不  
 容易之形勢ニ立至リ候ニ付、寡君大ニ憂之、痛ク加説  
 論、一先下坂致ニ付、当路之有司モ亦鎮撫致居候得共、  
 同月廿八日、從江戸表当路之有司兩三輩上坂致シ、於  
 江府薩州侯之浪人乱暴之始末申立ニ及、於是奸曲之有  
 司共志ヲ得、夫ヨリ大ニ切迫致シ、種々之流言ヲ以寡  
 君ヲ惑シ、寡君上京之機會ニ乘シ、遂ニ正月三日之事

二及、对

朝廷奉恐候而已ナラス、尾州老公・越前老公・土州老  
 公・藝州侯〔徳川慶勝〕・肥後侯〔松平慶永〕・藤堂侯〔山内豊信〕、是迄之御尽力モ

天朝ニテ深 思召之被為在候モ皆水泡ニ属シ、剩ヘ寡  
 君ヲ不忠不幸之域ニ陥入、徳川氏之鬼ヲシテ永ク血食  
 ヲ絶シムル之場ニ至ラシメ候ハ、其罪何ニ致有ル、当  
 路之有司共不残割腹シ、罪ヲ天下ニ謝スルニアラスシ  
 テ、何ヲ以再ヒ天下之人ヲ見ル哉、然ルニ今日ニ至リ  
 猶敖然トシテ其位ニ座シ、其政ヲ議シ、諛ヲ献シ、偽  
 ヲ呈シ、寡君ヲシテ京師之情態ヲモ不知、諸侯之向背  
 モ不察シメルニ至ル、畢竟己カ是迄之敗ヲ補ヒ、是迄  
 之過ヲ蔽ハン為ニ世ヲ欺キ、人ヲ誣ニ至ル、其罪天地  
 之間ニ容ルヘカラサル者ニ候得ハ、小臣輩ニ至ル迄切  
 齒扼腕ニ不堪罷在候得共、何分微力ニシテ不及事、愧  
 死千万奉存候、何卒神祖三百年来之厚誼ヲ被思召、有  
 志之諸侯方同心協力、此奸賊ヲ御除被下、寡君之冤罪  
 ヲ解キ、徳川ヲシテ再々世々面目アラシムレハ、土地  
 人民ハ勿論、

天朝之聖断ヲ仰キ、諸侯之公論ニ依、如何様共御所置  
 ヲ蒙リ、マシテ小臣共ニ於テハ、如何様罪状被

仰付候共、千載之下死シテ無遺憾奉存候間、何卒小臣共不敏之情実深御汲取被下置、右歎願之旨意

天朝へ被仰立、御同志之諸侯方御申合被下、当路之奸賊御除被下置候ハ、神祖之神靈地下ニ有テ如何計欵御感慰モ可有之、マシテ御尊藩之御先靈ニ対シ被為遊候テモ、乍恐御孝道モ相立候御儀ト奉存候得ハ、幾重ニモ懇願之条御聞届被下置候様、昧死奉歎願候、頓首々々死罪々々、

辰二月

徳川家来

有志共

別啓

小臣共

去江府之後、当月十二日頃、寡君東叡山ニ謹慎罷有、当路之有司共モ追々退職被申付候由伝承仕候、畢竟寡君三百年來繼承之政權、一朝ニシテ奉還仕候義ハ、寡君真之英断ヨリ出候事ニテ、乍恐千載之美事無尚ト奉存候、然ルニ当路之有司共、寡君高大深遠之意旨ヲ不察、因循姑息、遂ニ今日之場ニ立至リ、寡君有功テ却テ不功ト成リ、有忠テ却テ不忠ニ陥入候義、如何ニモ

臣子之分ニ於テ、小臣輩ニ至ル迄其罪不容誅ト奉存候、依之今日寡君之心情ヲ推シ量リ、涕泣悲歎罷有候、嗚呼天地父母言之可訴ナシトハ乍申、是等之儀深ク御憐察被下置、何卒政權奉還之一義、所謂一功掩百罪之論ニ御基キ、乍恐

天朝へ御詫被下置、寡君之冤罪御解被下候ハ、寡君ハ勿論小臣輩ニ至ル迄、如何計欵難有仕合奉存候、加<sup>小臣輩ニ於テハ如何様之罪科被</sup>仰付候共、決シテ無遺憾奉存候間、幾重ニモ不愆之情御垂憐被下置、右歎願之旨御聞届被成下候様、偏ニ奉懇願候、頓首謹言、

辰二月

徳川家来

有志共

【参照】

黒川大華筆記

明治元辰年二月一日、從西城使者来出頭可致旨ニ就、

敏忠、若年寄

即刻西城へ出頭、於柳間參政平山圖書頭出會、京都・

伏見等ノ事件ヲ述、迂生ノ所存訊問有之ニ就、方今ノ形勢ニ立到、實際ハ未知ト雖、追々伝聞痛心ニ不堪、悲歎罷在候、仍テハ差向寡君ニハ堅固ニ謹慎恭順被致、兼テ尽サル、所ノ勤 王ノ真志ヲ表サレ、藩士ハ尚更

一同戒慎、徳川家累代ノ祭祀血食ヲ不絶ノ哀訴歎願ニ及、死ヲ以其分ヲ尽スノ外不可有之、若毫釐モ異心ヲ

抱テハ、大禍立所ニ到、寡君勤 王ノ美旨、君家累世

ノ鴻業一時空ニ帰スヘシ、然時ハ臣子ノ分決テ不相立、

死ストモ地下ニ君家ノ列位ハ勿論、各家祖先ニモ見ユ

ル顔ナカルベシ、徳川主従ノ務、今日ニ至テハ謹慎恭

順ノ外ナスヘキ策ナカルベシ、然ハ迂生輩ハ数ナルヲカ

ル身ト雖、速ニ出京哀訴歎願及フヘキナリト答及候得

ハ、圖書頭姑黙然ニテ、頓テ暫時控在ルヘキ旨ヲ述座

ヲ立、入換閣老小笠原壹岐守出席、目付役可相勤君命

ヲ相達、夫ヨリ同人ニ随ヒ閣老用席ニ出、寡君ニ接近、

如最前愚意陳述及、寡君ニモ謹慎恭順ノ外覚悟ナシ、故

ニ帰東セシナリ、其段ハ痛心アルヘカラス、唯速ニ上

京歎願ヲ急クヘキ旨被申出、平山圖書頭ヘ直書ノ願案

被申付、同月四日夜寡君直ニ歎願書三通渡サレ、同五

日東海道へ出立仕候、

一大目付堀錠之助・目付平岡庄七郎庄七温徳ニモ、迂生同様寡君

ヨリ直書ヲ受取、中山道、甲州筋両手ニ分レ、上国ニ

向、迂生ニ二三日後レ発足及候由、然ニ何等ノ旨趣有

リシヤ、二名共江戸ノ地三十里ヲ不出、姑途中二日間

探リ立帰、寡君東叡山へ立退謹慎被致候跡、西城ノ用  
(東京都台東区)  
向ヲ取扱候趣ニ御座候、

一江戸出立ノ前ヨリ連日ノ雨ニテ、街道筋川々水溢、二

月十一日ノ夜駿府ニ到、於同所自分願書取調、十六日

同所ヲ出、大村家先登ノ兵士ニ追々往逢、深ク怪ミヲ

受、如何ナル都合ニ立至ヘクモ難計、因テ遠州掛川ヨ

リ横道ニ入、秋葉山麓ヲ經參州ニ入、鳳来寺山ノ麓ヲ

廻リ、同国豊川渡口ニ出、勢州ノ海船ニ乗組、二月二

十一日同国大港へ上陸、神廟ヲ拜シ、山田ニテ知己ヲ

訊、案内ヲ頼、刀ヲ脱シ、体ヲ変シ原註 作州津山藩ノ印物ヲ借用、同藩小者体ニナル

伊賀路ヨリ大和路ヲ經、二月二十四日ノ夜京都ニ入、

昼夜奔走、薩・長・尾・越等ノ諸家へ哀訴状ヲ投シ、

二十五日夜京地ヲ出、元ノ道路ヲ經、二十七日深夜勢

州津ノ城下旅店ニ着、藤堂家国事掛周旋方戸波明次郎・

吉村長兵衛・藤井鼎助・山田耕作等へ書状差出、無程

耕作一名入来、哀訴ノ旨趣演述、書類相渡、同二十八日

曉津ヲ去、山田表ヲ心指数丁野外ニ出ルニ、津藩川島

石蔵来リ、哀訴状ハ主人在京ニ就、急使ヲ以先刻差立

ルナリ、執計ヒノ可否報知有迄、当地ニ在留ルヘク

旨申聞、禅刹東雲寺ニ入、兩日休足、夫ヨリ津ノ西北

明治元年(1868)

一里余ヲ隔、河曲郡川邊村庄屋川邊李左衛門方へ止宿ヲ換フ、

三月初旬、黒川嘉兵衛外二人、不容易御嫌疑有之者共ニ付、嚴重警衛可仕旨御達有之段、藤堂家ヨリ相達、

八月中旬迄謹慎罷在、同月二十日頃從京地恩免被仰

出旨、藤堂家ヨリ相達、二十二日頃彼地出立、九月七日

日江戸弊居へ帰着ス、

一寡君ノ直書三通ノ内、老通ハ土州侯ニ捧ル為、投書ニ

添テ後藤象二郎旅宿へ差出、老通ハ津ヨリ東歸ノ節、

駿府小休所ヨリ寡君附人梅澤孫太郎(亮、水戸藩士)・新村猛雄輩へ向

ケ密封ニナシ差戻シ、老通ハ迂生手元ニ秘シ置ノ処、

其後類焼ニテ、直書及ヒ在津中ノ留記等一切烏有トナ

レリ、

二八〇 肥前邸へ参伺公卿・諸侯等参集ス

【参照】

大久保利通日記

明治元年四月

五日

一出殿、得能一条談合之上相伺、出府被 仰出候、太政官へ出席、會計方一条議事有之、

退出懸肥前御邸江参上、今日君公・阿州侯・公卿方ニハ、岩倉卿・徳大寺公・萬里小路卿御参集也、

二八一 諸藩兵ノ操練ヲ大坂城ニ天覽ス

明治元年四月六日、諸藩兵ノ操練ヲ大坂城ニ天覽アラセラル、

(記)

本日卯ノ刻過

御発轡被為 在、各藩ノ兵隊ハ、兼テ御沙汰ノ有シコ

トナレハ、早且ヨリ城中ニノ廓ニ揃ヒ屯集セリ、辰ノ

刻城中本丸操練

天覽所へ

着御被為 在、直ニ第一兵隊薩州・藝州・越前ノ人数

各隊列ヲ整へ、令ニ随ヒ仮ノ操練場ニ進ミ、運動発砲

ヲナシ、終テ退ク、次テ第二兵隊長州ノ人数、次テ第

三兵隊細川・柳澤・北條ノ人数、イツレモ順序ヲ以テ、

操練場へ代ルく相進ミ、運動発砲ヲ為ス、右操練終

リテ各藩兵隊へ酒肴ヲ賜フ、御沙汰ノ次第左之通、

今日調練大儀ニ被

思食、聊酒肴ヲ下賜候事、

右銃陣

叡覽悉ク相濟ミシ後、

御歩行ニテ天主台等

御巡覽被為 在、夫ヨリ御馬見所へ

臨御、俄カニ乘馬

天覽可被為 在旨被 仰出タリ、此ニ於テ公卿・諸侯

各馬ヲ御馬場へ引寄セ、乘馬ヲ始メタリシニ、大ニ

叡慮ニ叶ハセラレ、一同何レモ驅ヲ逐ヒ見セヨトノ

綸言在ラセラレ、頻リニ驅ヲ逐ヒナトシテ、

天覽ニ供シ奉レリ、未ノ半刻、城内

御発轡、御都合能

還幸被為 在、此日御行列之次第ハ左之通り、

先陣 尾州兵隊百人

口附

細川差次藏人 侍二人 下部一人

同

毛利謙岐守 從者 同上

同

市橋下總守 從者 同上

同

北條相摸守 從者 同上

同

松浦肥前守 從者 同上

同

中御門大夫 從者 同上

同

西洞院大夫 從者 同上

同

島津淡路守 從者 同上

同

三條西少将 從者 同上

同

今城宰相中將 從者 同上

同

三條西中納言 從者 同上

中軍

御旗持手

奉行

口附

壬生前修理権大夫 從者 同上

明治元年(1868)

口附  
正親町三條前大納言從者同上

高辻少納言

御板輿仕丁四人  
八瀬六人

大原左馬頭

石野大夫

口附  
中山前大納言從者同上

堀川新三位

富小路前中務大輔

裏松中務權少輔

口附

三條大納言從者同上

雨皮持 二人

虫鹿豊後守  
御衣櫃 二合

八瀬四人

御医

西尾土佐守

御馬口附二人

脚立持 二人

福井豊後守

掛り

松室丹波

非藏人

吉田淡路  
藤木但馬  
佐々木能登  
鴨脚出羽  
大賀上総

三催

北面一人

岡本近江守

御茶弁当

御水桶

持人 四人  
御台持 二人  
雨皮持 二人

御膳番 藤木右衛門尉

御厨子所御用長持一棹

御用桶持人八人

大隅美作守  
小谷早太手下代二人  
下部二人

後陣

口附  
廣幡内大臣持人二人  
下部一人

同

錦織刑部卿從者同上

同

千種侍從者同上

同

勘解由小路弁從者同上

同

東園大夫從者同上

同

五辻大夫從者同上

同

織田出雲守從者同上

同

小出伊勢守從者同上

同

加藤能登守從者同上

同

松平圖書頭從者同上

同

池田攝津守從者同上

不參 同  
德川元千代從者  
島津淡路守兵隊五十人  
毛利讚岐守兵隊五十人

【参照】

土方久元日記節録

四月小六日 曇

主上今日城内ニ 行幸、練兵 觀覽被為在候、三條公  
ニモ供奉ニテ、早朝ヨリ御出馬被為在候ナリ、

二八二 諸侯ニ令シテ其家眷及ヒ臣隸ノ江戸ニ住

スルモノヲ封地ニ移ス

明治元年四月七日、諸侯ニ令シテ、其家眷及ヒ臣隸ノ江  
戸ニ住スルモノヲ封地ニ移ス、因リテ其已移未移等ヲ具  
申セシメラル、

今般

王政御一新、殊更当節関東へ進軍ニモ相成候事ニ付、  
元幕府之制度ヲ以、諸侯家族并家来共定府罷在候面々、  
国元在所々々へ速ニ引取被

仰付候ハ勿論、右

御沙汰ヲ不待、帰順ノ道相立、疾速引取候向モ有之哉  
ニ相聞へ、尤ノ次第ニ候、就テハ御一新後引払又ハ只  
今居残り等委細之儀、来ル十二日迄ニ内国事務局へ申  
出候様被  
仰出候事、

但十二日以後引払之向ハ、其節々更ニ可届出候事、

四月

追テ、主人在国在邑之向ハ、道程遠隔急速取調難相  
叶儀等モ可有之候ニ付、右御布令速ニ申達、精々相  
調可届出候事、

官中日記・徳川茂  
承・黒田長知家記

(記)

四月十二日ニ至リ、江戸在留ノ者悉ク引払タル旨ヲ稟  
セリ十二日  
参看



明治元年(1868)

〔表紙〕

忠義公史料 明治元年四月二

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

目録

- 一 諸侯以下ニ令シ、其封邑及ヒ旧幕府預地ノ地籍・租額ヲ録上セシメラル四月七日
- 記 達書并ニ郷村高辻帳写
- 一出軍人旅行心得ヲ達セラル四月八日
- 記 達書
- 藩記
- 一 棚倉藩別邑倉廩ノ拆封ヲ許サル四月八日
- 記 棚倉藩敷願書并指令
- 一 東久世中将ニ命シテ欧米各国ニ派遣ス九月四日
- 記 令達
- 東久世通禧書翰
- 汾陽次郎右衛門届書
- 一 大久保一藏ニ拜謁ヲ賜ヒ、京都ノ事情ヲ奏上セシメラル四月九日
- 参照 大久保利通日記節録
- 一 私ニ仏体ヲ破毀スルヲ禁シ、其措置ヲ稟請スルヲ令ス四月十日
- 記 御沙汰書
- 参照 樹下茂國口供節録
- 一 銅会所ヲ大坂ニ置キ、人民ノ私ニ之ヲ販売スルヲ禁セラル四月十日
- 記 達書
- 土州藩進達書并別紙(住友吉右衛門願書并ニ算勘書)
- 一 在京諸藩兵ニ日時ヲ定メ操練ヲ行ハシム四月十日
- 記 諸藩操練日割達書
- 参照 嵯峨實愛手記節録

一本藩京都守衛方限ヲ稟ス四月十日

記 上申書

京極佐渡守・稻葉右京亮へ御沙汰書

但帳類美濃紙ニ可相認事、  
右之通被

仰出候間、不洩様可相達事、

四月

(按)本藩ノ稟申ヲ送ス、

二八三 諸侯以下ニ令シ、其封邑及ヒ旧幕府預地

ノ地籍・租額ヲ録上セシム

明治元年四月七日

明治元年四月七日、諸侯以下ニ令シ、其封邑及ヒ旧幕府

預地ノ地籍・租額ヲ録上セシメラル、

一諸国万石以上以下私領並寺社領共、是迄幕府へ差出候

振合ヲ以、村高帳写相添、急速民政役所へ可差出事、

一諸国之内、元幕府ヨリ預所並元郡代・元代官支配所、

藩々へ取締被

仰付置候向共、左之帳類写相添、急速民政役所へ可差

出事、

但御預所無之向ハ、其旨可申出事、

村高帳

昨卯年取箇帳

昨卯年郷帳

村鑑帳

村高帳

是ハ高、国・郡・村名一村限りニ認メ、郡限寄・国

限寄書付可差出事、

昨卯年取箇帳

是ハ、昨年定免・破免・檢見取・本途・見取・段高

流作場トモ取米ヲ定メ、其筋へ伺候帳面之写可差出

事、

昨卯年郷村帳

是ハ、卯年高取米ヲ記シ、五ヶ年平均免ヲ認、小物

成・諸運上・冥加・高掛物之類モ認有之候一村限帳

也、

村鑑帳

是ハ、高・村名モ記、家數・人別・男女之訳・牛馬

一高三百八拾四石九斗壹升三合 藤 卷 村

員數・山川・川除・堰樋類・溜池・用養惡水路・道橋

内 三拾四石六升八合 同所新田

並御普請所・自普請所・寺社・米之津出場・男女余

一高貳百五拾五石六斗九升五合 藤 新田 村

稼以上四字疑ラクハ錯誤ナラン・山林・土地之様子、其外書記候モノ、

内 九石六斗三升貳合 同所改新田

右之通、帳面類旧幕領地方掛之役々、兼テ心得居候品

一高百石五斗五升七合 本田新田 村

々之事、

四月

民政役所

按スルニ、本件諸藩ノ上申、内国事務局叢書中ニ存

内 五拾五石九斗九升貳合 同所改新田

在スルモノ、高田・亀山・高槻等ノ數藩ニ過キス、

一高八拾五石五斗九升九合 砂 山 村

旧幕府ノ預地ニ至リテハ、唯彦根藩アルノミ、而シ

一高百六拾五石貳斗貳升五合 四ツ屋 村

テ又副書ヲ存シテ本書ヲ佚ス、之ヲ内務・大蔵二省

内 壹石六斗五升六合 同所改新田

ニ質セトモ詳ナラス、因リテ高田藩郷村帳及ヒ彦根

内 一高千八拾石六斗五升九合 中屋敷 村

藩副書ヲ収録シテ、其一班ヲ示ス、

内 三百四拾壹石三斗貳升四合 同所改新田

二八三ノ一

郷村高辻帳写

越後国頸城郡之内 五百八拾箇村

内 一高六拾七石五升 牛池 新田

内分村六箇村

一高五百貳拾六石四斗六升六合 大豆新田 村

一高百九拾九石八斗七升四合 土 橋 村

内 一高五百貳拾六石四斗六升六合 大豆新田 村

内

六拾三石六斗六升四合

同所改新田

五拾五石壹斗三合

同所改新田

一高拾壹石六斗九升

林道寺分新田

一高百七拾壹石八斗三升壹合

瀧寺村

一高三拾九石五斗壹升八合

宮野尾村

四石四斗壹升八合

同所改新田

内

貳石六斗壹升九合

同所新田

一高九百壹石壹升九合

飯井村

一高九拾五石五斗八升壹合

上正善寺村

八拾石九斗壹升九合

同所改新田

内

壹石五斗

同所改新田

一高八百三拾石七斗七升八合

大貫村

一高五拾六石四斗六升四合

中正善寺村

百七拾三石八升三合

同所改新田

内

壹石四斗三升三合

同所改新田

一高貳拾六石五斗五升七合

湯谷村

一高八拾八石三斗三合

下正善寺村

壹石壹斗貳升

同所改新田

内

貳石五斗九升

同所改新田

一高三拾貳石九斗五升貳合

福岡新田

一高六拾五石九升

宇津尾村

六斗五升四合

同所新新田

内

壹石九斗六升九合

同所改新田

一高四拾三石五斗七升貳合

十二原新田

一高三百三石九斗貳升五合

岩木村

拾壹石三斗五升貳合

同所改新田

内

拾石貳斗五升壹合

同所改新田

明治元年(1868)

一高三拾貳石六斗六升八合

高畑新田

内

拾石貳斗貳升八合

同所新新田

一高六百九拾三石四斗五升

富岡村

内

三拾四石五斗五合

同所新田

拾七石三斗貳升

同所新新田

一高九百五拾七石八斗六合

木田村

内

六石六斗壹升八合

同所新田

一高百貳拾七石四斗九升五合

塩屋新田

内

貳拾貳石八斗七升九合

同所改新田

一高四拾貳石四斗六升八合

轟木村

内

貳拾壹石八斗三升四合

同所新田

一高百石八升壹合

至徳寺村

内

三拾貳石貳斗壹升貳合

同所改新田

一高貳拾壹石四斗三升四合

安國寺村

内

壹石八斗八升三合

同所改新田

一高三拾石五斗貳升四合

虫生  
岩戸村

内

壹石

同所改新田

一高貳拾五石八斗四升

國分寺村

一高拾九石貳斗七升三合

居田村

一高三百拾五石三斗四升三合

薄袋新田

内

三拾八石壹斗六升壹合

同所新新田

拾九石貳斗

同所改新田

一高貳拾九石九斗四升八合

石橋新田

内

九石貳斗七升壹合

同所新新田

一高三拾石八斗壹升四合

儀明村

内

四石九斗四升四合

同所改新田

一高貳拾八石九斗六升三合

塩荷谷村

内

壹石貳斗六合

同所改新田

一高三百三石五斗七合 向橋村

内

五拾七石六斗三升六合 同所改新田

一高貳百貳拾九石八斗七升四合 京田村

内

八石九斗三合 同所改新田

一高三百六石五斗七升壹合 下中田村

内

五石五斗九升六合 同所改新田

一高五百七石三斗貳升六合 上中田村

内

三石九斗四升六合 同所改新田

一高三百四拾四石八斗壹升五合 灰塚村

内

貳拾六石三斗六升貳合 同所改新田

一高貳百拾六石七斗壹升貳合 青木村

内

八升四合 同所改新田

一高貳百六拾壹石五斗三升九合 地頭方村

内

壹斗六升五合 同所改新田

一高貳百拾貳石三斗壹升壹合 黒田村

内

貳石九斗五升貳合 同所改新田

一高三拾貳石貳斗七升 後谷村

内

壹石貳斗 同所改新田

一高百三拾五石三斗四升五合 朝日村

内

貳拾貳石五斗七升 同所改新田

一高百四拾五石三斗九升九合 馬場村

内

壹石八斗三升七合 同所改新田

一高貳百貳拾石九斗九合 小瀧村

内

三石貳斗貳升九合 同所改新田

一高百三拾三石六斗六升五合 門前村

内

壹斗七升壹合 同所改新田

一高三百八拾七石八斗貳升壹合 青田村

内

九石九斗九升八合

同所改新田

四石九升七合

同所改新田

一高八百拾六石式斗六合

飛田村

一高七百五拾六石三斗六升式合

今泉村

内

内

拾三石三斗三升四合

同所改新田

式拾四石五斗六升六合

同所改新田

一高八拾五石九斗六升六合

飛田新田

一高四百石七斗壹升式合

脇野田村

内

内

四拾石三斗五升壹合

同所改新田

拾五石五斗八升五合

同所改新田

一高四百三拾石四斗三升七合

稻荷村

一高四百五拾八石五斗式升壹合

荒町村

内

内

拾七石式升九合

同所改新田

拾壹石式斗四升七合

同所改新田

一高九石式斗八合

八幡新田

一高百五拾八石九斗式升壹合

土合村

内

内

三斗九升

同所改新田

五石六斗三升五合

同所改新田

一高百貳拾八石九升四合

雪森村

一高七拾式石三斗四升三合

高田新田村

内

内

三石六斗六合

同所新田

五石八升四合

同所改新田

拾石七斗三升五合

同所新新田

一高四百六拾八石三升七合

石澤村

一高五拾石八斗三升七合

岡崎新田村

内

内

拾壹石四斗壹升

同所改新田

七石九斗式升四合

同所新田

一高貳百五拾三石式斗八升

田中村

内

五石五斗六升三合

同所改新田

一高五百四拾七石壹斗三升九合

柳井田村

内

四拾石貳斗四升三合

同所改新田

一高五百九拾四石壹斗貳升六合

栗原村

内

拾壹石五斗九升五合

同所改新田

一高百六拾貳石三斗貳升六合

中川村

内

七斗四升五合

同所改新田

一高百八拾壹石八斗八升八合

片貝村

内

八石四斗壹升八合

同所改新田

一高六百四拾三石九斗貳升六合

關山村

内

拾四石八斗四升五合

同所改新田

一高七拾三石四斗八升六合

二俣村

内

八石貳斗六升六合

同所改新田

一高六拾貳石三斗九合

田切村

内

貳拾壹石壹斗八升九合

同所改新田

一高百三拾壹石八斗三升四合

田口新田

内

拾九石四斗五升八合

同所改新田

一高八拾壹石五斗四升壹合

上原村

内

貳拾六石九斗三合

同所改新田

一高九拾四石三斗壹升九合

關川村

内

拾八石五斗九升壹合

同所改新田

一高貳百貳拾壹石九斗六升八合

杉野澤村

内

六石貳升五合

同所改新田

一高七百九拾八石九斗壹升三合

寺町村

一高貳百四拾貳石四斗

七ヶ所新田村

内

拾石貳斗五升四合

同所新田

七拾六石四升八合

同所新新田



明治元年(1868)

壹石四斗四升

同所改新田

一高七拾三石六斗六升八合

丸山新田村

内

一高貳百石七斗壹升

上箱井村

内

壹石六斗九升貳合

同所新田

七斗五升

同所改新田

八石六升

同所改新田

一高百六拾五石貳斗四升

島田上新田村

一高百拾三石八斗五升三合

五ヶ所新田

内

拾壹石六斗壹升四合

同所改新田

三斗八升壹合

同所新田

一高九百九拾四石六升三合

島田村

壹石九斗五升三合

同所改新田

内

五拾七石八斗四升九合

同所改新田

一高貳百七拾貳石六斗三升三合

藪野新田村

一高百四拾壹石七斗五升九合

島田下新田村

百五石貳斗貳升七合

同所改新田

内

八拾七石五斗七升五合

同所改新田

一高五百拾八石八斗八升貳合

下箱井村

一高四百五拾五石四斗七升

今池村

三拾四石壹斗三升

同所新田

内

百六拾四石七斗四升

同所改新田

一高貳百六石壹斗四升八合

岡原村

一高四百六拾七石四斗七升七合

新長者原村

五石壹斗五升壹合

同所改新田

内

六拾七石七斗八升九合

同所改新田

一高百九拾貳石貳斗六升貳合

中箱井村

一高八拾壹石八斗八升五合

本長者原新田

内

八石三斗五升七合

同所改新田

一高七拾四石四斗四升九合

藪野村

一高四百五拾八石五斗七升三合

上新町村

一高五百式拾三石九斗七升壹合

下新町村

内

三石八斗三升四合

同所改新田

一高式百七拾壹石式斗四升八合

子安村

一高三百三拾六石八斗四升

鴨島村

内

三拾八石四斗九升六合

同所改新田

一高式拾九石壹斗六升八合

鴨島請野新田

内

壹石四斗八合

同所改新田

一高三百五拾式石五斗五升四合

上稲田村

内

拾石八斗八升四合

同所改新田

一高百八拾五石三斗九升

下稲田村

一高式百九拾七石四升六合

寺村

内

四石七斗八升八合

同所改新田

一高式百拾四石八斗壹升

富岡新田

一高五拾九石式斗八升

富岡新新田

一高百三拾石九斗壹升四合

天野原新田

一高式百五拾六石八斗六升

本長者原村

内

百三拾七石五斗七升三合

同所新田

九石壹斗三升五合

同所新新田

四升三合

同所改新田

一高三拾六石六斗七升

子安新田

一高三拾四石九斗四升八合

鴨島新田

一高式百式拾式石九斗八升式合

藤野新田村

一高八拾七石四斗式升四合

樋場新田村

内

五石六斗八升

同所新新田

一高百拾三石六斗九升五合

中田新田村

一高三百四石五斗七升

上島新田村

内

七石壹斗九升

同所改新田

一高七拾六石四斗六升六合

大日古川新田

内

拾三石壹斗貳升四合

同所新田

一高百貳拾八石七斗八升六合

四ツ屋村

一高百七拾七石五斗五升九合

中村新田村

一高五百貳拾四石八斗八升貳合

松野木村

内

六拾九石貳斗三升三合

同所新田

九拾六石七斗六升四合

同所新田

一高五拾四石七斗九升三合

平岡新田村

一高四百貳拾七石九斗三升

同所改新田

内

壹石八斗壹升六合

同所新田

一高四百拾壹石壹斗八升三合

戸野目村

一高拾九石壹斗六升

上田屋新田村

貳拾九石壹斗五升

同所新田

一高七拾六石六斗三升七合

南田屋新田村

壹石五升六合

同所改新田

一高九拾三石壹斗八合

北田屋新田村

一高四百四拾五石九斗七升八合

桐原村

内

貳拾七石三斗五升

同所新新田

一高四百六拾五石貳斗七升五合

本道村

四石四斗七合

同所改新田

一高三百石八斗壹升六合

市之江村

一高百三拾七石七斗四升五合

福田新田

三拾五石貳斗貳升六合

同所新田

一高拾九石五斗七升九合

富岡古川新田

一高四百拾四石九斗貳升

荒屋村

一高七拾九石七斗七升七合

長池新田

内

内

六石八斗四升七合

同所新新田

三拾四石六斗八升四合

同所新田

九石八斗九合

同所改新田

一高三百九拾壹石九斗五升五合

上源入村

貳石三斗九升

同所改新田

一高百拾八石三斗壹升七合 門田新田  
一高貳百四拾貳石六斗七升三合 大日村

内

貳拾石四斗壹升

同村新田

一高三拾石三斗貳升

若宮新田

一高百四拾八石三斗三升

市之口新田

一高百五拾八石貳斗八升三合

四ヶ所村

一高七拾九石八斗貳升三合

赤塚新田

内

貳拾貳石壹斗九升四合

同所新田

一高貳百八拾壹石貳斗六升七合

藤塚村

内

九石六斗七升七合

同所新田

一高百拾九石九斗七升九合

茨澤村

内

拾貳石四斗壹升三合

同所新田

一高三拾壹石三斗七升貳合

大日村新田

一高五石九斗六升三合

中野新田

一高貳百九拾九石八斗三升四合

鉢崎村

内

四拾貳石壹斗九升九合 同所改新田  
一高五拾三石六斗五升貳合 上輪村

内

五石六斗五升七合

同所改新田

一高貳百九拾七石七斗四升八合

上輪新田村

一高六拾貳石五斗五升五合

笠島村

内

七斗八升三合

同所改新田

一高百貳拾八石貳斗壹升八合

青海川村

内

拾四石三升三合

同所改新田

一高八拾六石九斗六升四合

上綱子村

内

三石三斗五升三合

同所改新田

一高三百四拾五石四斗壹合

中野俣村

内

壹石六斗三升壹合

同所改新田

一高五拾五石壹斗貳升五合

横畑村

内

九斗壹升貳合

同所改新田

明治元年(1868)

	一高五拾貳石五斗六升三合	皆口村		一高拾九石七升	同所改新田
	内			内	
	四斗六升七合	同所改新田			
	一高五拾四石壹斗四升四合	北谷村		一高八拾三石九斗四升五合	同所改新田
	内			内	
	壹石壹斗四升四合	同所改新田		三斗	
	一高百拾石四斗三升四合	土口村		一高拾石八斗四升九合	同所改新田
	内			内	
	貳石壹斗四升五合	同所改新田		三斗九升六合	
	一高九拾壹石壹斗三升	増澤村		一高貳拾石九斗三升四合	上宇山村
	内			一高拾貳石八斗四升九合	小池新田
	四斗九升壹合	同所改新田		一高百四拾八石四斗壹升五合	横山村
	一高百拾五石七斗	大淵村		内	
	内			四斗壹升壹合	同所改新田
	壹石六斗九升	同所改新田		一高三拾九石四升壹合	小池村
	一高六拾六石五斗壹升壹合	東吉尾村		内	
	内			四斗六升貳合	同所改新田
	貳斗八升八合	同所改新田		一高貳拾壹石四斗五合	中桑取新田
	一高百三拾壹石九斗三升九合	西吉尾村		内	
	内			九斗三升五合	同所改新田
				一高拾石貳斗七升四合	諏訪分村
				内	

四升五合

同所改新田

一高貳拾八石五合

北小池村

内

六斗五合

同所改新田

一高六拾八石六斗三升貳合

山寺村

内

壹石九斗九升四合

同所改新田

一高四拾五石三斗九升七合

下綱子村

内

九斗六升九合

同所改新田

一高百拾三石貳斗壹升四合

高住村

内

八斗五升貳合

同所改新田

一高六拾石貳升五合

中桑取村

内

三石貳斗八升二合

同所改新田

一高五拾八石六斗五升三合

三傳村

内

四斗九升貳合

同所改新田

一高貳拾六石四斗九合

花立村

内

壹斗六升八合

同所改新田

一高四拾五石九斗五升五合

戸野村

一高拾七石三斗六升三合

鍛冶免分

一高百四拾石三斗壹升九合

長濱村

内

三石貳斗九升七合

同所改新田

一高百拾七石壹斗壹升七合

有間川村

内

拾四石六斗貳升八合

同所新田

一高五拾貳石六斗八合

丹原村

内

九斗四升貳合

同所改新田

一高五拾三石七斗五升九合

鍋ヶ浦村

内

壹石六斗六升四合

同所改新田

一高五拾五石九斗貳升九合

下宇山分

一高七拾九石壹斗四升

吉浦村

内

三石壹斗六升八合

同所改新田

一高四拾六石八斗八升八合

茶屋ヶ原村

壹石三升壹合

同所改新田

内

一高百貳石四斗七升八合

東蒲生田村

九斗貳升

同所改新田

内

一高四拾六石五斗壹合

車路村

貳石壹斗五升

同所改新田

内

一高八拾三石五斗壹升七合

瀬戸村

四斗壹合

同所改新田

内

一高貳拾六石五斗七合

杉野瀬村

三石六斗九升九合

同所改新田

内

一高六拾七石五斗八升七合

折戸村

八石壹斗壹升六合

同所改新田

内

一高六拾五石八斗貳升貳合

濁澤村

三斗八升

同所改新田

内

一高八拾貳石八斗八升三合

飛山村

四斗壹升六合

同所改新田

内

一高八拾九石壹斗三升

丸田村

壹石九斗壹合

同所改新田

内

一高四拾貳石壹斗三升壹合

飛瀬山戸新田

五斗壹升七合

同所改新田

五斗六升四合

同所改新田

一高六拾壹石七斗五升

峠村

一高百拾六石九斗五升七合

仙納村

内

一高貳百四拾貳石三斗九升四合

徳合村

五斗貳升

同所改新田

一高三拾五石七斗六升六合

坪山村

一高四拾五石三斗九升三合

池田村

一高五拾六石八斗八升三合

赤俣村

内

一高七拾六石三斗七升六合

大菅村

一高三拾七石式斗九升八合

谷内林新田

一高四拾八石三斗七合

谷口村

内

一高式拾五石三斗式升七合

體畑村

八石三斗九升壹合

同所新田

一高七拾四石壹斗四升

田野上村

一高九石四斗壹升

新保新田

一高百貳石五升壹合

折居村

内

一高四拾八石八升四合

桂谷村

五斗七升

同所新田

一高八拾四石三斗式升

平谷村

一高四百四拾石五斗七升

五日市村

一高九拾八石七斗九升三合

小田島村

内

一高百七石四斗四升九合

森村

百三拾五石壹升六合

同所新田

一高七拾石七合

西蒲生田村

一高五百五拾三石壹斗三升五合

十日市村

一高百五石七斗九升四合

稲荷山新田

内

一高三拾九石六斗六升五合

毛祝坂新田

五石八斗式升

同所新田

一高百六拾五石式斗壹升六合

宮内村

壹石三斗八升四合

同所新田

内

九斗六升七合

同所新田

一高六百貳拾四石式斗九升式合

山部村

一高六拾五石八斗四升九合

神宮寺村

一高八拾石式斗三升三合

中野宮村

一高三百貳拾五石五斗八升式合

乙吉村

内

内

拾石壹斗八升九合

同所新田

一高貳拾七石式斗五升七合

大池新田

一高三拾八石式斗九升四合

宮野原新田

一高六拾壹石四斗八升六合

福島村



明治元年(1868)

一高貳百六拾石九斗六升五合 田島村

一高四百五拾貳石三升 久々野村

内

三拾五石壹斗五升七合 辰改見取田畑

一高百三拾四石七斗七升三合 中野村

一高四百四拾五石貳斗壹升九合 窪村

一高四百三拾貳石五斗七升六合 法華寺村

一高三百九拾貳石三斗四升貳合 水科村

一高四百九拾九石九升 鴨井村

内

貳拾七石九斗八升壹合 同所新田

一高八百拾九石貳斗貳升貳合 田村

内

九拾七石三斗貳升壹合 同所新田

一高五百七拾壹石三斗六合 中村

一高百六拾壹石七斗壹升六合 浮島村

内

拾九石四斗三升八合 同所新田

一高五百四拾壹石四斗八升六合 北代村

内

七拾四石四升三合 同所新田

一高五拾四石六斗八升五合 田島村

一高六百五拾八石壹斗三升四合 水吉村

一高八百七拾七石七斗四升五合 榎井村

内

百九拾壹石八升九合 同所新田

一高貳百三拾貳石九斗八升八合 船津村

一高五百貳拾六石四斗五升 上吉新田

一高四拾八石五斗壹升四合 榎下新田

一高四百拾四石四斗貳升五合 百間町新田

一高七百拾四石六斗六升三合 島田新田

一高貳百拾貳石六升七合 宮本新田

一高貳百八拾壹石五斗五升八合 宮原新田

一高百六拾石三斗四升八合 青野新田

一高八拾六石九斗七升壹合 瀧口新田

一高貳百六石八斗壹升三合 中村新田

一高九拾五石貳斗壹升貳合 戸口野新田

一高貳拾三石四斗六升五合 諏訪新田

一高百五石五斗四升九合 姥谷内新田

一高八拾五石壹斗三升五合 西湊新田

一高四百六拾貳石九斗九升五合 仁野分村

一高三百四拾石壹斗四升八合 森本村

一高六拾石壹升四合 上泉新田

一高九拾五石四斗貳升五合 大瀨新田

一高五拾三石五斗六升四合 夷濱村

一高貳百九石七斗九升三合 荒濱新田

一高九拾石六升六合 松本新田村

一高七拾石七斗八升壹合 石橋新田

内 七斗八升五合 同所改新田

一高三拾貳石壹斗八升九合 澁柿濱村

一高三拾三石六斗貳升八合 上小船戸新田

一高八拾八石六斗三升壹合 下小船戸新田

一高三百四拾五石三斗八升八合 蜘蛛池村

内 五斗八升 同所改新田

一高五拾四石八斗九升三合 高崎新田

内 拾九石四斗貳合 同所改新田

一高九石四斗貳合 同所改新田

一高五拾四石八斗九升三合 同所改新田

一高五拾四石八斗九升三合 同所改新田

一高三百貳拾七石八斗八合 山方村

一高三百五拾七石五斗貳升八合 田尻村

内 百八拾三石六斗六升七合 同所新田

一高四百四拾九石六斗 片田村

一高九百八拾石七升貳合 手島村

一高九百貳拾八石壹斗三升六合 西野島村

内 百拾三石八斗九升八合 同所新田

一高三百三拾五石七斗五升五合 長峯新田

一高三百四拾七石貳斗五合 原ノ町村

内 百拾石四斗五升三合 同所新田

一高貳百七拾八石三斗壹升五合 大乘寺村

一高百貳拾八石三斗壹合 東寺村

一高九百六拾壹石六斗五升三合 上直海村

内 七拾五石七斗三升 同所新田

一高貳百三拾壹石五斗貳升壹合 天林寺村

一高百壹石八斗五升四合 平等寺村

一高百壹石八斗五升四合 平等寺村

一高百壹石八斗五升四合 平等寺村

一高百壹石八斗五升四合 平等寺村

一高百壹石八斗五升四合 平等寺村

一高三百六拾七石壹斗八升六合 上増田新田

一高貳百四拾三石五斗四升壹合 岩手村

内

貳拾四石壹斗三升三合 同所新田

一高百拾九石三斗五升貳合

下灰庭新田

一高四百拾六石九升

芋島村

内

三拾石四斗壹升四合 同所新田

一高七拾七石九斗三升九合

上灰庭新田

一高四百貳拾七石三斗八升貳合 黒岩村

内

拾三石七斗六升五合 同所明生新田

一高九拾八石八斗六升

櫻町新田

一高貳百貳拾八石六斗三升三合 下金原村

内

四拾七石七斗五升六合 同所新田

一高三百九拾三石八合

落合村

一高七百六拾壹石五斗六升

竹直村

内

百四拾石七斗八升三合 同所新田

一高三百六拾貳石壹斗九升 上金原村

内

三拾七石壹斗七升六合 同所新田

一高貳百六石貳升八合

猿毛村

内

拾五石八斗九升七合 同所新田

一高貳百六石壹斗六升四合

中山村

一高百三拾九石八斗四升壹合

狸平村

内

貳拾石八斗壹升八合 同所荒戸澤新田

貳石五斗六升五合

黒岩平 立会新田

一高五百六拾七石五斗五升貳合 下條村

一高百四拾九石九斗五升八合 上下濱村

一高百八拾八石壹斗壹升六合 江島新田

一高貳百五拾五石三斗四升九合 桂村

一高百六拾八石九斗七升九合 鶉石村

一高三百拾貳石七升三合 平村

一高百七拾四石七斗六升四合 島道村

一高八拾貳石八斗壹升四合 藤後村

一高百七拾壹石五斗八升四合 槇村

内

拾六石九斗六升四合

辰改田畑

一高八拾石五斗貳升六合

須川村

内

拾貳石三斗三升八合

辰改田畑

一高六石四斗六升壹合

物出村

一高貳拾九石四斗貳升三合

柵口村

内

七石四斗四升九合

辰改田畑

一高貳拾石三斗六升七合

崩村

一高九石七斗三升七合

田麥平村

一高貳拾七石三斗四升七合

飛山村

一高八拾七石五斗三合

川詰村

内

三石五斗貳升

辰改田

一高三拾壹石八斗七升五合

谷内村

内

壹石五升三合

辰改田

一高三百三拾七石五斗三升三合

高倉村

一高百六拾六石壹斗九升八合

下倉村

一高百貳拾七石三升四合

中野口村

内

九石五升七合

辰改田

一高貳百拾四石九斗八升壹合

柱道村

一高六拾八石八斗九升五合

鷺尾村

一高拾貳石五斗五升六合

大王村

一高九拾五石貳斗五升九合

空熊新田

一高四百貳拾九石五斗九升

小見村

内

壹石五斗七升七合

辰改田

一高百三拾七石壹斗六升六合

溝尾村

内

四石九斗壹升壹合

辰改田畑

一高八拾五石三斗六升五合

寺山村

一高四百七拾四石八斗貳升六合

高田追

一高四百五拾石八斗六升七合

高田追請地

一高百拾九石六斗八升貳合

寺町新田

一高貳百五拾八石壹斗六升

川原町新田

一高六拾四石七斗壹升六合

馬塚新田

一高貳拾九石三斗七升九合

勘左衛門新田

明治元年(1868)

一高貳百拾石三斗四升七合 陀羅尼新田

内

八石三斗貳升八合 同所改新田

三石八斗貳升貳合 同所改新田

一高百七拾三石五斗九升貳合 陀羅尼新新田

内

九石壹升八合 同所改新田

貳石五斗貳升 同所改新田

一高百貳石七斗貳升五合 茶新田

内

貳拾六石七斗四升四合 同所改新田

一高七拾九石五斗九升壹合 今町

内

拾五石七斗九升壹合 同所改新田

一高九拾三石壹斗六升壹合 四ッ屋村

一高貳百七拾七石七斗貳升七合 下富川村

内

貳石貳斗壹升四合 同所新田

一高貳百貳拾七石貳斗壹升七合 下稻村之内

一高貳百五拾三石三斗五升五合 長面村

一高三百石四升五合 谷根村

内

貳拾四石三斗三合 同所新田

一高八拾五石貳斗三升三合 吉尾村

内

貳拾石四斗貳升六合 同所新田

一高五拾五石八斗四升四合 小杉村

内

拾五石五斗貳升四合 同所新田

一高貳百四拾八石壹斗壹升三合 横山村

内

拾貳石六斗貳升六合 同所新田

一高三百四拾壹石六斗三升 米山寺村

内

七石壹斗三升七合 同所新田

一高百拾四石四斗六升七合 高畑村

内

三石三斗八升 同所新田

一高百拾貳石貳斗三升三合 城腰村

内

拾貳石四斗壹升九合

同所新田

一高百九拾三石六斗八升七合

水野村

内

拾七石七斗貳升三合

同所新田

一高六百四拾九石三斗九升六合

福島村

内

九斗五合

同所新田

一高三百九拾八石四斗五升三合

下吉新田

内

貳石三升九合

同所新田

一高百九拾壹石壹斗壹升四合

上神原新田

一高貳百三拾八石四斗四升三合

福崎新田

一高三百四拾九石壹斗四升九合

下神原新田

一高八百三拾三石四斗三升八合

市村新田

内

七斗七升三合

同所新田

一高五百九拾九石六斗

上三分一村

内

壹石壹斗壹升

同所新田

一高六百七拾七石九斗五升七合

下三分一村

内

壹斗貳升

同所新田

一高百五拾八石九斗五升三合

北方新田

内

壹石七斗壹升壹合

同所新田

一高百拾石壹斗九升四合

千原新田

一高貳百三拾六石四斗五升六合

飯田新田

内

八斗八升

同所新田

一高九拾九石三斗貳升

東俣新田

一高貳百拾七石七斗壹合

浮島新田

内

貳升八合

同所新田

一高三百三拾四石貳斗五合

四ツ屋新田

内

壹斗六升

同所新田

一高五百拾九石七斗三升三合

梶村

内

拾八石三斗貳升七合

同所新田

一高貳百拾三石貳斗六升四合

北代石村

明治元年(1868)

内

九斗九升貳合

同所新田

一高八拾三石三斗五升八合

立崎新田

一高貳百五石四斗七升六合

北代石新田

一高百三拾六石貳斗九升壹合

柿野新田

内

貳斗壹升三合

同所新田

一高百五拾八石四斗壹升五合

川袋新田

一高三百三石九斗八升八合

神田町新田

壹石八斗九升貳合

同所新田

内

拾石壹斗七升壹合

同所新田

一高百貳拾六石七斗四升三合

福田新田

一高五百貳拾五石貳斗壹升三合

町田村

貳石壹斗九升五合

同所新田

内

三石五斗四升壹合

同所新田

一高三百九石四斗五升四合

岡田新田

一高四百八拾壹石六斗五升三合

中増田新田

一高四百六拾五石八斗貳升三合

下増田新田

一高四百貳拾九石六斗貳升七合

上池田新田

一高四百八拾七石壹斗壹升壹合

花ヶ崎村

一高五百拾石貳斗五升七合

下池田新田

一高貳拾貳石八斗六升貳合

川原新田

一高三百五石三斗三升八合

天ヶ崎新田

貳斗五合

同所新田

四石七斗七升三合

同所新田

一高三百拾九石八斗壹升四合

日根津村

一高貳百九拾六石七斗九升五合

鷓木新田

内

貳石五斗八合

同所新田

一高百貳拾七石貳斗六升九合

八幡新田

六石五斗壹升五合

同所新田

内

五石三斗五升九合

同所新田

一高九拾六石貳斗壹升五合

長崎村

内

貳斗九升壹合

同所新田

一高六拾三石壹斗八合

山鶴島新田

一高七拾五石五斗三合

里鶴島新田

内

三石六斗八升九合

同所新田

一高百貳拾石八斗貳升七合

内雁子村

内

壹石貳斗六升壹合

同所新田

一高貳百拾五石七斗五升貳合

内雁子新田

内

七石六斗五升八合

同所新田

一高貳百貳拾三石三斗七升

米倉新田

一高三百六拾壹石九斗貳升四合

高橋新田

内

五斗三升

同所新田

一高九拾石貳斗五升七合

坪野内新田

内

五斗七升

同所新田

一高九拾九石五斗四升五合

坂田新田

内

三石貳斗四升八合

同所新田

一高三百拾九石九斗八升貳合

長澤新田

内

六石壹斗七升

同所新田

一高百九拾九石八斗六升五合

和泉新田

一高五百七拾三石六斗三升壹合

馬正面村

内

五石三斗九升七合

同所新田

一高百四拾八石六斗壹升七合

馬正面新田

内

五斗五升

同所新田

一高貳拾貳石八斗八升七合

中城新田

内

五斗壹升六合

同所新田

一高五百貳拾貳石八斗八升

瀧町新田

内



明治元年(1868)

三百五拾九石五斗五合

同所新田

一高四百九拾四石三斗三升四合

才濱 中

拾五石三斗六升四合

同所新田

内

一高百貳拾八石七斗四合

中島新田

四拾壹石八斗四升三合

同所新田

内

壹斗八升八合

同所新田

内

一高貳百拾八石八斗九合

松橋村

拾三石八升貳合

同所新田

一高三拾七石貳升三合

松橋新田

三石壹斗八升四合

同所新田

一高貳百貳拾三石七斗八升四合

黒井村

一高百六拾三石貳合

中土底新田

内

拾石七合

同所新田

貳拾石三斗八升三合

同所新田

一高貳百四拾五石六斗貳升三合

米岡新田

拾七石八斗貳升六合

同所新田

内

七斗八升

同所新田

一高八拾五石六斗六升

下土底新田

一高三百八石七斗壹升三合

片津村

内

九斗八合

同所新田

拾八石五斗壹升七合

同所新田

一高七拾四石七斗七升三合

田中新田

八石四斗四升

同所新田

一高百貳拾貳石七斗四升八合

坂井新田

一高貳拾四石壹斗四升八合

四ツ屋古新田

内

七斗五升九合

同所新田

壹石壹斗八升八合

同所新田

一高拾六石八斗六升

同所新田

一高拾六石八斗六升

土底古新田

内

卷石七斗三升六合

同所新田

一高百石貳斗四升四合

濱雁子新田

一高三拾四石八斗壹升三合

上雁九下濱立会

内

三石九斗九升

同所新田

一高三百五拾三石七升貳合

角取村

内

三斗七升三合

同所新田

一高貳百貳石三斗四升貳合

行法村

内

貳斗五升五合

同所新田

一高百拾貳石八斗四升九合

大清水村

内

四石貳斗五升九合

同所新田

一高七百九拾五石四斗八升五合

川井村

内

壹石貳斗壹升貳合

同所新田

一高百七拾九石七斗四升五合

法音寺村

内

七升貳合

同所新田

一高貳百三石八斗貳升壹合

金谷村

内

壹石貳斗三升

同所新田

一高八百貳拾四石六斗三升三合

柿崎村

内

拾石九斗四升

同所新田

一高百三拾五石四斗四升三合

上小野村

内

三石九斗七升壹合

同所新田

一高四百拾七石四斗六升三合

下小野村

内

五石八斗五合

同所新田

一高百三拾九石七斗八升四合

柳ヶ崎村

内

五斗五升九合

同所新田

一高七拾九石九斗五升六合

初田村

内

拾四石七斗貳合

同所新田

一高百三拾壹石七斗六升五合

岩野村

明治元年(1868)

内

九石四斗四升三合

同所新田

一高九拾九石九斗六升六合

雁海村

一高百八拾八石九升

阿彌陀瀬村

内

三石四斗三升四合

同所新田

内

四石貳斗八升六合

同所新田

一高拾四石九斗壹升四合

栃窪村

一高貳百九拾七石四斗貳升四合

萩谷村

内

貳石貳斗六升

同所新田

内

五斗六合

同所新田

一高百三拾叁石三斗七升四合

平澤村

一高貳百五拾三石九斗九升貳合

高寺村

内

六石六斗六升壹合

同所新田

内

四斗三升四合

同所新田

一高百三拾八石五斗七升四合

大平村

内

一高三百四拾石六斗六升六合

川田村

一高九拾七石貳斗八升七合

同所新田

内

貳拾八石壹斗五升六合

同所新田

内

一高貳百貳拾石七斗七升七合

谷内村

六石貳斗三升七合

同所新田

内

貳石壹斗五升八合

同所新田

一高百四石貳斗六升

小萱村

内

一高貳百九拾五石三斗八升貳合

山谷村

拾六石三斗貳升

同所新田

内

六斗貳升八合

同所新田

一高貳百七拾石六升壹合

土尻村

内

壹石六合

同所新田

一高三百拾四石九斗七升貳合

上柳町新田

一高百拾九石八斗四升五合

泉谷村

内

内

九斗八升

同所新田

壹石貳斗六升五合

同所新田

一高貳百石四斗七升八合

中柳町新田

一高貳百三拾貳石壹斗九升五合

泉村

一高六拾石六斗五升七合

下柳町新田

内

内

三斗八升貳合

同所新田

四石七斗五合

同所新田

一高六百八拾七石七斗五升四合

百木村

一高百九拾四石五斗九升三合

富田新田

内

一高百四拾九石貳斗八升六合

寺田新田

貳石六斗八升七合

同所新田

一高百六拾七石六斗七升八合

稲原新田

一高四百三拾八石四斗四升貳合

中條村

内

内

五石六升

同所新田

四斗三升四合

同所新田

一高貳百三拾九石五斗貳升七合

吉崎新田

一高三百貳石九斗九升三合

下町村

一高七拾石壹斗六升壹合

須濱屋新田

内

一高貳百五拾五石四升

岩野古新田

壹石三斗九合

同所新田

内

一高貳百五拾石六斗三升五合

田村新田

百貳拾七石三斗貳升三合

同所新田

内

壹斗四升壹合

同所新田

六石七斗四升

同所新田

一高九百六拾七石四斗六升五合

大谷内新田

一高百八拾貳石九斗九升

柳町新田

内

明治元年(1868)

	六石貳斗五升六合	同所新田		四斗六合	同所新田
	一高貳百三拾八石九斗壹升壹合	手崎新田		一高三拾八石七斗五升八合	筒石新田
	一高貳拾三石六斗壹升六合	稲塚新田	内		
	一高百九拾七石八斗七合	四ツ屋村		三斗五升九合	同所新田
内				一高貳百五拾八石五斗五升五合	二本木村
	三斗七升五合	同所新田	内		
	一高百四拾三石七斗三升八合	下新田村		拾九石八斗貳升壹合	同所新田
	一高三百七石七斗四合	百々村		一高貳百五拾六石貳斗四升三合	藤澤村
	一高六百四拾三石三斗五升九合	木島村	内		
内				貳拾石九斗六升三合	同所新田
	三石三斗七升八合	同所新田		一高三拾石六斗九合	坂本新田
	一高貳百石壹斗七升壹合	雪森村	内		
内				貳石壹斗七升九合	同所新田
	壹斗六升貳合	同所新田		一高九石三斗六升四合	八斗蒔新田
	一高貳百拾四石三斗六升六合	大町村	内		
内				三石六斗四合	同所新田
	九石八斗九升貳合	同所新田		一高百貳石九斗五升四合	松崎村
	一高四拾壹石九斗八升貳合	名立新田	内		
	一高貳拾五石六斗六升八合	筒石村		拾五石三斗九合	同所新田
内				一高百三拾壹石三斗貳升六合	市屋村

内

拾石壹斗六升貳合

同所新田

一高九拾四石八斗三升五合

福崎新田村

内

四石五斗壹合

同所新田

一高百八石壹斗四升八合

江口新田村

内

六石八斗六合

同所新田

一高四拾六石三升六合

岡川村

内

拾六石三斗八升八合

同所新田

一高貳拾壹石七斗七升

西四ツ屋村

内

六石四斗七升六合

同所新田

一高七拾八石三斗五升七合

坂口新田

内

三拾九石九升七合

同所新田

一高七拾九石壹斗七升七合

板橋新田

内

五石壹斗五升四合

同所新田

一高貳百六拾壹石八斗三升

両善寺村

内

壹石九斗六升九合

同所新田

一高百三拾四石四斗五升五合

両善寺新田

内

壹石貳斗壹升

同所新田

一高百拾九石九斗八升七合

志村新田村

内

壹石壹斗六合

同所新田

一高五百三拾壹石三斗七升三合

猪野山村

内

四石壹斗五升八合

同所新田

一高百六拾四石八斗六合

梨木村

内

三斗貳升六合

同所新田

一高貳百七拾六石壹斗六升七合

三俣村

内

三石七斗九升壹合

同所新田

一高貳百拾七石三斗壹合

中村

内

明治元年(1868)

式石四斗五升六合

同所新田

一高八百三拾五石三斗三合

小出雲村

内

式石四斗四升六合

同所新田

一高貳百五拾六石八斗九升五合

石塚村

内

式斗四升八合

同所新田

一高百拾五石三斗八升貳合

藤塚新田

内

式石七合

同所新田

一高拾石九斗八升三合

土田村

内

式斗三升壹合

同所新田

一高貳拾八石九斗七升八合

小丸山新田村

内

式斗八升

同所新田

一高拾貳石貳斗八升三合

坂井新田村

内

式石壹斗貳升六合

同所新田

一高四百四拾八石六斗七升

志村

内

拾九石五斗三升

同所新田

一高七百九拾石四斗七升九合

長森村

内

拾四石八斗五升

同所新田

一高三拾六石三斗六升三合

梨平新田

内

三斗八升四合

同所新田

一高貳百七拾石五斗三升貳合

籠町村

内

三石七斗八升壹合

同所新田

一高九百三拾九石四升三合

新井村

内

式拾四石三斗壹合

同所新田

一高百七拾七石七斗四升四合

西野谷村

内

四石六斗七升八合

同所新田

一高四百六拾石八斗五升九合

美守村

内

五斗五升貳合

同所新田

一高四百六拾四石六斗壹升七合

廣島村

内

五石五斗式升壹合

同所新田

一高百六拾七石五斗六升五合

國賀村

一高貳百貳石五斗五升六合

月岡村

内

八斗式升

同所新田

一高四百石壹斗四升五合

高柳村

内

九石六斗六升三合

同所新田

一高百六拾七石八斗七升九合

二子島村

内

貳斗壹合

同所新田

一高三拾六石壹升三合

寺尾村

内

五斗三升貳合

同所新田

一高百七拾六石貳斗壹升六合

大原新田村

内

拾五石壹斗三升六合

同所新田

一高拾九石五斗三升三合

北田屋新田

内

七斗八升三合

同所新田

一高六拾壹石三斗七升壹合

坂下新田村

内

貳石七斗壹升

同所新田

一高七拾貳石五斗九升五合

今府村

内

貳石貳斗七升七合

同所新田

一高八拾六石七斗四升八合

西田屋新田村

内

貳石八斗五升八合

同所新田

一高七拾壹石貳斗三升四合

中原新田

内

三石七斗八升八合

同所新田

一高七拾壹石貳斗七升四合

大澤新田村

内

拾貳石貳斗壹升八合

同所新田

一高四拾壹石壹斗八升四合

榆島村

内

七石七斗八升八合

同所新田

一高五拾四石壹斗三升六合

中島新田村





内

四石四斗四升三合

同所新田

一高二百四拾五石七斗三升七合

中村新田村

内

拾壹石三斗七升六合

同所新田

一高五拾貳石三斗八升八合

福田新田村

内

五石四升四合

同所新田

一高九拾貳石壹升四合

四ツ屋新田

内

四石七斗三升八合

同所新田

一高二百四拾貳石七斗八升七合

薄生村

内

四拾貳石七斗貳升五合

同所新田

一高拾石八斗三合

増澤村

内

四升三合

同所新田

一高三百四拾七石六斗四合

岡澤村

内

貳斗貳升五合

同所新田

一高三百三拾四石貳斗壹升七合 岡澤新田

内

五石七斗五升三合

同所新田

一高百拾石壹斗貳升

菅沼村

内

四斗九升

同所新田

一高八拾六石八斗六升九合

西菅沼新田

内

三石五斗壹合

同所新田

一高八拾四石五斗七升四合

三本木新田村

内

拾四石壹斗四升五合

同所新田

一高八拾六石四斗貳升七合

東志村

内

六斗貳升九合

同所新田

一高七拾貳石五斗貳升

西野谷新田

内

六石九升三合

同所新田

一高四百壹石貳斗四升七合

窪松原村

内

明治元年(1868)

八石壹斗四合

同所新田

一高四拾壹石五斗九升四合

窪松原新田村

内

壹斗三升八合

同所新田

一高百拾石壹斗六合

福田新田村

内

拾四石九斗八升壹合

同所新田

一高五百九拾五石九斗八升七合

能生町村

内

七石三斗四升九合

同所新田

一高七拾六石八斗九升四合

能生小泊村

内

壹石貳斗九升四合

同所新田

一高百拾六石八斗三升四合

大平寺村

内

八石八斗七升貳合

同所新田

一高四百六拾石六斗壹升五合

木浦村

内

九石五斗貳升

同所新田

一高九拾九石四斗四合

鬼舞村

内

四石三斗壹合

同所新田

一高百六拾石六斗九升九合

鬼伏村

内

五石六斗八升四合

同所新田

一高九拾四石貳斗五升

名立小泊村

内

壹石八斗八升七合

同所新田

一高百六拾石七斗八升貳合

大洞村

内

七石壹斗九升九合

同所新田

一高貳百八拾八石九斗九升

藤崎村

内

三石七斗四升六合

同所新田

一高貳百貳拾六石三升四合

百川村

内

六石貳斗

同所新田

一高五百三拾三石三斗九升四合

青海村

内

七石壹斗六升八合

同所新田

一高拾七石壹斗五升 歌 村

貳斗七升六合 同所新田

内 五斗六合 同所新田

一高四拾七石九斗貳升壹合 市 振 村

一高拾七石六斗七升四合 橋 立 村

内 貳斗六升六合 同所新田

内 五斗九升三合 同所新田

一高百五拾五石四斗六升七合 上 野 村

一高拾壹石壹斗三升八合 外 波 村

内 三石六斗貳升三合 同所新田

内 四斗五升八合 同所新田

一高三拾石八斗壹升六合 上 野 山 村

一高三拾三石貳斗五升八合 上 路 村

内 壹斗壹升七合 同所新田

内 壹石壹斗六升八合 同所新田

一高貳拾壹石四斗貳升九合 餘 所 村

一高貳百四石壹斗四合 小 瀧 村

内 九升四合 同所新田

内 五石貳升九合 同所新田

一高百七拾九石壹斗三升八合 來 海 澤 村

一高三拾三石三斗八合 山 之 坊 村

内 四石貳升九合 同所新田

内 拾石六斗四升壹合 同所新田

一高貳百貳拾貳石七斗三升貳合 田 中 村

一高拾壹石貳斗八合 大 所 村

内 貳石三斗五升三合 同所新田

内 一高百壹石三斗六升六合 粟 倉 村

明治元年(1868)

内

壹石五斗七升壹合

同所新田

一高拾三石八升

谷内越村

一高三拾五石壹斗七合

真木村

三斗壹合

同所新田

内

九斗貳升四合

同所新田

一高六拾三石

西宮平村

一高百三拾五石九斗九升四合

水保村

壹石四斗貳升八合

同所新田

内

貳石六斗三升貳合

同所新田

一高七拾四石貳斗八升六合

東宮平村

一高六拾三石三斗四升四合

成澤村

壹石七斗三升五合

同所新田

内

六斗貳升三合

同所新田

一高貳拾三石壹斗三升

西中野村

一高百五拾四石四斗三升九合

梶屋敷村

五斗八升八合

同所新田

内

七石三斗九升五合

同所新田

一高拾五石貳斗四合

東中野村

一高百貳拾壹石五斗八升五合

田屋梶屋敷村

四斗四升

同所新田

内

五石六斗貳合

同所新田

一高貳拾六石六斗八升八合

中林村

一高貳百六拾貳石七升七合

大越村

五斗五升壹合

同所新田

内

六石四斗八升八合

同所新田

一高六拾貳石貳斗三升

坪野村



五石五升三合

同所新田

一高千七百六拾五石三斗壹升四合番 澤村

一高拾貳石六斗八升六合

小瀧川原村

一高千七百六拾五石三斗壹升四合番 澤村

一高百貳拾三石九斗六升六合

中宿村

一高千七百六拾五石三斗壹升四合番 澤村

内

三石八斗貳升壹合

同所新田

一高千七百六拾五石三斗壹升四合番 澤村

一高百三石三斗六升八合

間脇村

一高千七百六拾五石三斗壹升四合番 澤村

内

五石七斗七升三合

同所新田

一高千七百六拾五石三斗壹升四合番 澤村

一高九拾石九斗五升四合

中濱村

一高千七百六拾五石三斗壹升四合番 澤村

内

五石八斗四升七合

同所新田

一高千七百六拾五石三斗壹升四合番 澤村

高合拾壹万九千六百六拾六石貳斗壹合

同所新田

一高千七百六拾五石三斗壹升四合番 澤村

内

六千四百五拾壹石五斗三升貳合 新田

一高千七百六拾五石三斗壹升四合番 澤村

陸奥国白川郡・田村郡・石川郡之内上知村々新田

百五拾三石四斗七升六合

代知

一高千七百六拾五石三斗壹升四合番 澤村

陸奥国白川郡之内 貳拾三箇村

一高千七百六拾五石三斗壹升四合番 澤村

一高六百八拾九石貳斗六合

仁井田村

一高千七百六拾五石三斗壹升四合番 澤村

内

七石六斗八合

同所新田

一高千七百六拾五石三斗壹升四合番 澤村

六拾四石六斗壹升九合 同所新田

一高千三百五拾五石八斗六升四合下野出島村

内 拾石七斗壹升三合 同所新田

一高七百七拾貳石貳斗四升八合 小貫村

内 四石六斗四合 同所新田

一高六百九拾九石六斗四升 千田村

内 五石五斗六升壹合 同所新田

一高九百貳拾五石六斗六升四合 小松村

内 三拾五石四斗八升八合 同所新田

一高八百拾七石五斗八升 宮村

内 四石九斗三升四合 同所新田

一高三百三拾石貳斗貳升八合 中寺村

内 貳拾石五升七合 同所新田

一高六百五拾五石貳斗九升六合 堀野内村

内 八斗六合 同所新田

一高五百六拾六石貳斗壹升壹合 河東田村

内 拾六石貳斗四升九合 同所新田

一高貳百拾五石壹斗七升九合 深渡戸村

一高百六拾貳石三斗七升九合 細倉村

一高七百貳石八斗六升六合 滑津村枝郷 吉岡村

内 六石九斗四升九合 同所新田

一高六百三拾九石九升四合 中野村

内 七石四斗五合 同所新田

一高三百九石八斗四升六合 内松村

内 貳斗八升五合 同所新田

一高六百貳拾六石四斗七升三合 栃本村

内 三拾壹石七斗九升六合 同所新田

一高六百六拾八石壹斗六合 形見村



内

式石六斗四升八合

同所新田

小以高卷万六千五百三拾九石卷斗八升式合

内

三百六拾四石九斗式升六合

新田

同国岩瀬郡之内

拾七箇村

一高九百拾式石七斗卷升壹合

前田川村

内

四拾四石九升三合

同所新田

一高千四拾石卷斗九升七合

和田村

内

四石七斗式升壹合

同所新田

一高千式百四拾式石四斗七升三合濱

尾村

内

七石六斗卷升式合

同所新田

一高六百九拾四石八斗式升三合

小作田村

一高六百七石四斗式升五合

市之關村

内

七斗六升式合

同所新田

一高式百七拾石式斗四升

日照田村

一高八百八拾三石六斗九升六合

田中村

一高千八百四拾壹石五斗式合

狸森村

一高八百三拾七石三斗八升八合

大栗村

一高式百式拾九石六合

四辻新田村

一高千四百四拾式石九斗六升式合

雨田村

内

式拾三石五升九合

同所新田

一高八百八拾三石三斗六升六合

上小山田村

内

三石三斗七升四合

同所新田

一高九百八拾七石三斗五合

下小山田村

内

拾九石式斗五升九合

同所新田

一高千三百七拾六石式斗三升三合塩

田村

内

式拾壹石八合

同所新田

一高千七百六拾四石五斗九升

小倉村

内

六石四斗六升壹合

同所新田

一高七百拾石九斗八升壹合

中宿村

内

七石四斗六合

同所新田

一高六百四拾四石式斗壹升式合

下宿村

内

四拾六石壹斗三升九合

同所新田

小以高壹万六千六拾九石壹斗壹升

内

百八拾三石五斗三升四合

新田

高合三万式千六百八石式斗九升式合

内

五百四拾八石四斗六升

新田

都合高拾五万石

郡数三郡  
村数六百式拾ヶ村

内

六千九百九拾九石九斗九升式合 新田

外

式千百式拾壹石壹升七合

是ハ城附新田改出之分込高也、

百五拾三石四斗七升六合

是ハ、〔室代〕陸奥国白川郡・田村郡・石川郡村々之内、上

知新田高代知ニ御座候、

右之通相違無御座候、以上、

明治元戌辰年十二月

榊原式部大輔

弁事

御中

外

越後国頸城郡之内

三拾五ヶ村

陸奥国白川郡・田村郡・岩瀬郡・石川郡之内

三拾四ヶ村

一高式百四拾四石九斗四升三合

是ハ、天明七未年改之節、新田改出高三百拾九石九

斗壹升四合ト書出候処、文化六巳年村替被申付候節、

陸奥国白川郡・石川郡・田村郡村々之内、高七拾四

石九斗七升壹合上知ニ相成相減、

越後国頸城郡之内

百八拾九ヶ村

陸奥国白川郡・岩瀬郡之内 拾七ヶ村

一高千式百五石五合

一高七拾八石五斗五合

右ハ、陸奥国白川郡・田村郡・石川郡之内新田高、

文化六巳年村替被申付候節、上知ニ相成、於越後国

頸城郡之内代知ニ相渡リ候新田高、

是ハ、天明七未年改以後之新田高、天保九戌年改之節書出置候、

一高六石四斗九升七合

是ハ、越後国頸城郡二子島村・美守村檢地改之節、天保六未年出高二御座候、天保九戌年改之節書出置候、

越後国頸城郡之内

三拾三ヶ村

一田高四石九斗三升五合

崩 村

陸奥国白川郡・岩瀬郡之内

七ヶ村

安政六未年

一高百六拾九石壹斗五升貳合

内

五拾石ハ越後国頸城郡之内新開一本木新田高

是ハ、天保九戌年改以後新田高、嘉永七寅年改之節書出置候、

書出置候、

越後国頸城郡之内

三ヶ村

陸奥国白川郡之内

四ヶ村

一田高三石七斗八升

同 村

一高拾七石七斗貳升四合

是ハ、嘉永七寅年改以後新田高、安政六未年改之節書出置候、

書出置候、

越後国頸城郡之内

拾四ヶ村

陸奥国白川郡・岩瀬郡之内

六ヶ村

元治元子年

一田高拾石四斗八升貳合

槇 村

一高百八拾石三升九合

一田高九石五升七合

須川 村

二八三ノ三

新田高一村限帳写

越後国頸城郡之内

拾四ヶ村

安政六未年

一田高四石九斗三升五合

安政六未年

一田高六石三斗九升八合

元治元子年

田麥平村

一田高九石八斗六升五合

安政六未年

同 村

一田高三石四斗五升八合

元治元子年

飛山村

一田高三石七斗八升

萬延元申年

同 村

一畑高七斗五合

元治元子年

黒井村

一田高拾石四斗八升貳合

元治元子年

槇 村

一田高九石五升七合

須川 村

元治元子年

一田高九斗六升八合

物出村

元治元子年

一田高四石貳斗壹升六合

谷内村

元治元子年

一田高貳拾四石三升貳合

高倉村

元治元子年

一田高拾壹石八斗貳合

溝尾村

元治元子年

一田高八石七斗三升

島道村

元治元子年

一田高四石九斗壹升四合

川詰村

慶應一寅年

一田高三拾貳石貳斗八升六合

姫川原村

慶應二寅年

一畑高拾五石八斗八升六合

同村

慶應三卯年

一田高五石九斗壹升九合

平村

陸奥国白川郡之内

小以高百五拾四石八斗三合

式ヶ村

萬延元申年

一田高六斗壹升六合

宮村

慶應三卯年

一田高六斗八升

下野出島村

小以高壹石貳斗九升六合

同国岩瀬郡之内

四ヶ村

安政六未年

一田高拾壹石

濱尾村

安政六未年

一田高壹石壹斗九升

雨田村

慶應一寅年

一田高壹石七斗

塩田村

慶應三卯年

一田高拾石五升

下小山田村

小以高貳拾三石九斗四升

高百八拾石三升九合

但

新村ハ無御座候、

是ハ、安政六未年以後慶應三卯年迄、越後国・陸奥

国村々新田高、此度御届高二御座候、

明治元年(1868)

二八三/四

明治元年四月七日

御預所

村高帳

昨卯年取箇帳

昨卯年郷帳

村鑑帳村々様子大概  
書ト認有之

右先般依御達、大津御裁判所へ差出置候処、今般御下  
ケ戻、更ニ民政御役所へ差出候様御達御座候ニ付、則  
差上申候、此段申上候、以上、

五月廿三日

彦根中将内

大塚八十五郎

民政御役所

井伊直憲家記

二八四 出軍人旅行心得ヲ達セララル

明治元年四月八日、出軍人旅行心得ヲ達セララル、

二八四/一

達書

弁事局叢書

三道出兵之内、於宿駅往々姓名ヲモ不申聞、無賃錢ニ  
テ宿・駕籠等申付、不法之振舞有之、宿々村々大ニ相  
困ミ候段相聞へ、万民御安撫之

叡旨ニ背キ候次第、甚以如何之儀ニ候、依之今般別紙  
之通御規則被相立候条、諸軍一同嚴重可相守旨、  
御沙汰候事、

四月

定

一 行軍之節、駕籠一切可為停止事、

一 病氣足痛等候ハ、駅所ニ滞在加療養、平癒次第其手

々々へ可致參陣候事、

一 軍医診察之上、急ニ出陣難相成病症証之者ハ、其筋々

へ可送返事、

右規則之通固ク可相守者也、

四月八日

軍防局

右二通太政官代弁事局ヨリ御用ニテ、非藏人松室甲斐  
ヨリ田中清之進辰四月十三日承知之段、内田仲之助御  
届書有之候間、相記置候事、

一日一人ニ付

一白米 六合

一金 一朱

右之通、諸軍一同現人数ニ応シ、藩々頭立候者へ  
十日分ツ、出張會計方ヨリ可相渡候、

四月八日 軍防局

<sup>二八四ノ二</sup>  
(記)藩記ヲ載ス、

右辰四月十三日、太政官代弁事局ヨリ御用ニテ、御留  
守居付役田中清之進、非藏人松室甲斐ヨリ致承知候趣、  
内田仲之助御届書有之、

二八五 棚倉藩別邑倉廩ノ拆符ヲ許サル

明治元年四月八日、棚倉藩別邑倉廩ノ拆符ヲ許サル、

(記)

是ヨリ先、本藩兵播磨ヲ巡撫シ、棚倉藩阿部美作守正静  
別邑ノ倉廩ヲ封ス、本月ニ至リ棚倉藩臣上書シテ其情  
状ヲ陳シ、拆封還付センコトヲ請フ、此日之ヲ聴サル、

<sup>二八五ノ一</sup>  
願書ヲ載ス、

美作守分領播州加東郡上田村陣屋下、高五千八百石、  
村数拾四ヶ村御座候処、去ル正月隣領村々百姓共乱妨

之振舞仕候節、兵庫表ニ出張有之候薩州・長州両家兵  
隊、美作守領分へ出陣、幕領・田安領・一橋領・會津  
領鎮撫方精々差配有之、早速相鎮リ、夫々取締向申達  
御座候節、美作守領分之儀モ何等故障等無御座候得共、  
一ト通取調有之、其節上田陣内ニ取建置候米蔵、薩藩  
封蔵ニ相成申候、右ハ同所開作時節、貧民共手当米、  
並陣屋詰役人共扶持米入置候之儀、追々時節柄ニモ相  
成候ニ付、分領中撫育手当モ仕度、且役人共扶助ニモ  
差支候付、兼テモ申上候通、美作守一藩之儀ハ勤王  
ニ罷在、且是迄奉蒙 御不審候儀モ無御座、旁領地御  
引揚 御沙汰不奉窺、上下難有奉存、弥勤 王相励罷  
在候儀、既ニ遠州・信州兩所分領之儀ハ 御沙汰ニ付、  
夫々非常備向等迄手配仕置候次第ニテ、聊以勤 王他  
念無御座候処、播州分領而已封蔵等御座候テハ、百姓  
共人氣兎角安心仕兼、自然農業励ヲ失候儀モ可相生哉  
ト深心配仕候、元來故障等モ無御座儀ニ付、何卒解封  
相成候様、兵庫表 御裁判所へ歎願仕候処、事柄尤ニ  
被承届候得共、最初ヨリ同所之儀ハ入組居候領地之儀、  
旁此節柄之儀ニモ御座候ニ付、前文之次第内因御掛へ  
以書取申上、何等 御不審之儀無御座段、御附札ニテ

明治元年(1868)

モ被成下候上、兵庫表へモ 御沙汰御座候様奉願候方  
可然旨、尤同所へ相願候テモ宜候得共、却テ急速ニ行  
届兼候ニ付、直御当地ニテ奉願候様、同所御役人中ヨ  
リ御示談モ御座候付、前文申上候通、開作要用之時節  
ニモ相成候ニ付、何卒乍恐 御慈評被成下、早速  
御沙汰之程幾重ニモ奉歎願候、以上、

阿部美作守家来

四月五日

三雲理兵衛

二八五之二  
四月九日ニ朝裁アリ、

願文ノ通、符放シ引渡被

仰付候事、

然ルニ、兵庫裁判所ニ朝裁申出テ処分ヲ請フモ、達命  
ナキヲ以テ、更ニ同月十七日達命ヲ願出ツルニ及ベリ、

二八六 東久世通禧ヲ欧米各国ニ派遣セシム

明治元年四月九日、東久世中将通ニ命シテ、欧米各国ニ  
使セシメラル、

(記)

本日議定兼外国事務局輔東久世中将ニ、英吉利・佛  
蘭西・李漏生・伊太里・魯西亞・和蘭陀六国ニ派遣  
ヲ命セラル、五月二十四日ニ至リ米利堅国ヲ加フ、  
並ニ行ヲ果サス、左ニ書面ヲ載ス、  
二八六ノ一  
東久世中将

英吉利・佛蘭西・李漏生・伊太里・魯西亞・和蘭陀、  
右六ヶ国へ為使節、渡海可致旨被

仰出候事、

四月

太政官日誌  
東久世通禧家記

二八六ノ二

録附通禧書翰

一 翰謹呈候、別後愈御清適拜悦至候、然ハ先月廿二日、  
為御親征浪花表行達被為在、海軍御覽、銃軍御覽等頻  
ニ有之、御同慶存候、小子横濱裁判所総督蒙仰、去卅  
日肥前侍從(鍋島直正 佐幕藩主)為副陸地発足、汽船用意不調ニ付未発船不  
致、十一二日頃ニハ揚艇心積リ御座候付テハ、当節御  
一新ニ付、西洋各国へ

皇国ヨリ使節御指立ニ相成御内評ニ御座候、通禧蒙内  
命居候付、町田民部(久松)随内決仕候、南貞助指下シ、万

端相談為致、町田早々上京有之度、井上聞多<sup>(憲)</sup>へ洋行隨從内決ニ御座候、長崎表御無人ニ相成候テハ、可然人物御見立、替り役被仰付度、委細之儀ハ南貞助へ御聞取被成度、云々、

四月九日

通傳

崎陽鎮台

閣下

(按) 本書ハ、東久世中将より長崎裁判所総督澤主水正<sup>(宣憲)</sup>ニ宛て、本藩臣町田民部其他長崎在勤の吏員に、随行を照会せられたるものなり、

<sup>二八六ノ三</sup> 明治元年四月十八日、議定兼外国事務局輔東久世中将ニ、

英・佛・李・伊・魯・蘭ノ六国ニ使節ヲ命セラル、

(記)

本日、欧州六国ノ使節ヲ命セラレ、五月二十四日ニ至リ、更ニ米國ヲ加ヘラル、並ニ行クヲ果サリシナリ、又當時本藩士町田民部ニ、随行ヲ命スルノ通牒ヲ、長崎裁判所総督ニ致セシニ依リ、本藩吏ヨリ藩庁ニ通牒シタリ、

東久世中将公ヨリ爰元御総督江、急書夜前到着之由ニ

テ、別紙民部殿ヨリ御遣相成候間、差上申候、別紙之趣ニテハ、御同人ニモ不日爰許御出立可被成ト奉存候、此段御届申上候、以上、

四月十七日

<sup>(種久志)</sup> 右衛門様

<sup>(光憲)</sup> 汾陽次郎右衛門

二八七 大久保利通ニ拝謁ヲ賜ヒ、京都ノ事情ヲ奏上セシム

明治元年四月九日、大久保一蔵ニ拝謁ヲ賜ヒ、京都ノ事情ヲ奏上セシメラル、

(記)

大久保、本月六日大坂ニ下リ国事ヲ參議セリ、本日午刻<sup>九ツ時乃、チ十二字</sup>、三條副總裁ノ旅館ニ招カル、随伴參内ス、京都ノ近状ヲ上言スヘキノ命ヲ伝ヘラレ、拝謁ヲ賜フ、大久保詳カニ京都ノ情状ヲ上言シタリ、三條副總裁侍座、上命ヲ伝ラレテ退朝セリ、是レ藩臣ニシテ親シク拝謁ヲ賜フノ始メトス、左ニ大久保ノ日記ヲ載セテ、參照ト為ス、

四月



九日

一 従條公參上仕候様申来、九字比御旅館へ參上候処、參

内候様ト之事ニテ參

内、総裁局へ罷出候、今日ハ

主上於 御前京師近状被 聞召候間、言上候様西四辻

様御取次ヲ以承知仕候、今日成瀬隼人正ナト伺

天機有之、終テ被為 召候ニ付罷出候、

主上出御、條公侍座ニテ、京師事情旁申上候様同公ヨ

リ御沙汰ニ付、

行幸前人心不居合ニ付、如何ト奉案煩居候処、 御出

轡后殊之外人心居合宜敷、当分ニテハ何モ懸念之廉無

御座、各安業、於諸藩モ調練等励勉別テ静謐之段、且

亦関東表之儀、慶喜恭順相立、弥御平定之模様ニ候趣

共申上候処、條公御取次ヲ以 御安心可被遊被 奏、

退出セヨトノ條公御沙汰ニテ退キ候、 実ニ卑賤之小子

殊ニ不肖短才ニテ、如此 玉座ヲ奉穢候儀、絶言語恐

懼之次第、余一身候仕合感涙之外無之、尤藩士ニテハ

始テノ事ニテ、实ニ未曾有之事ト奉恐懼候、 二字比ヨ

リ(云也)木場・本田同道、小大夫へ立寄、三橋樓へ參リ、(尾藏)税

所モ參ル、及大飲相祝シ候、四字過乗船帰京、尤本田

同船イタシ候、今夜月晴、淀水蒼茫可愛風景也、

二八八 私ニ仏体ヲ破毀スルヲ禁シ其措置ヲ稟申

スルヲ命セラル

明治元年四月十日、私ニ仏体ヲ破毀スルヲ禁シ、其措置  
ヲ稟請スルヲ命セラル、

諸国大小ノ神社中、仏像ヲ以テ神体ト致シ、又ハ本地  
抔ト唱へ、仏像ヲ社前ニ掛、或ハ鰐口・梵鐘・仏具等

差置候分ハ早々取除、相改可申旨過日被

仰出候、然ル処、旧来社人・僧侶不相善、氷炭ノ如ク

候ニ付、今日ニ至リ、社人共俄ニ威權ヲ得、陽ニ御趣

意ト称シ、実ハ私憤ヲ霽シ候様ノ所業出来候テハ、御

政道ノ妨ヲ生シ候而已ナラス、紛擾ヲ引起可申ハ必然

ニ候、左様相成候テハ、実ニ不相濟儀ニ付、厚ク令顧

慮、緩急宜ヲ考へ、穩ニ可取扱ハ勿論、僧侶共ニ至リ

候テモ、生業ノ道ヲ不失、益国家ノ御用相立候様精々

可心掛候、且神社中ニ有之候仏像・仏具等、取除候分

タリトモ、一々取計向伺出、御差込可受候、若以來心

得違致シ、粗暴之振舞等於有之ハ、屹度曲事ニ可被

仰付候事、

但

勅祭之神社

御宸翰

勅額等有之候向ハ、伺出候上御沙汰可有之、其余  
之社ハ裁判所・鎮台・領主・地頭等へ委細可申出  
候事、

四月

(記)

四月朔日、日吉神社ノ社司樹下石見守茂國、時ニ神祇事務局長判事・生源  
寺陸奥守希等、神仏區別ノ令アリシヲ稱ヘテ、社人浪  
士・土民數十人ヲ語頼ヒ、延暦寺ニ上リ、祠壇ノ仏像・梵  
具ヲ焚毀ス、寺僧之ヲ天台座主梶井宮ニ訴フ、是ニ於テ  
朝議本令ヲ発シテ、肆ニ処置スルコトヲ禁セラレタリ、

【参照】

樹下茂國口供節録

私儀、神祇官権判事被仰付罷在候処、三月二十九日夜  
元同職日吉社司ヨリ、今般大津御裁判所ヨリ神仏混淆  
御取分之御達ニ相成候ニ付、早々日吉社取調可致旨相  
談取極候、就テハ兼テ承知之通、人少之義、且於山門

ハ如何之風聞モ有之候ニ付、旁為加勢多分之人數召連  
參リ異候様申越候ニ付、右之意味合ヲ以、兼テ懇意罷  
在候播州明石御崎神職宮本信濃、其節京師吉田表ニ相  
詰罷在候ニ付、相頼候処、同人周旋ヲ以、參州猿投神  
職三宅肥後、信州下諏訪神長官、同国川中島八幡宮神  
職松田大藏、同国武藤若狹、同角田大隅、作州天窟戸  
開社神職中川陸奥、播州処不覚三浦越中、因州右同斷  
飯田主税、出雲大社上官富饒夫、其外名前不相覚候得  
共、凡上下四十人余、私同道四月朔日昼前頃、生源寺  
從三位宅へ着、右人数之内、時節柄ト申且戒心モ有之  
儀ニ付、兵器相携候モノモ御座候処、元同職中モ喜悅  
仕、夫ヨリ早速取調可致旨御達之趣ヲ以、山門執行代  
へ御内陣之鍵相渡シ、且山門ヨリモ可立会旨生源寺從  
四位ヲ以申入候処、東塔白毫院面会、右鍵之儀ハ終座  
主宮御大切之品、前々ハ其御殿ニ御留置相成候処、其後  
執行代へ御預ケニ相成候儀故、一応座主宮へ相伺候上  
可相渡、況末夕山門へハ為何御沙汰モ無之候ニ付、旁  
延日之儀相断候趣ニ候得共、元ヨリ銘々共私ニ取計候  
儀ニ無之、朝廷ヨリ被 仰出之御趣意、延日難相成相  
心得、且私ヨリ相頼候人数四十人余、兼テ同職之モノ

雇置候人夫三十人計モ相待居候事故、勢不得止事、一同之者へ申聞、私執筆ニテ又々執行代へ一書遣置、其俥一同淨衣ヲ着シ、社頭へ相登、夫々取分仕候、然ニ仏像仏具等ハ一所ニ囲置可申議定ニ候処、其場ニ相成京師ヨリ参リ候者之内、致焼捨ニ候方可然哉之旨申聞候ニ付、私儀モ至極之事ト存、老分之者へ申聞、夫々差図致シ、仏像仏器等ハ都テ為焼捨、跡へハ真禰ト唱、金ニテ造リ清櫃ニ相納候古物、御神体ニ祭替申候、其節厨子等ヲ社司共ヨリ打抛、又ハ多人数之内槍之石突等ヲ以打碎火中致候趣、右ハ兼テ不都合ノ義無之様ト存、精々奔走取締罷在候得共、手広ノ場所、殊ニ多人数人氣立候義ニ付、右様粗暴ノ振舞有之候哉モ難計、甚以恐縮ノ至ニ奉存候、右焼捨候灰ハ謹テ清川へ流シ、清流無之場所ハ林中へ取除申候儀ニテ、右焼捨候品之員數ハ相覺不申候得共、罌口・燭台其外金物類並燒殘之分持歸リ、其後神祇官へ菰包九ツニ致シ差出シ、其外追々取分仕候、小罌口・燭台・神輿之天人燒金物二俥程ハ、追テ神鈴等調達用意之心得ヲ以、別段神祇官へ伺濟ト申義ニハ無之、勝手ニ社地土藏又ハ生源寺三位宅へ留置候、右人數ハ翌二日勝手ニ白川越並大津ヨ

リ引取申、其節神祇官出役之趣申聞由、右ハ私在役中之義ニ付、家来之モノ共其辺之粗言有之哉モ難計候、

滋賀集記  
(復古記にて補正)

二八九 銅会所ヲ大坂ニ置キ、人民ノ私ニ之ヲ販賣スルヲ禁ス

明治元年四月十日、銅会所ヲ大坂ニ置キ、人民ノ私ニ之ヲ販賣スルヲ禁セラル、

此度御一新ノ折柄、大坂銅会所御取立相成候ニ付テハ、兼テ旧幕府ヨリ相触置候通り、諸国出銅ハ勿論、古銅・地銅ニ至ル迄、右会所へ屹度可相廻候事、

但大坂表へ運送ニ差支候廉モ有之候ハ、其旨銅会所へ可届出候事、

一 外国人ハ勿論、自国タリトモ銅直売不相成、若心得違之者於有之ハ、銅取揚之上、急度 御沙汰可有之候事、

一 荒銅、諸山元ニテ勝手ニ吹立、諸器物等ニ仕立候儀、不相成候事、

一 諸国ヨリ大坂表へ荒銅積廻シ候節ハ、其船問屋ヨリ

員數並送り状共、時々銅会所へ可届出候事、

一 荒銅・古銅御買上直段之儀ハ、外国並諸方へ御弘ニ相成直段ニ応シ、時々相定候事、

四月

二八九ノ二  
〔記〕

土州藩用立人住友吉左衛門、銅貨鑄造ノ利アルヲ稟ス、同藩朝裁ヲ仰クニ至リ、本令ヲ發セラレタリ、

上申書

別紙申出ノ趣、差向世上ノ難渋ヲ救ヒ、下民其処ヲ得候筋ニ相当リ、且洋商ノ胸算ヲ免レ候一策ニ付、宜御評議被 仰付度奉存候、以上、

山内土佐守内

四月

藤本淳七

弁事

御役所

別紙

乍恐以書付御願奉申上候、

当春騒動之一条ニ付、銅座御役所御廢止ニ及、依テ幕

銅預リ之分、並ニ手形ヲ以市中へ幕府ヨリ売払之廉々、私始外吹屋中ヨリ巨細ニ奉申上候通相違無御座候、其頃ヨリ市中渡之方御差留ニ相成、京坂之銅商・銅職之者、業体ニ離レ、今日之口養ニ差支、千万難渋仕候、今哉銅座御役所御復シ之趣ヲ以テ、地役方ヨリ申論有之、無拠是迄差扣へ奉待候得共、彼是時日相流レ、市中一般之迷惑難黙止候間、何卒早々売払之儀御免被為 仰付被成下度奉願上候、殊更幕府ヨリ銅手形ヲ以、金子借入向夥敷有之、此辺之儀モ夫々訳立、手順相立不申テハ、市中融通必至ト差迫、是力為數多之銅商失産業申候、乍恐銅座御開被為遊候ニ付テハ、差当式三拾万金之御手当方無御座テハ、御復シ之程無寬束、左候時ハ右幕銅火急御売払被為遊候様相成候、然ルニ異人共 皇國之御費弊ヲ見落銅価下落、第一 御国宝之威ヲ失ヒ、残念至極奉存候、粗承リ候処、鑄錢之儀、諸方ヨリ御願奉申上候由、右御預リ之幕銅ヲ以、私へ鑄錢吹立方被為 仰付被成下候ハ、莫大之御益可奉備候、則算勘書、別紙御高覽可被成下候、私家ハ往古ヨリ銅一派之御用相蒙、正路ニ業体仕候間、私慾ニ溺レ不申、何卒

天朝へ聊之勤勞仕度志願ニ御座候、尤鑄錢之策ヲ以、銅

夷國渡爰一兩年手ヲ留候ハ、銅価之高貴自然ニ顯レ

可申、兩全之御事ト乍恐奉存候、勿論御勘察吏御添被

仰付、明白ニ鑄立方可仕候、

右以書附御願奉申上候、以上、

御用達大坂

辰四月

住友吉左衛門印

御預

土州御役所

本書附箋

幕銅出入次第、並ニ銅手形ヲ以テ金子借入等之儀ハ、

銅座地役方之手元ニテ明細ニ相分り可申、聊紛ハ敷儀

無御座候、

別紙算勘書

一半朱錢十萬枚

此金三千百貳拾五兩

内

一千三十拾五兩

吹銅千四百四貫目、此斤六千九百斤、百斤ニ付拾五兩替

一百四拾六兩貳分貳朱

錫百二十八貫目、此斤八百六拾貳斤五步、百斤ニ付拾七兩替

一六拾兩壹分貳朱

鉛百三十八貫目、此斤同斷、百斤ニ付七兩替

一式百五拾兩

兩面鑄出シ並ニ仕上ケ手間賃

一百五拾兩

炭代並職人飯料諸入用

ノ千六百四拾貳兩

殘千四百八拾三兩之益

此銅六千九百斤ニ割

百斤ニ付凡貳拾壹兩貳分之益

一右拾萬枚割方、壹枚ニ付目方拾貳匁之積

吹銅八步 千四百四貫目

錫 壹步 百三拾八貫目

鉛 壹步 百三拾八貫目

ノ吹元地へ壹割五步吹減増

一吹場所壹ケ所ニテ、一日錢千枚吹立之積、拾萬枚

吹立候時ハ、百ケ所ニ御座候、

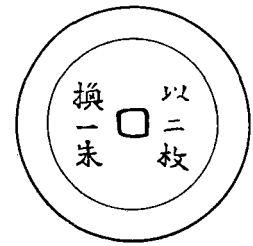
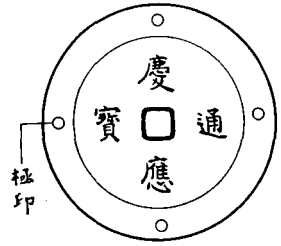
一五拾ケ所之吹場ニテ、此錢五萬枚、一日之御益金

七百四拾壹兩貳分、

一ケ年休日之外三百日之積

此吹銅百三萬五千斤

半朱錢雛形



右之通之凡積ニ御座候得共、方今諸色高直ニ候間、諸入費増減難計ニ付、御益之治定ハ為試吹立候上ニ御座候、

大坂

辰四月

住友吉左衛門印

(按) 本建言ハ、終ニ採納実行ニ至ラスシテ止ミタリ、

二九〇 在京諸藩兵ニ日時ヲ定メ操練ヲ行ハシム

明治元年四月十日、在京諸藩兵ニ日時ヲ定メ操練ヲ行ハ

シメラル、  
二九〇ノ一

二、七ノ日

(前田齊泰、前加州藩主)  
加賀中納言

三、八ノ日

- 土方 響千代 (雄永、孤野藩主)
- 永井 信濃守 (直哉、柳藩主)
- 青木 源五郎 (重義、麻田藩主)
- 藤堂 佐渡守 (高邦、久居藩主)
- 松平 下総守 (忠誠、忍藩主)
- 森 越後守 (忠儀、赤穂藩主)
- 松平 兵部大輔 (慶憲、明石藩主)
- 安藤 飛騨守 (直裕、紀伊田辺藩主)
- 西尾 隱岐守 (忠篤、横須賀藩主)
- 淺野 紀伊守 (長助、芸州藩主)
- 小笠原 佐渡守 (長因、唐津藩主)
- 一柳 因幡守 (賴紹、小松藩主)
- 徳川 元千代 (義宣、尾州藩主)
- 有馬 遠江守 (道純、丸岡藩主)
- 南部 美濃守 (利剛、盛岡藩主)
- 戸田 丹波守 (光則、松本藩主)
- 真田 信濃守 (幸民、小野藩主)
- 一柳 對馬守 (未徳、小野藩主)
- 京極 飛騨守 (高厚、豊岡藩主)

四、九ノ日

青山峯之助 (幸直、八幡藩主)  
 島津修理大夫 (忠義、薩州藩主)  
 松平大和守 (直克、前橋藩主)  
 松平越前守 (茂昭、福井藩主)

朽木近江守 (為綱、福知山藩主)  
 上杉彈正大弼 (資憲、米沢藩主)  
 津輕越中守 (承昭、弘前藩主)  
 土井能登守 (利恒、大野藩主)

小笠原左衛門佐 (長守、越前勝山藩主)  
 池田信濃守 (重政、備前岡山藩主)  
 池田相摸守 (茂範、阿州藩主)  
 蜂須賀阿波守 (德定、因州新田藩主)  
 紀伊中納言 (德川茂承、紀州藩主)

中川修理大夫 (久昭、岡藩主)  
 鍋島肥前守 (重天、佐賀藩主)  
 丹羽長門守 (氏中、三草藩主)  
 谷大膳亮 (衛滋、山家藩主)  
 牧野遠江守 (康濟、小諸藩主)

五、十ノ日

右藩々日割之通、軍事総督於聖護院村操練場、調練  
 御覽被為在候間、当朝辰半刻、人数相揃置候様可致事、

四月

一 当朝辰半刻、無遅々人数相揃、着到之御隊長ヨリ可  
 申出候事、

一 御差図次第、操練相初可申候事、

秋月長門守 (種毅、高鍋藩主)  
 相良遠江守 (顯基、人吉藩主)  
 松平主殿頭 (忠和、島原藩主)  
 稻葉右京亮 (久通、臼杵藩主)  
 松平左京大夫 (顯英、西条藩主)  
 毛利伊勢守 (高謙、佐伯藩主)  
 小笠原近江守 (貞正、小倉新田藩主)  
 山内土佐守 (豊範、土州藩主)  
 伊東播磨守 (長幹、岡田藩主)  
 木下備中守 (利恭、足守藩主)  
 板倉攝津守 (勝弘、鹿瀬藩主)  
 丹羽左京大夫 (長國、二本松藩主)  
 本多平八郎 (忠良、岡崎藩主)  
 毛利大膳大夫 (敬親、長州藩主)

一 兵隊屯所ニオキテ、発砲一切致間敷事、  
一 御暇之御沙汰有之迄、隊々可扣居候事、  
一 進退之節、可為行軍事、

四月十日

二九〇ノ二  
(記)

本日、軍防事務局督ノ命ヲ以テ、本藩ハ三・八ノ日ニシテ、尾州藩ヲ始メ十一藩ト俱ニ操練ヲ行ハシム、又此日ハ、加州藩始メ操練アリタリ、左ニ参照トシテ載

ス九月二十八日ノ項參看

加賀中納言

蜂須賀阿波守

土方聳千代

井上河内守〔正直、浜松藩主〕

松平下総守

安藤飛驒守

松平兵部大輔

藤堂佐渡守

以上連署

柳澤甲斐守〔保中、郡山藩主〕

森 越後守

永井信濃守〔長岡、岸和田藩主〕

岡部筑前守

青木源五郎

以上連署

右藩々、明後十日軍防総督於聖護院村、操練 御見分被為在候、当朝辰ノ半刻、人数相揃置候様可致候事、

四月八日

軍防局

【参照】

嵯峨實愛手記

四月十四日、自今日日々調練可有之ニ付、軍務督並掛之内一人官へ出仕、自余聖護院村へ午時迄出仕、午後官代へ出仕之由、弁事平松ヨリ有届、

二九一 本藩京都守衛方限ヲ稟ス

明治元年四月十日、本藩京都守衛方限ヲ稟ス、

二九一ノ一 上申書

一千本通ヨリ西洛外涯迄、

二條通ヨリ北洛外涯迄、



明治元年(1868)

右稲葉右京亮様請持、

一鳥丸通ヨリ西堀川限り、

二條通ヨリ北丸太町迄、

右京極佐渡守様請持、

右ハ、今般重テ右御両侯へ市中御取締被

仰付候ニ付、右ノ通方限取極、左候テ其余上之京ハ、是迄之通弊藩請持ニテ相勤申候間、此段御届申上候、以上、

薩摩少将内

四月十日

永山左内

弁事

御役所

二九二ノ二  
(記)

四月八日、京中守衛ヲ本藩始メ列藩ニ達セラレ、本藩

ハ丸龜藩 京極佐渡守朝徹 曰杵藩 稲葉左京亮久通 ト謀リ、守衛ノ区域ヲ定

ムルコトヲ達セラル、本日乃チ其方限ヲ定メテ稟申シ

タリ、両藩へノ達書ヲ載ス、

京極佐渡守

各通

稲葉右京亮

右上京中取締被

仰付候間、島津修理大夫へ引合、急度行届候様可相勤

旨、

御沙汰候事、

四月八日

〔表紙〕

忠義公史料 明治元年四月三

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

目録

- 一行在所ニ於テ文ヲ講シ、武ヲ演スルヲ天覧アラセラル  
四月十日
- 記 行在所日誌
- 参照 土方久元日記節録
- 一大政更張ノ朝旨ヲ奉シテ旧習ヲ釐革シ、人才ヲ擯擢シ  
テ治績ヲ奏スヘキコトヲ諭告ス<sub>四月十日</sub>
- 記 布告
- 一江戸在留ノ藩臣引払、残留ノモノナキヲ稟ス<sub>四月十日</sub>
- 記 届書
- 一諸侯ノ襲封・叙任等ノ閱歴ヲ録上セシメラル<sub>四月十日</sub>
- 記 達書
- 一在京諸侯ノ既ニ誓約ニ就キテ官守ナキモノハ帰藩、政  
治ヲ釐革シ且兵備ヲ嚴ニシ以テ後命ヲ俟タシム<sub>四月十日</sub>
- 記 御沙汰書
- 一藩庁忠義勅書拜戴、御物下賜アリシコトヲ達シ、藩士  
ノ賀詞ヲ上申セシム<sub>三月三日</sub>
- 記 申達書二通
- 藩記
- 一忠義大坂行在所ニ参内天氣ヲ伺フ<sub>四月十日</sub>
- 参照 大久保利通日記節録
- 時任某書牘節録
- 一藩兵奥羽出兵ヲ命セラル<sub>四月十日</sub>
- 記 御沙汰書
- 参照 大久保利通日記節録
- 一忠義北陸道ノ出兵ヲ命セラル<sub>四月十日</sub>
- 記 御沙汰書
- 藩記

一 供奉ノ公卿・諸侯へ親征供奉ノ条目ヲ命セラル四月十五日

記 達書

一本藩御台所御門守衛ヲ免セラル四月十五日

記 御沙汰書

藩記

一本藩大坂巡邏ヲ免セラル

記 御沙汰書

藩記

土井大炊頭願書并ニ同人へ達書

参照 慶明雜録節録

一 藩會計方掛設置ヲ達ス四月十五日

記 藩老申達書(藩會計方掛設置ノ達アリ)

一 扈蹕ノ諸藩ニ令シ、日ヲ刻シテ番次ニ其兵ヲ練閱セシム四月十六日

記

達書并ニ別紙諸藩兵隊訓練日割

一 講筵ヲ行在所ニ開ク四月十六日

記 達書

参照 非藏人日記節録

有栖川宮家記

一 車駕座摩神社ニ詣ス、遂ニ東本願寺掛所ニ臨ミ神祇事

務局判事福羽美静ニ命シテ古事記ヲ講セシム四月十七日

一 政令伝達ノ条規ヲ定メラル四月十七日

記 達書

月番受持覚書

一 東久世通禧外国事務受渡終了ヲ報ス

記 東久世通禧ヨリ大総督ニ贈ル書(神奈川奉行ヨリ外国事務受渡処置結了シタルヲ報ス)

横濱裁判所総督東久世中将、神奈川奉行及ヒ横須賀製

鉄所ヲ収ム四月二十日

記 届書

参照

大久保利通日記

土方久元日記

一 岩下方平外五名ヨリ兵庫裁判所総督東久世通禧ニ、楠

公社ヲ兵庫ニ造立シ神号勅許ヲ奏請セラレンコトヲ建

言セリ四月二十日

記 建言書

一 勅シテ贈正三位左近衛權中将楠正成ノ祠堂ヲ湊川摂津八郡

ニ營シ、其子正行以下ヲ配祀セシメラル四月二十一日

記 御沙汰写

布告

達書

一 朝政御一新ニ付キ、諸藩政令ヲ大變革スヘキコトヲ命  
ス四月二  
十一月二

一 大坂銅会所召建ヲ命ス四月二  
十一月二

一 推歩並領曆等執行ノタメ水間喜藤太上京ヲ命セラルル四月  
二月

二十

記 島津忠義家記

参照 大久保利通日記

一 議定・参与・徴士・在坂諸侯ヲ召シ、長崎浦上村異教

徒処分ニ付キ下問ス四月二  
十一月二

記 御沙汰書写

一 長崎裁判所総督澤宣嘉管内天主教徒ノ処分ヲ稟請ス四月  
二月

二十

一 奥羽鎮撫ノ為出軍命セラル

二九二 行在所ニ於テ文ヲ講シ、武ヲ演スルヲ天

覧アラセラル

明治元年四月十一日、行在所ニ於テ文ヲ講シ、武ヲ演ス  
ルヲ天覧アラセラル、

(記)

本日巳ノ刻、東本願寺掛所へ

行幸被為 在、議定・参与ノ面々ニ調ヲ賜ヒ、夫ヨリ

飯ノ演武場本堂へ

臨御被為 在、奈良県生野郡十津川郷士・肥後藩士ノ演武ヲ、玉簾

ノ中ヨリ

天覧被為 遊、相済ミ

入御、続テ玉座御前ニテ、読書講義ノ事ヲ被

仰出、

御座ノ間へ被 召出、親ク

天顔ニ咫尺シ奉リ、講義ヲ始ム、平戸藩士松浦肥前守詮大學ノ

三綱領ヲ講シ、不<sub>レ</sub>磨田中國之輔孫子ノ謀攻篇、義経新田三郎三

略ノ上篇ヲ講シタリ、又松浦ト信要丸西洞院大夫ノ演武ヲ

天覧アラセラレ、各物ヲ賜ヒ、申ノ半刻ニ至リ

還幸在ラセラル、

【参照】

土方久元日記節録四月小十一日 雨

朝拜如例、今朝ハ東本願寺へ

主上行幸被為在候ニ付、三條公ニモ供奉御先ニ被為成、

夫故未明ヨリ致参殿候所、御使被仰付候テ、馬上ニテ

參候事、

二九三

大政更張ノ朝旨ヲ奉シテ旧習ヲ釐革シ、  
人才ヲ撰擢シテ治績ヲ奏スヘキヲ告諭ス

明治元年四月十二日、大政更張ノ朝旨ヲ奉シテ、旧習ヲ  
釐革シ、人才ヲ撰擢シ、治績ヲ奏スヘキコトヲ告諭セラ  
ル、

御布告

先般御誓被為在、

御宸翰ヲ以テ、御布告被仰出候通、

朝政御一新之時ニ膺リ、総テ簡易質略之

思食ヲ以、御国体御更張被為在度トノ御事、依テハ

於諸藩モ御趣意ヲ奉体認、速ニ政令ヲ大變革致シ、

奉安

宸襟候様無之テハ、不相濟次第勿論ノ事ニ候、慶應元年 仮令慶

元以還受封之国法制令タリト雖トモ、当今之時勢ニ不

都合之儀ハ、断然廢棄致シ、一新ノ基本ヲ相立、

朝廷諸藩一致之全力ヲ尽シ候テコソ、日新之 聖業相

顕候御事ニ可有之、然ルニ

朝廷將門之政權ヲ御取返シ被遊候テヨリ、復古ト申候  
ヘハ、只

朝廷ノ御事而已ト相心得候者モ有之哉ニ相聞ヘ、甚以  
無謂事ニ候、抑各藩

朝旨ヲ奉体認、一新ノ基本ヲ建ルハ、第一旧習因循ヲ  
看破シ、賢才ヲ挙ケ、国政ヲ革ムルニ在リ、然ニ諸藩

多クハ任撰ヲ主トセス、専ラ門閥ヲ以テ、政柄ヲ為執  
候ヨリ隨テ旧習難改、姦吏難除之患可有之哉、今般於

朝廷モ、撰錄・門流ヲ被廢候程之事ニ有之候得ハ、諸  
藩ニ於テ世祿・家格ヲ以、政事ヲ専ラニシ、方今之事

体ニ不相合有之、或ハ庸劣其任ニ不堪向等ハ、速ニ廢  
黜致シ、非常拔擢ヲ以テ賢才ヲ登庸シ、国政十分ニ改

正致シ候テ、

皇国一体復古之

御趣旨貫徹致シ候様

御沙汰候事、

右之通被

仰出候上ハ、諸藩速ニ実効相立可申、若等閑ニ相心得、  
猶因循有之候向ハ、品ニヨリ御取糺可有之、依テハ追

々諸国巡察使被差向、改正ノ政績可被

聞食候間、此旨相心得可申候事、

四月

太政官日誌  
毛利元徳家記

明治元年四月十三日、諸侯ノ襲封・叙任等ノ閱歴ヲ録上  
セシメラル、

達書

一当主

家督年月日

実子養子

任叙爵位年月日

俗名実名

一嫡子

一庶子

乘出年月日

其他同前

一隠居

致仕年月日

其他同前

雛形之通、明細ニ書認メ、五月中限、太政官代へ可差

出候事、

但於当地取調相成候向並近国ノ分ハ、早々可差出候

事、

右之通被

二九四 江戸在留藩臣引払、残留ノモノナキ旨ヲ  
稟ス

明治元年四月十二日、江戸在留藩臣引払、残留ノモノナ  
キ旨ヲ稟ス、

修理大夫家来江戸屋敷へ罷在候定府共、去年以来追々  
国許へ引取申付置処、病氣等ニテ聊之人体相残居候得  
共、右ハ最早出立、道中ニ差掛候者モ可有之、且余ハ  
総テ引払申候間、此段御届申上候、以上、

薩摩少将内

四月十二日

内田仲之助(政風)

(記) 四月九日、列藩ニ達セラル、本日残留ノモノナキ  
旨ヲ稟申シタリ、

二九五 諸侯ノ襲封・叙任等ノ閱歴ヲ録上セシム

仰出候事、

四月 十三日

二九六 在京ノ諸侯既ニ誓約ニ就キテ官守ナキモ

ノハ帰藩シテ、後命ヲ俟タシム

明治元年四月十三日、在京ノ諸侯既ニ誓約ニ就キテ官守  
ナキモノハ帰藩シテ、其政治ヲ釐革シ、且兵備ヲ嚴ニシ、  
以テ後命ヲ俟タシメラル、

諸侯參 朝、御制度之儀ハ追テ可被

仰出候へ共、去冬以來引統、別テ当正月三日後、不容

易御時勢ニ立至リ、迅速上京

王事ニ勤勞セシメ候段、神妙之至被

思食候、然処永々滞京致疲弊、往々藩屏之任難堪様立  
至候テハ、実以テ不相濟事ニ付、供奉並議定職・参与  
職及京師守護取締等被

仰付置候外、御誓約相濟候輩ハ、左之通兵隊残置、

一先御暇被下候、就テハ帰国之上、先達テ 御誓約被  
為在候 御趣意ヲ奉体認、速ニ家政向改正ハ勿論、未

タ

皇国内御平定ニモ不立至事ニ付、弥以不虞之備ヲ嚴ニ  
シ、於国邑御指揮可奉待候、將又未タ 御誓約不相濟  
輩ハ其尽滞京可罷在旨被

仰出候事、

一大藩 百五十人ヨリ二百人迄

一中藩 百人ヨリ百五十人迄

一小藩 二十五人ヨリ百人迄

但右人数定之儀ハ、兵隊而已ニシテ、其余役方之者、

用弁相調候丈相当相詰可申、総テ簡易質略ヲ主ト

シ、無用之者滞在屹度可致用捨候事、

附依 御沙汰御警衛人数之儀ハ、格別之事、

右之通、万石以上不洩様相達候事、

四月

本日在京列藩ニシテ、官守ナク盟約ヲ立テタルハ、兵  
員ヲ残シ、便宜帰藩ヲ許サレ、未タ其事ヲ了ヘサルモ  
ノハ、滞京セシメラル、当時盟約未濟ノ人員、六十人  
ニ上レリトゾ、

(按) 当時本令ニ遵ヒ、帰藩ヲ請ヒ許允ヲ得タルモノヲ  
載セテ、情況ヲ察知スルニ資ス、

〔赤穂藩主〕  
森 越後守 忠儀

四月十五日藩士引率帰藩ヲ請ヒ、廿九日許サレタリ、

〔浜松藩主〕  
井上河内守 正直

四月十七日全上

〔久利、出石藩主〕  
仙石讃岐守

四月十七日、左ノ兵員ヲ残シ、帰藩ヲ請ヒタリ、

一 五十人  
高野御警衛場詰

一 二十五人  
御当地詰

〔佐伯藩主〕  
毛利伊勢守 高謙

四月十七日全上但京都詰

一 隊長 一人

一 二十五人 銃隊

一 七人 役人

〔庭瀬藩主〕  
板倉攝津守 勝弘

四月十七日全上

一 隊長 一人

一 銃隊 二十五人

一 役人 五人

〔高厚、豊岡藩主〕  
京極飛驒守

四月十七日全上

一 兵員 二十五人  
桂御所警衛

四月十八日全上

一 銃隊 四十人

〔道純、丸岡藩主〕  
有馬遠江守

四月十九日全上

兵員ノ事ヲ載セス、

〔忠幹、新宮藩主〕  
水野大炊頭

四月二十日全上

兵隊 四十人

〔広瀬藩主〕  
松平佐渡守 直巳

四月二十日全上

兵隊 三十人

〔久吉藩主〕  
相良遠江守 頼基

四月二十日全上

士分隊 三十六人

〔母里藩主〕  
松平主計頭 直哉

四月二十二日全上

兵隊 二十五人

〔重義、麻田藩主〕  
青木民部少輔

四月二十二日全上



兵隊 三十人

〔降備、綾部藩主〕  
九鬼大隅守

四月二十五日 〔全上脱丸〕

人数 二十五人

〔采徳、小野藩主〕  
一柳對馬守

四月二十五日全上

銃隊 三十一人

〔爲綱、福知山藩主〕  
朽木近江守

四月二十七日全上

兵隊 三十人

〔道美、高富藩主〕  
本莊宮内少輔

四月二十八日全上

留兵ノ事ヲ載セス、

〔利恭、足守藩主〕  
木下備中守

閏四月二日全上

隊長 二人

銃隊 三十人

役人 八人

〔因州藩主〕  
池田相摸守 徳定

閏四月五日全上

東山道人数引掃迄、兵隊残置カサル旨ヲ届出テタ  
リ、

〔狐野藩主〕  
土方大和守 雄志

閏四月五日全上

御台所御門守衛兵ヲ差出スニ依リ、別ニ兵員ヲ留  
メサル事ヲ届出テタリ、

二九七 島津忠義勅書拝戴、御物下賜アリシ旨ヲ

達シ、藩士ノ賀詞ヲ上申セシム

明治元年四月十三日、藩庁忠義勅書拝戴、御物下賜アリ

シコトヲ達シ、藩士ノ賀詞ヲ上申セシム、  
二九七ノ

御宸翰御誓文並勅書且御筆ヲ以被仰出之趣有之、諸士  
へ拜見可被仰付候間、明後十五日四ツ時罷出候様、向

々可致通達候、

四月十三日

太守様御儀、二月廿八日從

朝廷御短刀・御文台・御料硯御拝領、

勅書御頂戴、且積年勤 王ノ御志御厚

叡感被 思食上候旨、被為蒙

勅命候段御到来候、依之諸士明後十五日四ツ時登城、

太守様

中將様へ御祝儀可被申上候、但改服、

四月十三日

(鳥津久治)

圖書

(桂久武)

右衛門

(川上久輪)

龍衛

(新納久倫)

刑部

(町田久憲)

内膳

被仰付候間、明後十五日四時罷出候様、向々江可致通  
達事、

但改服、

今般以

宸翰御別紙之通、不容易

御趣意被

仰出、

主上

神靈ニ被為誓、於

聖前

太守様被遊

御誓約候付、尚此上

御職掌被為尽、今般大事御請之詮被為立

御家名不被失様、伊勢

御前江被

召出、御別紙之通

御筆ヲ以被

仰出、殊ニ

御出輦後、御留守中京都守護之儀、被為蒙

勅命候付テハ、不容易

二九七ノ二  
今般

天朝ヨリ

太守様御短刀并御文台・御料硯被遊御拝領候付、諸事

取扱向之儀ハ、当正月

太守様御劍御拝領之御例ニ準シ、致取扱候様可被仰付

哉之事、

御宸翰御誓文并

勅書且 御筆ヲ以被 仰付候趣有之、御一門方并島津左

衛門惣一列、大番頭以下月次御礼罷出候面々諸士江拜見

明治元年(1868)

御大任之御事ニテ、此末取締向不行届候テハ、被对  
朝廷急度不相濟趣共、於京都細々

御沙汰被為

在候条、一統謹テ拜見

御趣意之程、末々ニ至迄厚奉貫徹、猶亦拙忠勤候様可

仕候、

但末々之者共、支配頭・主人等ヨリ可申聞候、

四月

圖書

右衛門

龍衛

刑部

内膳

四月

圖書

右衛門

龍衛

刑部

内膳

一通 御一門方

一通 島津左衛門一列

一通 大番頭ヨリ当番頭迄、無役・大身分・

寄合

一通 寄合并・部屋栖・月次御礼罷出候面々

迄

一通 小番・新番・御小姓与

一勅書写御右筆へ渡置、御文台ニ載御家老座へ為備、水

仙之間之格ヲ以、御家老・若年寄拜見、御側役・御右

筆頭席詰之事候得共、御家老座故不及其儀候、

一御一門方鶴之間へ御出席之上、御家老中出席、

御宸翰等写御右筆御文台へ備之、月番御家老ヨリ

御宸翰等写御拜見之上、演達御拜見、畢テ被退座、

但御用人・御側役・御右筆頭老人ツ、席詰、外ニ御

用人致引進其候着座、

太守様御儀二月廿八日

御參

内被遊候処、於御学問所被為拜

天顔、御別紙之通

勅書被遊

御拜見、且又御別紙之通、不容易被為蒙

勅命候付、一統謹テ可奉拜見候、

一島津左衛門一列、松之間へ着座、御家老中御障子付へ  
出席、

御宸翰等写御右筆御文台へ載相備之、月番御家老ヨリ  
拜見有之候様演達、拜見畢テ退座、

但御用人・御側役・御右筆頭老人ツ、席詰、

一大番頭以下無役・大身分・寄合並寄合并・部屋栖ニテ、  
月次御礼罷出候面々、松之間縁類之格ヲ以、御用人以  
下諸御役人、竹之間之格、敷舞台へ并居、

御対面所御中段へ御家老中出席、演說畢テ

御宸翰等写、御上段塗御敷居上へ御文台ニ受、

御右筆相備、人数見計段々拜見ニテ退座、

但御用人兩人、御側役老人、御右筆頭老人席詰、

一小番・新番・御小姓与之儀、一同敷舞台末ニ并居、

御宸翰等写、御中段御敷居上へ御右筆相備、一同拾人

計ツ、相進拜見退座、

但御用人等席詰如例、

〔<sup>朱</sup>〕御宸翰写等御文書奉行へ致格護置候様、口達ヲ以申  
渡、御書附相渡候事〕

二九八 島津忠義大坂行在所ニ参内天氣ヲ伺フ

明治元年四月十四日、忠義大坂行在所ニ参内、天氣ヲ伺  
フ、

〔記〕

本日、忠義大坂ニ下り、行在所ニ参内 天氣ヲ伺フ、  
全十九日京都ニ帰ル、

〔参照一〕

大久保利通日記節録四月

十三日

太政官へ出席、退出ヨリ出殿、從明日御下坂ニ付、御

伺申上候即子藩邸ニ出  
テタルナリ

十九日

今朝内田氏政憲・折田牟秀入来、太政官へ出席、今日太守公從

大坂御帰、為御伺出殿、

〔参照二〕

時任某書牘明治元年四月二十一日

君公御機嫌克去ル十四日御発京、大坂へ御機嫌伺被為  
濟、一昨十九日御帰京御座候、大坂ニテモ暫時ハ御警  
衛被成下候様ニト、頻リニ市中一統ヨリ願上候由、人  
氣ノ帰シ候事ハ第一ニ出申候、下略

明治元年(1868)

二九九 藩兵奥羽出兵ヲ命セラル

慶應四年四月十四日、藩兵奥羽出兵ヲ命セラル、

薩州

長州

佐土原

(容保、会津藩主)  
松平肥後益暴激ニ募リ、

官軍ニ抗シ候段相聞、依之右

三藩へ出兵被命、奥羽ノ官軍へ応援致シ候様、被 仰

出候事、

四月十四日

(記)

會津官軍ニ抗シ、其勢益猖獗ナルノ報アリ、本藩始メ

長州・佐土原・加州・薩州・長府・富山等十二藩ニ、

奥羽・越後ニ兵ヲ出シ、応援ヲ為サシメ、又加賀ヲシ

テ北陸道ノ供億ヲ措弁セシメラル、

【参照】

大久保利通日記節録四月

十三日

一 今朝折田要蔵參、(友妻)吉井子・(藩卿)黒田子入来、奥羽ヨリ大野

(義範)五左衛門到着、報知之趣(奥羽被記中大山将之助 三月晦日付書翰參看)白川城へ桑・

幕・水(桑名・幕府)水戸人ヲ云フノ兵楯籠、頗ル暴威ヲ張候由、會津(会津ヲ云フ)

會津將軍ト号シ、号令ヲ下シ候由、佐竹・南部等モ兩

端ヲ持シ候由、仙臺ハ段々説得イタシ、少シク振起ノ

向ニ相成候由、人数ハ相応繰出シ居、総督モ御進軍ノ

御治定ニテ、八日方御発ノ筈候由、

奥羽人数差出之儀ヲ被決候、

三〇〇 島津忠義北陸道ノ出兵ヲ命セラル

明治元年四月十四日、忠義北陸道ノ出兵ヲ命セラル、

三〇〇ノ一

(忠義、薩州藩主)  
島津修理大夫

右四方へ人数差出候儀ニハ候得共、松平肥後益暴激ニ

募リ、官軍ニ抗シ候段相聞得候ニ付、北国路へ人数差

向ケ、奥羽之官兵へ応援イタシ候様、

御沙汰候事、

四月十四日

三〇〇ノ二

(記) 藩記ヲ載ス、

右辰四月十四日、太政官代軍防局ヨリ、御用永山左内

罷出、非蔵人松尾豊前ヨリ承知イタシ、御請書被差出

候様相達候、内田仲之助(ト有之)

(記)

奥羽ノ官兵へ応援被仰渡ニ付、

十番隊隊長 山口鐵之助(直秀)

二番遊撃隊隊長 西 千嘉

外城三番隊隊長 有馬誠之丞(善行)

同 四番隊隊長 中村源助(貞昌)

大砲半座隊長 久永龍助(清隆)

出軍被仰付、黒田了介へ応援出軍差引被仰付、

(記)

仙臺ヨリ(編長)大山格之助、大野五左衛門ヲ遣シテ、奥羽ノ

事情ヲ述ヘテ、援軍ヲ請ハシム、

本日本藩北陸道応援出兵ノ命アリ、長州藩亦同文ノ命

アリタリ、

(按) 出兵ノ命アリシ各藩ヲ列載ス、

島津修理大夫(敏親、長州藩主)

毛利大膳大夫

北国路ニ出兵シ、奥羽ノ官兵ニ応援ノ命アリ、

(前田慶繁、加州藩主)  
加賀宰相中将

薩・長人数ト共同、北国筋鎮撫ノ命アリ、

藝州

奥羽鎮撫使応援トシテ、銃隊三百人派遣ノ命アリ、

(利同、富山藩主)  
前田稠松

人数三百人北越へ、加州・薩州・長州・長府四藩共同

鎮撫差遣ノ命アリ、

(元敏、長府藩主)  
毛利宗五郎

人数二百人全上

(直正、新築田藩主)  
溝口誠之進

(信民、村上藩主)  
内藤紀伊守

(之美、椎谷藩主)  
堀 右京亮

(直安、与板藩主)  
井伊右京亮

(忠義、三根山藩主)  
牧野伊勢守

(直勝、糸魚川藩主)  
松平日向守

(光昭、黒川藩主)  
柳澤伊勢守

(徳忠、三日月藩主)  
柳澤彰太郎

薩・長諸藩ト共ニ、會津追討ノ命アリ、

(記) 前田・毛利北越出兵ノ命ヲ伝達セラル、

前田稠松

人数三百人

毛利宗五郎

人数式百人

右松平肥後益暴激ニ募リ、官軍ニ抗シ候段相聞候、依之北越へ被差向候旨、

御沙汰候事、

一別紙之通、両藩へ御沙汰相成候付、為心得相達候事、

軍防局ヨリ就御用罷出候処、非藏人松尾豊前ヲ以

御書付式通被相達候付、差上候事、

辰四月十八日

内田仲之助

三〇一 供奉ノ公卿・諸侯へ親征供奉ノ条目ヲ命

セラル

明治元年四月十五日、供奉ノ公卿・諸侯へ親征供奉ノ条目ヲ命セラル、

今般蒼生塗炭ノ苦ヲ被為救度 御仁恤之

聖慮ヲ以、

御親征被仰出、海軍

觀覽相濟候上ハ、関東之動靜ニ依リ、直チニ大旆ヲ東

海道へ被為向候

思食ニ被為 在候処、大総督ヨリ形情言上之次第モ有

之、先ツ浪華ニ

行在被為 遊候ニ付テハ、供奉之輩下々ニ至ル迄、別シテ厚ク

御旨趣ヲ奉体シ、聊モ私怨ヲ挾ミ、公事ヲ誤リ候類之

儀決テ無之様、深ク心ヲ用ヒ、戮力協心可遂成功候、

尚陪從之者心得違無之様、是又各其家々ニ於テ不洩様、

精々可相示事、

一 異変之節ハ各其持場ヲ固メ、未タ持場無之者ハ、嚴肅

ニシテ、御指揮可相待候、若猥リニ奔走シ混乱ヲ生

シ、或ハ持場ヲ去リ、他ノ功ヲ争ヒ候ハ可為不覺事、

一 平常道路往来ハ勿論、行軍タリ共、互ニ道ヲ相譲リ礼

節ヲ可尽候、若礼節ヲ失ヒ、或ハ不条理申掛ケ候者有

之候共、私ニ争論ニ不及、其筋へ可訴出、速ニ是非曲

直ヲ正シ、公平之御処置可有之事、

一 軍中ニ於テハ、上下貴賤、寢食勞逸ヲ同スヘキ事、

一 喧嘩口論堅ク禁止之事、

一 民屋・町家ニ立入、乱妨狼藉ハ勿論、押借押買等、堅

ク禁止之事、

一 遠乗或ハ歩行之節、田島ヲ踏荒シ、農業ヲ妨ケ、道筋

之竹木ヲ折取候等之儀有之間敷事、

一 浮説流言総テ人心之疑惑ヲ生候儀、堅ク禁止タリ、自然難差置事件聞及候節ハ、速ニ其筋々ヘ可申出候事、

一 猥ニ酒会ヲ催シ、種々醜態ヲ顕シ候儀、下々ニ至ル迄心得違無之様、其主人々々ヨリ堅ク可申付事、

一 宿駅馬借ニ限ラス、総テ旅宿等ニ於テ、猥リニ忿怒ヲ発シ、小民ヲ畏縮セシメ候儀有之間敷候事、

右  
御台所御門御守衛被 仰付置候処、被  
免候事、  
四月十五日

一 貴ハ愛恤ヲ不忘、賤ハ恭敬ヲ不失、上下之間礼讓ヲ專

三〇二ノ二  
(記) 藩記ヲ載ス、

トシテ、下ナル者ハ上ニ対シ非礼之進退無之、上ハ權威以下ヲ不侮、互ニ誠ヲ推候儀、緊要之事、  
右条々堅ク相守、若不心得之輩於有之ハ、屹度可相糺者也、

右一通辰四月十五日、軍防局ヨリ御呼出ニ付、遠武橋二罷出候処、吉田遠江ヲ以、別紙之通被仰渡候付、内田仲之助御届書有之、

戊辰四月

(記)

本日供奉ノ公卿・諸侯ヲ召シテ、命セラレタリ、

四月二十一日ニ至リ、京都詰ノ藩吏ヨリ藩地江通牒アリ、左ニ載ス、

(按) 忠義十四日ニ大坂ニ下リ、十九日ニ帰京シタリ、思フニ本日ノ令ハ、列侯ト同シク奉承アリシコトナラシ、

御台所御門御守衛被成御免候旨、去ル十五日軍防局ヨリ被仰渡候付、達  
貴聞御人数御引取相成候、御書附相添此段申越候条、  
中将様可被達  
御聴候、以上、

三〇二 本藩御台所御門守衛ヲ免セラル

辰四月廿一日

島津(久壽)主殿

明治元年四月十五日、本藩御台所御門守衛ヲ免セラル、

島津(久治)圖書殿



明治元年(1868)

御家老中

薩州

右

御台所御門御守衛被

仰付置候処、被

免候事、

四月十五日

三〇三 本藩大坂巡邏ヲ免セララル

明治元年四月十五日、本藩大坂巡邏ヲ免セララル、  
三〇三ノ一

薩州

右大坂巡邏被

仰付置候処、被

免候事、

四月十五日

三〇三ノ二  
(記)藩記ヲ載ス、

右一通四月十五日、軍防局ヨリ御呼出ニ付、遠武橋ニ

罷出候処、吉田遠江ヲ以被仰渡候段、内田仲之助御届  
書有之、

(按)大坂城取締ハ、本藩及ヒ長州ニ命セラレタリシニ、  
古河藩書ヲ上リ、之ニ代ハラシテ請フニ仍リ、遂  
ニ内旨ヲ伝テ兩藩ヲ免シ、古河藩ヲシテ代ラシメタル  
ナリ、左ニ其達書及申請書ヲ載ス、

三〇三ノ三  
口上覚

朝廷尊奉之儀ハ、主人大炊頭平生之志ニ付、家来共迄  
(土井利寺)

相心得罷在候処、先般

王政御復古万機御一新、被 仰出候付テハ、大炊頭上

京可仕為御請、老臣小杉監物正月十二日上京、同廿四

日帰府仕候、然ル処、

將軍宮様浪華へ御駐采、五畿御鎮庄万般御執掌之折柄

ニ付、大炊頭領分攝州平野郷陣屋ニ貯置候砲器玉菓類

御用ニ随ヒ奉差上、且同所ハ河・泉枢要之土地ニ付、

防禦之御備トシテ関門取立、万一不虞之儀有之候節ハ、

何方成共人数差出可申、其他相応之御用被

仰付度、

宮様御麾下へ出願仕候処、御採用不相成趣、被仰聞微

志空敷相成、一同恐懼之余、主人素意ニ基キ先鋒之心  
得ニテ、勤

王御用何成共、被 仰付度、参与御役所へ歎願之儀、

長藩へ依頼申入候処、微衷洞察被致願書取次、差出相

成候処、数日相立何等之御沙汰無御座、追テ浪華御城

薩・長両藩ニテ、取締居候之処、御用多端ニ付、御城

追手御門警衛致シ、薩藩卜隔日交代可致、長藩ヨリ頼

ニ付、人数差出相勤罷在候処、大炊頭追々病氣快方候

付、去十五日発途可仕候旨申付越、不日京着可仕、然

ル処今般

御親征浪華表へ

行幸被 仰出候、付テハ右追手御門警衛之儀、

朝廷ヨリ被 仰付被下置候様仕度奉懇願候、此段御採

用奉仰候、以上、

三月廿二日

土井大炊頭家来

來次傳四郎

達書

土井大炊頭へ

先般薩・長両藩ニテ、城門警衛致居候処被免、守衛之

儀、其藩へ被

仰付候旨

御沙汰候事、

四月

【参照】

慶明雜録

坂城モ長州ト此御方へ御取締被

仰付置候得共、御内意御申込之上御免相成、土井大炊

頭へ被仰付候、

三〇四 藩會計方掛ヲ達ス

明治元年四月十五日

會計方掛

但勸農方・出納方・琉球三島方・海陸軍方其外出納

關係ノ儀、一切承候様、

右ノ通被仰付、佐土原改革掛ノ儀ハ、是迄ノ通被

仰付候、

四月

川上龍衛

明治元年(1868)

三〇五 扈蹕ノ諸藩ニ令シ日ヲ刻シテ其兵ヲ練閱

セシム

明治元年四月十六日、扈蹕ノ諸藩ニ令シ、日ヲ刻シテ番  
次ニ其兵ヲ練閱セシム、

本日達書

供奉諸侯へ

方今練兵之儀ハ別テ急務之事ニ付、

行在中各藩兵隊別紙日割之通、元陸軍所卜唱候場所ニ

於テ調練可致旨、

御沙汰候事、

別紙

諸藩兵隊調練日割

〔慶順、熊本藩主〕  
細川侍従

兵隊

〔保甲、郡山藩主〕  
柳澤甲斐守

兵隊

〔徳政、因州藩主〕  
池田攝津守

兵隊

右二、六ノ日調練

〔氏恭、狭山藩主〕  
北條相摸守

兵隊

〔安尚、國部藩主〕  
小出伊勢守

兵隊

〔長典、芸州藩世子〕  
淺野新少将

兵隊

〔信正、龜山藩主〕  
松平圖書頭

兵隊

〔泰秋、大洲藩主〕  
加藤遠江守

兵隊

〔詮、平戸藩主〕  
松浦肥前守

兵隊

〔長和、西大路藩主〕  
市橋下総守

兵隊

右三、七ノ日調練

〔元徳、長州藩世子〕  
毛利少将

兵隊

〔憲政、備前藩主〕  
池田侍従

兵隊

〔茲監、津和野藩主〕  
龜井侍從

兵隊

〔信親、栢原藩主〕  
織田出雲守

兵隊

〔元興、清洲藩主〕  
毛利讚岐守

兵隊

右四、八ノ日調練

〔義真、尾州藩主〕  
徳川元千代

兵隊

〔忠寛、佐土原藩主〕  
島津淡路守

兵隊

〔高濱、津藩主〕  
藤堂大學頭

兵隊

〔明美、水口藩主〕  
加藤能登守

兵隊

〔後滋、三日月藩主〕  
森對馬守

兵隊

右五、九ノ日調練

一朔日・十日・廿日・晦日ハ、供奉外之諸藩兵隊可致調

練候事、

一時刻之定限・調練之順序ハ無之、各藩可為勝手次第、  
尤多勢ニテ一同調練相成苦敷節ハ、到着之可為順候事、

三〇六 講筵ヲ行在所ニ開ク

明治元年四月十六日、講筵ヲ行在所ニ開ク、

十四日達書

為堂上稽古、於

行在所、從明後日原註十六、日巳刻、連日和漢原註古事、孫子講釈被為在

候間、聽聞推參可為勝手之旨、被 仰下候事、

追テ和漢隔日候也、

【参照一】

非藏人日記

自明十六日、連日和漢原註和、古事記、七書、孫子等隔日ニ講釈有之候、

四十未滿聽聞、四十以上推參可為勝手之旨、勘解由

小路弁殿被申渡原註、尤明日、漢ヨリ講釈之事、右四十未滿四十以上名前書

付、勘解由小路殿依命進入、

又云、連日和漢講釈、一之日ハ御休日之旨勘解由小路

弁殿被申渡、一同ハ触示了、

【参照二】

明治元年(1868)

有栖川宮家記

四月十八日、和漢御会隔番之旨申上候得共、明日講孫子、  
尔来古事記・左伝・孫子、右之順次ニ相成候旨、勘解由  
小路弁殿ヨリ申来、

三〇七 車駕座摩社ニ幸シ、更ニ東本願寺掛所ニ  
テ福羽文三郎ニ古事記ヲ講セシム

明治元年四月十七日、(大阪府東区西横堀)車駕座摩神社ニ詣ス、遂ニ東本願  
寺掛所ニ臨ミ、神祇事務局判事福羽美静(文三郎○祿和野藩士)ニ命シ  
テ古事記ヲ講セシム、

行在所日誌ニ云、四月十七日巳ノ刻

御出輦、座摩社へ

御参詣、夫ヨリ東本願寺掛所へ

行幸被為 在、読書講義ヲ被 仰出、福羽文三郎

玉座近ク相進ミ、古事記ヲ講ス、午後座摩社内ニ角力

場ヲ設ケ、御旗持ノ士共ニ角力ヲ被 仰付、申ノ半刻

還幸被為 在候事、

三〇八 政令伝達ノ条規ヲ定ム

明治元年四月十七日、政令伝達ノ条規ヲ定メラル、  
三〇八ノ一太政官ヨリ被 仰出候、総テ御布告書類御達之規則、  
左之通御定ニ相成候事、

一 触頭二十四藩中申合、三藩ツ、順廻ニテ、毎月当番  
相勤候事、

一 御達シ有之節ニ、右月番之三藩召出、御達書三通御  
渡ニ相成候事、

一 月番之三藩ヨリ触頭中へ相達候事、

一 触下へハ是迄之通、触頭ヨリ相達候事、

一 毎月月末、其翌月之当番藩名可届出候事、

四月

三〇八ノ二  
(記)

本令ニ仍リ、二十四藩受持ヲ定ムルコト左ノ如シ、

覚

四月 福岡藩

津藩

松代藩

閏四月

佐賀藩  
越前藩

五月

彦根藩  
仙臺藩

岡部藩

前橋藩

六月

加州藩

雲州藩

尾州藩

七月

備前藩

郡山藩

紀州藩

八月

忍藩

土州藩

九月

水戸藩

肥後藩

因州藩

藝州藩

十月

長州藩

薩州藩

以上

久保田藩

三〇九 東久世通禧外国事務受渡終了ヲ報ス

四月

通禧大惣督ニ贈ル書

玉体益御清適被為渡、随テ総督宮愈御安全珍重存候、然ハ去十五日八字大坂川口発船セシメ、十七日三字横濱港入津之義、此段不取敢御届仕候、肥前侍従昨十六日当表到着之由ニ御座候、打揃先奉行ヨリ引渡受取処置相濟候次第、江戸表出府仕、万端御面談之上、件々取極候覚悟ニ御座候、何レ両三日ハ出府モヒマトリ可申、先判着候次第不取敢申上候、仍御申入可被成下候、早々要用計リ如此御座候、以上、

四月十七日六字

追テ大坂行在所、海軍ハ点檢之後、於城内銃陣御覽、此間東本願寺へ

行幸、擊劍 御覽、去十四日、於陸軍所供奉諸藩調

練 御覽ハナシ、総裁兩卿見物、其他変リ候事無之、

正親町殿へ中山前羽林ヨリ(忠能)宜申上候様、被申居候、

早々頓首、

横濱裁判総督

(東久世) 通

禧

副総督

(鍋島直大)  
肥前侍従

判事徴士

寺島陶蔵

同

(宗則)  
井關齋(盛良、宇和島藩士)右衛門

御用掛

萩森殿助

同

上野敬助

肥前ヨリ四五人名前跡ヨリ可申上候、

東征総督記

三二〇 横濱裁判所総督東久世中将神奈川奉行及

ヒ横須賀製鉄所ヲ収ム

明治元年四月二十日、横濱裁判所総督東久世中将、神奈川奉行及ヒ横須賀製鉄所ヲ収ム、

(記)

戊辰中立願末ニ云、四月十七日前少将通禧・侍従直大、

判事寺島陶蔵・井關齋右衛門以下横濱着港、二十日神

奈川奉行水野若狭守ヨリ、同所官庁始附属之諸記録・

貯蓄之金穀共ニ進出、総督判事点検公収訖、以後若狭

守案内巡検、且旧吏ノ内其俣召仕ハル、者ハ残り、其

余ハ若狭守一同、江戸へ帰府ス、同日兩総督ヨリ各国

公使へ書翰ヲ以テ、従前岡士へ神奈川奉行ヨリ照会ノ事件ハ、自今判事ヨリ交議ニ及フヘキ旨ヲ報知ス、

神奈川県史料ニ云、本港ハ貿易開場ノ地ニシテ、旧幕

府ノ時、神奈川奉行ヲ置キ、因テ調所ヲ横濱及ヒ戸部

ノ両地ニ設ケ、内外ノ事務ヲ管理セシメタリ、之ヲ横

濱役所・戸部役所ト為ス、其他東西運上原註、即チ今ノ税関所

ノ役所アリ、皆該奉行ノ所轄ニ係レリ、大政維新乃チ

裁判所ヲ此地ニ置カレ、東久世中将総督ニ任セラレ、

肥前侍従之レニ副タリ、来リテ旧奉行水野若狭・依田

伊勢等カ管セル諸役所ヲ収メ、併セテ横須賀製鉄所ヲ

管轄ス、蓋シ外国人ノ関渉アルヲ以テナリ、維時明治

元年戊辰四月二十日ナリ、遂ニ本港ニ駐劄シ、判事寺

島陶蔵等ヲシテ、諸般ノ事務ヲ総判セシメラル、自余ノ

諸官吏一ニ其旧ニ仍リ、職務ヲ分掌セリ、此ノ時横濱・

戸部ノ両役所ヲ改称シテ裁判所ト云ヒ、之カ総称ヲ定

メテ神奈川裁判所ト云ヘリ、各国公使へ報知ノ文左ノ

如シ、

以書翰申進候、然ハ是迄横濱役所並戸部役所ト相唱來

候処、右両所共今般神奈川裁判所ト唱替致シ候間、御

心得迄ニ此段申進度如此候、謹言、

辰四月廿二日

井關齋右衛門

寺島陶藏

英・佛・米・蘭・亨

以・白・丁・瑞・葡

岡士賣下へ

當時諸役所ノ大綱ハ、既ニ横濱裁判所原註即チ今ノ県庁ニ於テ之

ヲ総統セリト雖モ、而カモ猶ホ幕府ノ旧ヲ襲ヒ、内外ノ

区別ヲ存ス、則チ外国ニ関スル事款ハ、専ラ横濱ニ於テ

之ヲ管理シ、戸部ニ在テハ則チ、単ニ地方人民ニ属スル

ノ条件ヲ処分スルコト、セリ、

【参照一】

大久保利通日記

明治元閏四月

廿日

一今日申刻、参与一同参 朝、

主上小御所へ出 御、議定・参与

天顔拜被 仰付、於玉座下御酒肴頂戴被

仰付候、晒一疋ツ、一同頂戴、 行幸御留主中方端御

都合宜敷、 御満足ニ 思召、御酒肴被成下、一同打

クツロキイタ、キ候様、正三卿ヨリ 御沙汰御伝へ相

成候、左候テ一人ツ、玉座ノ前ニ被 召、經之、大納言中御門卿御

酌ニテ、

天盃御流頂戴被 仰付候、誠以難有不堪感泣候、多年

苦心中之事比較候得ハ、一夢場ノ心地未曾有之事也、

初夜御暇退散、

【参照二】

土方久元日記

四月小二十日 晴

朝拜如例 今朝卯刻御登輦

主上住吉御社へ行幸被為在候、三條様ニモ四半時ヨリ

住吉社へ御出被遊候筈ニ付、今朝ハ五半比ヨリ 行在

所ニ罷出候テ致拜謁、九時ヨリ長堀御屋敷ニ行、夫ヨ

リ三橋楼ニ行、高松家老某及深尾両執政、真鍋榮三郎王州藩士・

小崎左司馬等ト致酒宴入夜引取、直ニ致参殿候テ、拜

謁之所、井上聞多藩・江藤新平東西ヨリ罷上候ニ付、拜

謁之上、長崎及関東之事情等承之、夜半過歸り来候事、

三一 岩下方平等楠公社ヲ兵庫ニ造立スルコト

ヲ建言ス



コノ日、岩下<sup>(マ)</sup>方平外五名ヨリ、兵庫裁判所総督東久世通禧ニ楠公社ヲ兵庫ニ造立シ、神号勅許ヲ奏請セラレシコトヲ建言セリ、是ヨリ先元治元年二月九日、内田清風藩命ヲ以テ、<sup>(大谷)</sup>護良親王・楠正成・源親房ノ靈社ヲ攝津国八部郡ニ造立センコトヲ願ヒ出テ、許可ヲ得タレトモ、造立ヲ果サズリシガ、近來尾州ヨリモ慶京都ニ楠公社ヲ<sup>(マ)</sup>建言書左ノ如シ、

(記)

楠社造立之儀、先年来有志輩頻ニ御願仕事に有之、既に尾州よりも右之願相成居候得共、忠精無双楠氏之社を諸藩江造立被仰付候儀、遺憾之至奉存、幸閣下御支配地之事候間、湊川石碑之一社造立、神号 勅許被仰立度奉存候、就テハ右造立之入用金ハ、乍恐私共見込も御座候間、御下金ハ少も不相願候、実ニ數百年前之精忠今日に相伸可申と奉存候間、不願恐奉懇願候、

三月

岩下佐次右衛門

中路權右衛門

伊藤 俊介

寺嶋 陶藏

岩下清之丞

東 條 慶 二

四月五日東久世氏より岩下氏に左の通牒あり、

一 先立テ建白候楠公神号並ニ造宮之事、願之通被

聞召候、就テハ神社絵図面取調、神祇官へ早々可指

出様被仰付候、

一 神号之儀ハ、<sup>(オホクスタマ)</sup>大楠靈社内評有之候清丸社之例を以て、

勅使御指立に可相成候、右今日拜承之事、

四月三日

東久世中将

岩下佐次右衛門殿

三二 勅シテ楠正成ノ祠宇ヲ湊川ニ營シ正行以

下ヲ配祀セシム

明治元年四月廿一日、勅シテ贈正三位左近衛權中将楠正成ノ祠宇ヲ湊川<sup>(攝津八郡)</sup>ニ營シ、其子正行以下ヲ配祀セシメラル、

三二ノ一

四月廿一日神祇局并兵庫裁判所へ

御沙汰之写

大政更始之折柄、表忠之盛典被為行、天下之忠臣孝子ヲ勸奨被遊候ニ付テハ、楠贈正三位中将正成精忠節義、

其功烈万世ニ輝キ、真ニ千歳之一人臣子之龜鑑ニ候故、  
今般神号ヲ追諡シ、社壇造宮被遊度 思食ニ候、依之  
金千兩御寄附被為在候事、

但正行以下一族之者等、鞠躬尽力其功勞不少段、追

賞被遊合祀可有之旨被 仰出候事、

別紙之通、楠社造宮被

仰出候、付テハ天下有志之者御手伝致度儀、申出候得

ハ御差許ニ相成候間、於其地程能可取計様被

仰出候事、

四月

太政官日誌  
弁事務局叢書

三三二ノ二  
(記)

四月廿七日ニ至リ、造立寄金ノ者ハ各裁判所等ニ申出  
テシメルコトヲ令セラレタリ、

今般楠社御造立被

仰出候、付テハ有志之徒御手伝御寄附等仕度者、一々

兵庫裁判所へ可申出候、若隔遠ノ国々ハ其地裁判所又

ハ地頭等へ可申出候、万一無頼ノ者共、此儀ヲ口裏ト

致シ、諸所へ勸化等申出候哉モ難測候間、取合申間敷、

此段諸国一同不洩様被

仰出候事、

三三二ノ三  
又同日、徳川大納言(慶勝)ニ建議採納ノコトヲ令セラレ、

楠社御造立之儀、旧冬建言尤ニ被

思召候、就テハ旨趣

御採用被遊、今度於兵庫表同社造立被

仰出候間、此段申達候事、

徳川義宣家譜

三三二ノ四

(按)五年五月ニ至リ経営工竣リ湊川神社ト称シ、別格  
官幣社ニ列ス、又徳川氏建言ハ丁卯十一月十九日ニア  
リ、

六月十九日布告

先般楠社御建立ニ付、御手伝致度者ハ御差許可有之段、  
被

仰出置候処、追々願出候者モ有之哉ニ相聞候、付テハ

於遠国筋区々ノ取集方等有之候テハ、不相濟候間、神

祇官或ハ兵庫県之兩処へ申出、御手伝之品柄目錄相納

置、追テ右兩処印鑑有之書付ヲ証トシテ、差出可申旨

御沙汰候事、

但先達テ被

明治元年(1868)

仰出候通其最寄之府藩県へ差出シ、其ヨリシテ神祇

官或ハ兵庫県へ取次候儀モ不苦候事、

六月

三二ノ五  
包紙

〔袋風、久保田藩主〕  
平田大角様

〔込〕  
岩下佐二右衛門

参人々御中

任幸便一書奉呈候、薄暑相催候得共、愈以御安康被成御座、大慶奉存候、然ハ過日は御下坂相成居候由承候付、御旅宿可相伺と存候折柄、混雑罷在且急に兵庫へ参候付、終に不能拜顔残念之次第御座候、亦々上京之折ハ、拜顔可仕と存罷在申候、当所にては楠公社御造宮被仰渡、難有次第奉存候、右に就ては鳩居堂心配も致呉候、樹下・矢野氏等尽力不一方由にて、急に相運候事と被存候間、以御序可然御伝置被下度奉希上候、此度絵図面福羽氏〔美勝〕へ相廻候間、可然御評議被下度奉願候、此内より書面にて可差上と存候得共、何欵と取紛罷在延引仕候、猶心事期拜顔候、頓首拜、

四月廿九日

岩下佐二右衛門

平田大角様

侍史中

三二三 朝政御一新ニ付キ、諸藩政令ヲ大變革ス

ヘキコトヲ命ス

三三ノ一  
明治元年四月廿一日

朝政御一新ニ付、於諸藩モ 御趣意ヲ奉体認、速ニ政

令ヲ大變革致、奉安

宸襟候様トノ儀共、別紙之通太政官代弁事務局ヨリ被仰

渡候付、達 貴聞此段申越候条、

中将様可被達 御聴候、左候テ於 此御方様ハ疾ニ右

等御変之儀、被 仰出置候儀付、向々へ仰渡等相成候

儀共ハ、猶又御評議可被成候、以上、

辰四月廿一日

〔久〕  
島津主殿

〔久〕  
島津圖書殿

御家老中

三三ノ一  
明治元年四月廿一日

一行在中參上之輩、御門外混雑無之様ト之儀、

一紀伊中納言外五人、京師取締被仰付候儀、

一山陰道鎮撫使警衛被免トノ儀、

一觸頭二十四藩中申合、三藩ツ、順廻ニテ、毎月当番等之儀、

一海江田彦之丞、岸良七之丞内国局御用御雇被仰付候儀、

一行幸中、節・朔不及参賀ト之儀、

一行幸ニ付、八幡近辺御警衛之儀、

一右同断ニ付、石清水御警衛被免候儀、

右八通之通

太政官代被 仰渡候付、達 貴聞向々へ申渡、別紙相

添此段申越候条、

中将様可被達

御聽候、以上、

辰四月廿一日

島津主殿

島津圖書殿

御家老中

明治元年四月廿一日

得能良介事、東征 大総督宮并東海道・東山道兩総督

へ、陣中御窺御使被仰付、去ル六日出立被差越候処、

一昨十九日帰京、慶喜於江戸帰順水戸へ退去、城地并

器械等請取方相濟、其外委細之成行、別紙之通申出候

付、右一条ハ勿論、奥羽表之形勢且当地之事情、彼是

御留守居付役遠武橋二へ巨細申含越候付、被承届

中将様被達 御聽候儀共、何分モ可被取計候、此段申

越候、以上、

但奥羽一条之書付等ハ、御軍賦役ヨリ差廻候様相達

置候間、申出ニテ有之候、

辰四月廿一日

島津主殿

島津圖書殿

御家老中

(記)別紙ハ東征記事中ニ掲ク、

三二四 大坂銅会所召建ヲ命ス

三四ノ一 大坂へ銅会所被召建候儀並諸国神社仏像等之儀、過日

被

〔朱〕  
本文諸国神社仏像等之儀、過日被仰出候ト云々書面之趣ハ、太  
政官日誌第九章並添書ヲ以申渡候趣、神社方一卷帳ニ有之

仰出候、付テ之儀共御別紙之通、從

太政官代被仰渡候付、此段申越候条、

中将様被達

御聽、其許仰渡之儀ハ何分モ御取計可相成候、以上、

辰四月廿一日

島津主殿

島津圖書殿

御家老中

島津忠義家記

四月

島津忠義家記

三二四之二  
此度

御一新之折柄、大坂銅会所御取立相成候ニ付テハ、兼テ旧幕府ヨリ相觸置候通、諸国出銅ハ勿論、古銅・地銅ニ至ル迄、右会所へ屹度可相廻候事、

但

大坂表へ運送ニ指支候廉モ有之候ハ、其旨銅会所へ可届出候事、

一 外国人ハ勿論、自国タリトモ銅直売不相成、若心得違之者於有之ハ、銅取上之上屹度御沙汰可有之候事、

一 荒銅、諸山元ニテ勝手ニ吹立、諸器物等ニ仕立候儀不相成候事、

一 諸国ヨリ大坂表へ荒銅積廻シ候節ハ、其船問屋ヨリ員数并送り状トモ、時々銅会所へ可届出候事、

一 荒銅・古銅御買上直段之儀ハ、外国並諸方へ御払ニ相成直段ニ応シ、時々相定候事、

三二五 推歩並頒曆等執行ノタメ水間喜藤太上京

ヲ命セラル

水間喜藤太

〔米〕  
「本文致承知、喜藤太儀上京被仰付、此節平運丸ヨリ被差越等之処、俄ニ病氣差起立延之願申出、実病無相違相聞候へハ、願之通延置候、左候テ当人病氣程次第、嫡子水間喜左衛門、被差越候トモ何分モ取計、追テ形行可申越候間、其内土御門様御方へ御届ニテモ被申出候儀ハ、其許都合次第宜取計ニテ可有之候、以上」

右ハ土御門様ヨリ御使者ヲ以、此度

御一新之折柄、京都之測量ヲ以、推歩並頒曆等於彼御方被執行候様、被為蒙

仰候付、喜藤太儀暫時御借用被成度候間、急速上京候様ト之趣、被仰進候付、基リ此節水間ヨリ曆草稿差出候付テノ儀ニテハ無之哉、尤右草稿丈ハ此涯御下リニ不相成候テハ、御国許御用差支候儀共、猶亦御留守居付役ヲ以申入相成候処、何分水間上京不致候テハ不相

濟、尤曆草稿之儀モ同人上京ノ上ナラテハ、

御沙汰難相成段、御答有之候付、無御抛趣ニテ可被成

御願哉之旨、奉伺候処其通被

仰出候付、別紙相添此段申越候条

中将様被達

御聴候儀ハ其通ニテ、喜藤太儀上京被 仰付、早々致

出立候様可被取扱候、以上、

辰四月廿一日

〔下〕島津圖書殿

御家老中

御裏ニ薩州様

手扣

暖和之節、弥御堅固珍重被存候、然ハ天文測量・頒曆等之儀、是迄於關東被執行来候処、方今

王政復古御改革

御一新之折柄、京師ノ測量ヲ以推歩並頒曆等被蒙

仰候付、就テハ其御藩中水間喜藤太殿儀、不外門弟之

儀ニ候得ハ、暫被致借用直々被申談、且ハ申合等之儀

有之候、尤天下へ布告御用道ノ儀ニ候得ハ、速ニ御承

知、急速上京有之候様被致度候、何分遠路之儀ニ候得

ハ、急々御取計御座候様被致度、此段以使者、分テ御

頼被申入候事、

土御門民部卿殿使者

四月

吉田式部

別紙土御門様ヨリ之御使者吉田式部持參、猶又申聞候

ニハ、別紙之通被蒙 仰候ニ付テハ、是非トモ御借用

被致度、万々一御差支之儀モ有之、御聞濟不被下御都

合トモ有之候節ハ、太政官代へ被相願、御同所ヨリ御

沙汰有之候様被致、是非トモ相逐候様被致度積付、此

段ハ御内々御漸申上置候、宜相頼度申聞候付、可申上

旨申述置候、別紙相添此段申上候、以上、

四月四日

内田仲之助

伊勢様

【参照】 大久保利通日記

明治元年閏四月

廿一日

島津忠義家記

一不参、(尾州藩士)松浦竹四郎上京ニテ面会、北地之事情承、実ニ

感伏也、

一今日昼後早々 御召申来参 朝候処、正三卿ヨリ更ニ

参与被 仰付候ニ付、金鶏之間へ相詰候様、御口達ヲ

以被 仰付候、後藤家二郎・横井平四郎(小橋)・副島二郎(種邑)・

三岡八郎(由利公定)・小松家・廣澤兵助(喜邑)・小拙也、段々評論有之

候、暮帰宿、

### 三二六 大坂裁判所へ沙汰書

(記)

四月廿二日辰ノ刻、議定・参与・微士并在坂之諸侯ヲ  
悉ク召サセラレ、

玉座近ク被 召出、御書付ヲ以テ、長崎近傍浦上村異  
教蔓延御処置之儀ヲ、親ク御下問被為在、明廿三日申  
刻迄、書取ヲ以テ御答可奉申上ノ事ニテ、一同退出セ  
リ、左ニ総督ノ奏状ヲ載ス (奏状番号三二七ノ一にあり)

同日大坂裁判所へ御沙汰書之写

大政御一新ニ付、人倫之大道ヲ明ニシ、天下之人心ヲ

興起被 遊度被 思食、孝子・節婦并極老之者等、

御賑恤被為 在候

御趣意ニ有之候処、大坂之儀ハ今度

行在所ニモ相成候ニ付、旁以孝子・節婦・七十以上之

老人并平生忠義之志深キ者等、早々取調可申出候様、

被

仰出候事、

四月

### 三二七 長崎裁判所総督澤宣嘉管内天主教徒ノ処

分ヲ稟請ス

明治元年四月二十二日、長崎裁判所総督澤三位宣嘉、管  
民天主教ヲ奉スルノ状ヲ奏シテ、其処分ヲ稟請ス、是日  
親王三職以下及ヒ 公卿・諸侯ヲ御前ニ召シ、処分ノ議  
案ヲ付シ、各意見ヲ上ラシメラル、  
三七ノ一

長崎裁判浦上村切支丹之儀ハ、元来島原變動之後、余  
燼之者共民間ニ残り居、己之子孫或ハ熟懇之者共へ申  
伝、陰密信向罷在候処、各地開港各州之人民渡来ニ付、  
条約ヲ以テ天主教堂建立、終ニ踏絵之御法度モ御廃止  
ニ相成候ヨリシテ、彼之教僧等旧染余醜之者共へ、色

々彼之法ヲ懇切ニ説聞シ、漸々押弘メ、愚夫愚婦之モ  
ノモ又煽惑シテ、兩三年前ヨリ尤盛ニ帰向シ、平常四  
五人モ不絶教堂へ入込、教文杯ヲ習ヒ、或ハ守ヲ受ケ、  
病死スル者モ寺院へハ敢テ不頼、勝手ニ埋葬シ、三四  
ヶ所モ小キ天主堂ヲ建、神仏ヲ蔑視シ、仏祭杯ハ毀廢  
シ、又妖僧教ヲ開カセンタメ、金杯モ与へ候等之事ヨ  
リ、殆三千人計ニモ相成、凶徒之勢日々盛ニ立至リ、  
既ニ昨年六月頃諸藩士ハ勿論、市中他郷等神仏ヲ尊信  
致候者共ト水火之不和ヲ生シ、断然御裁許無之候得ハ、  
於下征伐仕様之風説モ差起リ、歎願書差出迫リ候故、  
徳永石見守断然取締方仕、巨魁之者式百人余召捕、入  
牢吟味之上、嚴罪申付候見込ヲ以、江戸表へ申出候内、  
佛蘭西妖僧等公使へ申立、公使ヨリ大坂へ差迫リ、終  
ニ赦罪帰村、猶村預ニ申付置候故、此度天下一統赦罪  
之

御沙汰ニ付、右村預ケノ部三百人計召出、平話ヲ以テ  
申諭シ候得共、更ニ不聞入、甚敷ニ至リ候テハ、嚴刑  
ニ行レ候テモ不苦杯申立、畢竟昨年佛ヨリ助命イタシ  
候故、自然佛ヲ後口ニ取、御所置ハ出来ヌモノト相心  
得、罷在候様相見へ候、其後両度モ召出、人事弁論ヲ

尽シ、前証後害説諭ヲ加へ候得共、確呼トシテ不変、  
此佯等閑ニ致置、御処置無之時ハ、必右不平之者共勝  
手ニ誅戮イタシ候様相成、第一政府之權モ無之、且再ヒ  
島原一挙之処ニ相成、終ニ九州争乱ヲ生シ候様、差赴  
候ハ必然之勢ト奉存候、最早片時モ早ク、断然御処置  
有之度奉存候、併三千人不残死刑モ、余リ慘憺之至故、  
主張者嚴刑、其次ハ土地替ニテモ被

仰付、平人ト絶交、土役夫役ニテモ御召遣有之、浦上  
村ハ一旦赤土ニ立至リ候御見込迄ニ有之度奉存候、又  
外国へ關係仕候事柄ニ候得共、元来教堂ヲ建、彼ノ人  
民ヲ教導スルハ、条約面ニモ差免シ有之候得共、内地  
へ押弘ムル杯ノ事ハ決テ免許無御座候故、我国古来嚴  
禁之法アリテ、法律ヲ犯ス我人民ヲ刑典ニ処置スルニ、  
彼等ヨリ喙ヲ入、不平苦情申立候事ハ、公法ニ於テモ  
論スル処、更ニ無之様相考候間、宜敷御評決可被成下  
候、以上、

辰四月

長崎裁判所

弁事局記  
毛利元徳家記

三二七ノ二

小松帯刀氏建白書

小松清直氏藏  
明治四十年四月十二日鹿児島新聞



切支丹邪宗浦上村へ伝染いたし候儀は、畢竟開港場ニ  
 天主堂建立、無頼の僧侶移住いたし、名は自国民民の  
 為に設置、実は我人民をして感喜せしめ、遍く国内を  
 教化し、他日必米堅・印度支那・澳大利の如くならし  
 むるの旨趣明白に洞察仕候、就ては今般王政一新の折  
 柄、宗徒の事件差起、数万の人民をして、彼天草争乱  
 ニ陥らしむるは、実以て天下の大重事、朝敵未だ征服  
 せざるの際に当り、終に御処置振により、必ず中外奸  
 曲の人民より、種々の離間策等伝触致し、王政御一新  
 の実功難相建、以甚慨嘆の至に不堪奉存候、既ニ昨年  
 佛国より申立の趣も有之哉に候へども、遠慮なく御所  
 置可有之儀、当然と奉存候、邪教一度伝染する時は、  
 彼の巨礮大艦よりも其禍害甚しく、既に彼使役蔑如を  
 請け候儀、眼前に相見得申候、雖然仁慈を尽し、反覆  
 説得を加へ、其改悔せざるに於ては、断然教化を受け  
 たる者は、尽く召捕へ巨魁数人を厳刑に処せられ、其  
 余党の如きは各処に移住せしめ、其浦上村中に誠実果  
 断の士を御選挙相成、兼て村中を撫育し、以て後の憂  
 を掃除仰付けられ候は、可然奉存候、右の外更に存  
 慮も無御座候間、若し万分の一助と御採用相成候ハ、

難有奉恐慶候、此御下問不顧妄味言上仕候、以上、

四月

小松帯刀

三二七ノ三  
 明治元年四月廿二日

行在所日誌ニ云、四月廿二日辰ノ刻、議定・参与・徴  
 士並在坂之諸侯ヲ悉ク召サセラレ、玉座近く被  
 召出、御書附ヲ以テ、長崎近傍浦上村異教蔓延、御処  
 置之儀ヲ親ク御下問被為、在、明廿三日申刻迄、書  
 取ヲ以テ御答可奉申上トノ事ニテ、一同退出ス、

三二七ノ四  
 議案

長崎近傍浦上村之住民、先年来窃ニ耶蘇之教ヲ奉シ候  
 者有之哉ニ候処、方今追々繁茂致シ、一村挙テ右之教  
 ヲ奉戴シ、殆ト三千人ニモ及ヒ候様相成、不容易大事  
 之儀ニ付、長崎裁判所ヨリ精々申論シ候由之処、更ニ  
 悔悟伏罪無之趣ニ候、方今大政更始之折柄、右様追々  
 蔓延致シ候テハ、実ニ国家之大害ニ相成、暫モ難捨  
 置事件ニ候得ハ、右巨魁之者相集、尚懇々説諭ヲ加へ  
 候上、速ニ悔悟致シ候ハ、右宗旨之画像等一切取毀  
 チ、改テ神前ニ於テ誓約ヲ成サシメ、若万一悔悟不致

節ハ不得止、断然巨魁之者数人斬罪梟首致シ、其余之者ハ悉ク他国ニ移シ、夫々夫役ニ相用ヒ、一時ニ根底ヲ勤絶シ、数年ヲ経テ悔悟之美相顕レ候上、帰住相免シ候外有之間敷歟、実ニ不容易事件ニ付、聊無伏臆各見込之程、言上可有之被仰出候事、

四月

弁事局記  
毛利元徳家記

【参照一】

春嶽私記

四月廿三日肥前長崎近傍ニテ、耶蘇教蔓延之次第ニ付、長崎裁判所ヨリ見込書ヲ以、申達候儀有之ニ付、今日上京ノ諸侯不殘登官被命、於議事所総裁・議定・参与、何モ御出座ニテ、諸侯席々へ右之御書付御渡有之、考慮ノ上御請申上候様御申渡有之、

【参照二】

明治元年四月

答議

別紙ニ通令熟覽候処、耶蘇宗之儀、邪教ト申儀而已、古来ヨリ伝染罷在候儀ニ付、処存令言上候、抑耶蘇宗追々

皇国ニ滋蔓致候テハ、只々深令心痛候、就テハ佛蘭西妖僧ヨリ公使へ申立、公使ヨリ大坂へ差迫り候儀モ有之哉ニ相見へ候得ハ、尚又彼国ヨリ彼是申立之事件モ有之候テハ、不可然ト之儀ニテ、此度忽セ之御処置方ニテハ、却テ後來之御為ニ不宜候儀ト令推量候間、一時モ早ク巨魁之者ハ被処嚴刑、其余之者ハ右ニ准シ候罪状指加へ、至当之御処置被相附候様存候、尤御国体之立ト不立之大二件ニ關係ニテ、不容易主意ト恐懼苦慮之至ニ不堪候、且長崎近傍ニ余党モ可有之哉ニモ令懸念候ニ付、是又嚴密被遂吟味、断然無之様之御処置方、是又專要ト相心得候、衆多之良慮モ不憚存分申上候、誠惶敬白、

四月

職仁

有栖川宮家記

【参照三】

明治元年四月廿三日

長崎近傍浦上村之住民、先年来窃ニ耶蘇之教ヲ奉シ候者有之哉ニ候処、方今追々繁茂仕、不容易形勢ニ付、御処置之儀、

御下問之趣、謹テ奉拝承候、右事件ハ寸時モ難被捨置

義ト奉存候、速ニ御処置被為在候外ハ有御座間敷、別段存付之廉モ無御座候得共、外国へ關係仕候儀モ可有御座、兼テ耶蘇教之儀ハ

皇国従前之嚴禁ニ候得ハ、即今

大政御一新ニ付、右教法信仰之者一同、此度更ニ御処置被為在候段、其御筋ヲ以

御情実篤ト外国へ御書取之通、御処置被為在度、若奉命不仕節ハ、断然

御威武ヲ以テ御鎮定之外ハ有御座間敷カト奉存候、尤假令悔悟仕候共、巨魁之者ハ犯嚴禁候罪ヲ以、至当之刑ニ被処永々後世之戒鑑ニ被成置候方、可然儀哉ト奉存候得共、何様不容易事件ニ付、尚衆議被為尽、速ニ御評決被為在度儀ニ奉存候、此段申上候、以上、

四月廿三日

淺野長崎  
安藝新少将

淺野長勲家記

【参照四】

明治元年四月廿四日

耶蘇教鎮庄之儀 御趣意之外、更ニ良策不可有之候、彼異邦妖教ヲ以、我人民ヲ伏從シ候ハ、其害兵艦侵来ルニ千倍致シ候事ト存候、早々根柢御勤絶被為在候様致

度候、若右様之罪人從寬典ニ時ハ、不拘遠近如何様之奸邪暴行之風伝播可致モ難計候間、此度屹度御取締、向後邪暴之者無之様、御処置有之度存候也、

四月廿四日

華頂宮 尊秀  
博經

華頂宮家記

【参照五】

明治元年四月

浦上村洋教信向之者共ハ、断然之御処置被為在儀、至当ノ御事ト奉存候、併先年旧幕府ニ於テ、処置ニ及候節、佛国ヨリ彼是申立候儀有之哉ニ付、今般之儀モ佛国ヨリ嚴重申立、却テ教法弘リ候様相成候テハ、益以御大事ノ儀ニ付、別テ被尽衆議、至当ノ処ヲ以御裁決奉願候事、

輪島直正  
但閑叟儀ハ兼テ長崎ノ事情並外国之事モ功者故、昨

日大久保一蔵言上仕候、洋教ヲ奉シ候者、御処置被成候ト同時ニ、佛国へ右国禁ヲ犯シ候者故、可処刑

戮段可被仰遣トノ儀、一応御尋問被為在、猶伊豫守

伊達宗城  
並外国掛リヘモ御申談御座候様仕度、万一佛国陽ニ

ハ公法ニ服シ、陰ニ叛謀ヲ助ケ候様ノ儀有之候テハ、不容易御事ト杞憂奉存候間、此上篤ト御評議被為在、

応接振等モ断然御定置ニ相成候様、仕度候事、

四月

松平慶永

春嶽私記

【参照六】

明治元年四月廿三日

長崎近傍居民耶蘇教ヲ奉シ、追々蔓延致シ候者、御処置之儀、見込申上候様被付敬承仕候、不容易儀ニ付、打返申合候処、事々

御沙汰之趣御尤之御儀、別ニ存念申上候程之見込モ無御座候、此段御受申上候、以上、

四月廿三日

〔茂承、紀州藩主〕  
紀伊中納言  
〔黒田斉博、筑前藩主〕  
筑前少将

徳川茂承家記

【参照七】

明治元年四月

木戸孝允手記ニ云、四月十九日 行在所ニ出、條公ニ謁ス、耶蘇裁許之事ヲ断ス、宇和島侯・三岡・後藤・井上聞多座ニ在リ、廿五日期 行在所ニ至リ條公ニ謁ス、長崎裁判所判事肥前人大隈〔重信、佐賀藩主〕八太郎、三條・宇和島二侯之前ニ出、井上聞多等ト浦上辺耶蘇之徒御処置之

評議アリ、余衆論ヲ聞、説ヲ立テ曰ク、其巨魁ヲ於崎陽処嚴科、余党三千余人ヲ尾州已西十萬石已上之藩へ分配シテ、之ヲ預ケ、生殺之權ヲ藩主ニ任セ、厚ク教諭ヲ加ヘ、不得止シテ其主魁ヲ処置シ、七年間ハ老口半之扶助ヲ賜リ、彼之巢窟ヲ挙テ、御手ヲ被為尽テハ如何ト、衆同意也、此夜ヨリ條公之命ヲ以テ、大隈上京セリ、閏四月三日條公旅館ニ出、此日英公使等モ参館シ、越後開港・江戸開市等ノ延期、且長崎耶蘇等ノ事件長論、十字ヨリ四時ニ至ル、其所以ハ我論ヲ曲ケサルナリ、大隈尤耶蘇ノ論ヲ愉快ニ論弁セリ、

【参照八】

明治元年四月二十日

各国領事往復書

於長崎千八百六十八年第五月十二日〔四月廿日〕

九州鎮撫使兼総督閣下

一耶蘇教信仰之日本人民、其政府ニテ重罪之御罰相成候趣、拙者共所々ニテ承リ申候、日本政府其人民御処置相成候ニ付テハ、素ヨリ相構候儀ハ、聊無御座候得共、右様之御処置ニテハ、外国人トモ是迄之通、日本ヲ礼儀アル国ト見ルノ妨ヲ生シ可申候間、拙者共ノ人情且

ハ日本政府へ親睦之意ヲ以テ、御諫言申上ル義ハ、拙者共之職務ト存候、

一条約第八ヶ条ニ、日本人並外国人其宗旨ニ付異論ナカルヘシ、且又日本政府ニテ踏絵之仕来リハ廢セリト有之候得ハ、条約取結之節右等嚴敷議論有之義ト被存候、一当今日日本高官ニテハ、専ラ前途ニ進シコトヲ布告セラ

ル、折柄、新政府ニテ旧時ノ御処置ニ転退不致候様、拙者共希望罷在候、  
一此書翰ハ日本ト親睦篤カラシタメ、且人情ヲ以而已、相認候儀ニ御座候付、是亦閣下へ申上置候、

一右ハ虚説ニモ御座候ハ、其否ヲ御書答被下度相願候、且又可成急速御答被成下度候ニオイテハ、実以難有仕合ニ御座候、

閣下ノ從者

合衆国岡士 ウイルリー・ピーマンコム

貌利太泥亜岡士 マルキユス・フロウルス

葡萄牙岡士 ゼー・ロウレイロ

丁抹国岡士 ハー・シキフ

和蘭国岡士 エフ・ペー・トンブリンク

佛良西国岡士 トブリユ・エス・ガイマンズ

李漏生国岡士 リチャルド・リンダウ

【参照九】

明治元年閏四月

千八百六十八年第五月十二日附来翰令披見候、耶蘇教信仰之日本人民ヲ当政府ニテ、重罪ニ処シ候風聞、伝承被致候儀ニ付、被申越候条、人情一ト通尤ノ事ニハ存候得共、我日本ニハ古來設ケ置タル法律有之候処、頑愚ノ小民共最嚴禁タル異宗婦依ノ科ヲ犯シ候故、追々開論中ニ有之、此末終ニ悔悟改新不致時ハ、乍不愆国法ニ基キ、至当ノ刑典ニ処シ候外無之候、  
一条約第八ヶ条ニ、日本人並外国人其宗旨ニ付、異論ナカルヘシ、且日本政府ニテ踏絵ノ仕来リヲ廢セシトノ一件ハ、其国々ニテ尊信スル宗旨ニ付、外ヨリ互ニ異論不致事ニテ、日本人ハ日本ノ宗旨ヲ守リ、各国ニテハ各国ノ宗旨ニ從フ事、為勝手義ニ有之、将日本旧政府ニテ、踏絵ヲ廢セシハ、貴方ノ宗旨ニ付テ干係イタサ、ルノ意ニ有之、

一方今日本高官ニテハ、専ラ前途ニ進シ事ヲ布告スル折柄、新政府ニテ旧弊ニ立戻ラサル様、希望被致候トノ

長崎県記

一件、克モ被申越合喜悅候、如何ニモ新政府ニ於テ、旧弊ニ立戻ラサル様、勉勵イタシ、専ラ国紀ヲ整齊シ候折柄、右様国法ノ嚴禁ヲ犯セシモノ、如キハ、聊猶予イタシカタク事トハ存シナカラモ、猶惻隱ノ心ヨリ是迄、遅々相成候、

一結末一条虚説之否致承知度トノ儀ハ、件々前陳之通篤ト了解被致度存候、此段令回答候、謹言、

九州鎮撫使

兼總督之命ニ因テ

慶應四年辰閏四月

野村 (盛秀) 宗七

佐々木 (高行) 三四郎

町田 (久成) 民部

米岡士ウイल्ली・ピーマンコム

貌岡士マルキユス・フロールス

葡岡士ゼー・ロウレイロ

丁岡士ハー・シキフ

和岡士エフ・ペー・トムプリンク

佛岡士ドブリユ・エス・ガイイマンズ

李岡士リチャルド・リンドー

長崎県記

【参照一〇】

明治元年閏四月十四日

於長崎千八百六十八年第六月四日 閏四月十四日

一長崎ニアル各国コンシユルナル下名ノ余等、先月十二日差出シタル書翰ノ返答トシテ、閏四月十日 即第五月三十一日 附之尊翰ヲ落掌セシ旨ヲ、貴下ニ謹テ報告ス、

一余等ヨリ差出タル先月十二日附之書翰ノ旨趣ヲ、貴下ニテ了解アリシ事、余等ニオイテ大ニ歡喜ス、余等其書翰ノ下案ヲミニストル等へ伝達シタレハ、貴下ヨリノ返書ノ案モ亦、余等ヨリ送与スベシ、依テ余等ノミニストル等、此事ヲ伝求シ、京都ニアル高官トトモニ商議スル時アレハ、耶穌宗門ヲ信仰セシ日本人民ニ対シ、即座ニ法ヲ設ル事ノ猶予ヲ為シ給ハ、感謝ノ至リナラン、敬白、

呈

長崎ニ在ル九州鎮撫使兼總督閣下

英國コンシユル

マルキユス・フロールス

米國コンシユル

ウイल्ली・ピーマンコム

佛国コンシユル

トブリユ・エス・ガイマンス

李国コンシユル

リチャルド・リンド

丁抹国コンシユル  
白耳義国アクチングコンシユル

エツチ・シキフ

蘭国アクチングコンシユル兼  
瑞西国アクチングコンシユル

エフ・ピー・トンブリンク

葡国コンシユル

ゼー・ローレイロ

長崎県記

【参照一】  
藩達(名越氏留より)

切支丹邪宗門御取締之儀、此節從 朝廷被 仰出候趣も有之候付ては、尚又嚴重取締不行届候ては、屹と不相濟訳合付、追々申渡置候趣は勿論、去年九月委細申渡置候通、下々之者共ニ至リ、聊取違無之様、支配頭又ハ主人等より分て可被申渡候、就右是迄改様之仕向被相替、以來は人別出入之差引總書ニ不及、宗旨不審有無之書届書左之通、向々より直に宗門方江可差出候、

一御一門方始私領持之面々は、役人横目より

一寄合・同并ハ役人より

一無格は当人より

一小番・新番・御小姓与ハ、夫々方限触支配より

一諸向附士・与力等支配頭より

一三町は年寄より  
(上・下、西田町)

一近在は庄屋より

右之通被仰付候条堅固相守、毎年七月限宗門方江無

間違届書可差出旨、向々江不洩様、可致通達候、

但京・大坂・長崎居付之面々并琉球島々之儀も、

人別之不及差引嚴重改方之上、届向等之儀ハ、

是迄之通差出候様、可申渡候、

辰四月

(川上久徳)  
龍衛  
(新納久徳)  
刑部

三二八 奥羽鎮撫応援ノ為出軍命セラル

明治元年四月

十番隊

隊長

山口鐵之助

二番遊擊隊

隊長

西 千嘉

外城三番隊

隊長

有馬誠之丞

右同四番隊

隊長

中村源助

大砲半座

隊長

久永龍助

越中富山・長州府中ニモ、北越ニ被差向候旨、

御沙汰之段、御別紙之通被仰渡候、

辰四月

島津圖書殿

御家老中

島津主殿

(忌義、薩州藩主)  
嶋津修理大夫

(管保、会津藩主)

右四方へ人数被差出候儀ニハ候得共、松平肥後益暴激

ニ募リ、官軍ニ抗シ候段、相聞得候付、北国路へ人数

差向、奥羽ノ官軍ト応援イタシ候様、

御沙汰候事、

黒田了介

右ハ去ル十四日、軍防局ヨリ奥羽之官兵へ応援之儀、

御別紙之通被

仰渡候付、右之隊々並別紙之通出軍等被 仰付候、此

段申越候条、

中将様可被達

御聞候、以上、

但

右奥羽鎮撫為応援、出軍被仰付候付、差引被仰付候条、

可申渡候、

四月 主殿

四番遊擊隊

差引

小隊長之場



明治元年(1868)

右之通被仰付候条可申渡候、

内山伊右衛門

四月 主殿

折田平内  
武宮雄之助

右奥羽へ応援隊出軍被仰付候付、一同被差立候間、実  
地見聞致報知候様、被仰付候条可申渡候、

一外城三番隊差引

相良吉之助

四月 主殿

一外城四番隊差引

上床敬蔵

一斥候役諸藩応援兼務

伊集院徳四郎

汾陽五郎右衛門

大野五左衛門

一 小荷駄差引會計兼務

蓑田耕之丞

一 機械方

新納四郎右衛門

外足輕

式人

右之通被仰付、奥羽為応援出軍被仰付候条、可申渡候、

四月 主殿

〔表紙〕

忠義公史料 明治元年四月 四

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

三二九 米国人我國民ヲ備ヒ、布哇島へ送ル文票  
ヲ請フ許否ノ往復書数件

明治元年四月二十五日

是ヨリ先、横濱留在之米国人ウエン・リード我國民ヲ備

ヒ、之ヲ英船ニ搭シテ、將ニ布哇島ニ送ラントス、文票

ヲ裁判所ニ乞フ、布哇ハ条約未済国ナルヲ以テ許サス、

往復數回、議未タ諧ハス、是日英船遂ニ横濱ヲ去ル、

明治元年四月

於神奈川千八百六十八年第五月九日我四月十七日  
神奈川鎮台閣下

賄並医家之手当ヲ除キ、給料一ヶ月四弗ニテ、三ヶ年  
雇之職人三百五十人ニ印章ヲ、船ニテモ開帆之用意モ  
整アレハ、速ニ給与シ給ハン事ヲ、恭敬ヲ以テ乞願ス、  
余ハウエイン政府ニ代リ、右之者共ヲハウエインへ召  
連、無賃ニテ日本へ連帰ル事ヲ約ス、

シオット船ニ乗組ミ在ル日本人ニ、先鎮台ヨリ既ニ与  
ヘラレシ百八十枚之印章ヲ返却ス、依之其代リニ右等  
ノ者ノ為、新キ印章ヲ予ニ与ヘ給ハン事ヲ願フ、敬白、

日本ニ在ルハウエイン殿下ノコンシユル。  
(総領事)  
ゼネラル

ウエン・リード

外務省記

明治元年四月

千八百六十八年第五月(神奈川)金川

呈

東久世中将閣下

ハワイ政府ノタメ、余再ヒ下条ヲ報スルノ榮ヲ得タリ、

日本人三百五十人ノ往来切手ヲ、先政府ノ処置之如ク、速ニ余ニ与へ、且ツシオット船、此後遅滞ナク出帆セシメ給ハンヲ請フ、切手ヲ造ル遅滞ヨリ起ル入費大ニシテ、且ツ無益ナレハ也、望ノ如ク三ヶ年ノ後、右人民帰国スル為メノ約書ヲ望メル閣下ノ意ノ如ク、余之ヲ呈スヘシ、然レドモ彼等帰国ノ相違アラン事ヲ、閣下心配シ給ハ、日本ノ益ヲ注意スル為、ハワイヘ日本領事官ヲ送り給ハンヲ欲ス、

鐵造ストラン・ジョール船困難ニ逢ヒ、其所ニテ彼ヲ助クル者一人モ無リシ頃、其船通信同盟ノ国ノモノナルユヘ、洋銀数千元ヲ前払セシ程ノハワイナレハ、当国ノ人民ヲ親切懇篤ニ接待スル事ハ、決シテ疑ヲ容レズ、出立スヘキ日本人ヲ免許セシ旧政府ノ処置ヲ差押ユヘキ趣意ナラハ、速ニ回答ヲ与へ、余カハワイ政府ノエゼントトシテ費シタル高ヲ払ヒ戻シ、英船シオットノ雇ヲ廃シ、其払ヲ為シ給ハン事ヲ欲ス、右高ハ多分九千弗或ハ一万弗ニ及フヘシ、謹言、

日本在留

ハワイ国コンシユル・ゼネラール

ウエン・リード

外務省記

三九ノ三  
明治元年四月

英国シオット船ニテ、日本人百七十名ヲ乗セテ、明日出帆セントス、右免許ヲ賜ハンコトヲ乞フ、

千八百六十八年五月十二日ウエン・リード拜

外務省記

三九ノ四  
明治元年四月

千八百六十八年五月十五日金川

組頭 伊藤岩一郎

高木茂久左衛門ヘ呈ス

ハワイニテ、大君之代リニ

御門陛下ト未条約ヲ取結バサレハ、ハワイニテ日本人三百五十名ヲ、三ヶ年ニハ帰朝セシムヘキ証書ヲ、公使等ヨリ差出サシムヘキヲ望ミ給ヘル請求之回答トシテ、右一事相談ノ為メ、各国公使集会スヘキ趣、英国公使ヨリ余ニ報告アリシヲ敬報ス、謹言、

ハワイコンシユル・ゼネラール

ウエン・リード

外務省記

書中所謂請求云々原記ヲ佚ス、其或ハ面言ニ出テシモ亦知ルヘカラス、

三二九ノ五  
明治元年四月

組頭衆

英国サヨトノ船司、明日出帆スル趣ヲ余ニ報シタリ、大君政府ニテ、百八十人ハワイ島ニ赴クヘキ免許ヲ与ヘ、且其者等、他ノ百七十人ノ同船ニ来ルヲ待ツ事、既ニ九日ニ至レリ、故ニ右旅客之事ニ付、速ニ処置アラシム事必用ナルヲ報ス、

今日迄九日之間、船中ニアリシ百八十人ノ日本人ハ、旧政府ニテ免許ヲ請タルモノ也、日本政府ノ信実ナルヲ慥ニ信スレハ、ハワイ島政府ノ金ヲ払置タリ、余カ方ニテ真ニ費シタル金、凡四千ドル<sup>(Dollar)</sup>ラルノ高ヲ払ハレナハ、右日本人ヲ其政府ニ返スヘキ請求ヲ、懇篤正実ニ取纏ムヘシ、且右船雇入之事並サヨト船ノ出帆大延引ノ事ヲ、英国コンシユルノ公平ナル決断ニ任スベシ、

ウエン・リード

外務省記

三二九ノ六  
明治元年四月

千八百六十八年五月十六日

組頭衆

余英国サヨトノ事ニ付テハ權アラス、船司速ニ出帆スル趣ヲ余ニ告タリ、已ニ十日前ヨリ船中ニアル百八十人ニ、免許ヲ与フル旧政府ノ処置ヲ次キ給フヤ否ヲ、余ニ回答シ給ヘ、若シ免シ給ハサルナラハ、日本政府ニ任セタル入費ヲ払ヒ給フ哉、知ラセ給ハン事ヲ乞フ、

ウエン・リード

外務省記

三二九ノ七  
明治元年四月

昨廿三日夜並本日御差越之御書状致披見候、然ハ我国人三百五十人ヲ農業為手伝、ハワイ島へ被連行度、就テハ右之者共、ハワイ島へ可趣免許ヲ与ヘ候様、尤右之内百八拾人ハ旧政府ニテ、免許請候者之由、其余被申越候趣致承知候、然ル処右ハワイ義ハ、条約未済之國ニ付、何様被申立候トモ、我國民共ハワイ島へ差遣

明治元年(1868)

候儀ハ難相成、強テ被連行度義ニ候ハ、条約濟各国  
公使之内ニテ、証人ニ相立候ハ、差遣可申旨、判事寺  
島陶藏(宗則)ヨリ及御引合候処、足下勘弁之上、右之処置可  
致旨、一昨廿二日被申聞、猶各国公使へ御會議之上、  
可被申越趣、既ニ一昨日モ被御申越候義モ有之、且右  
之内百八十人ハ、一旦免許請候趣ニハ候へ共、右ハ旧  
政府限り之取計ニテ、此節右ヲ採用イタシ候義ニハ難  
至候間、何レニモ最前被申越候通、各国公使會議之次  
第、早々被申越候様致度存候、右御報旁可得御意如是  
御座候、以上、

四月廿四日

高木茂久左衛門

伊藤岩一郎

ウエン・リード様

外務省記

三一九ノ八  
明治元年四月

以書状致啓上候、然ハ足下我国人ヲハワイ島へ被連行  
度、免許ヲ与へ候様可致、尤右之内百八十人ハ、旧政  
府ニテ免許受候者之由、当月廿三日被申越、尚一昨廿  
四日夜、判事寺島陶藏へ被申越候趣モ有之候へ共、右

ハ条約未濟国之義ニ付、何様被申立候テモ、我國民共  
ヲ差遣候義ハ難相成、強テ被連行度義ニ候ハ、条約  
濟各国公使之内、証人ニ相立候ハ、差遣可申旨、陶  
藏ヨリ御引会オヨヒ候処、足下勘弁之上、右之所置可  
被致旨被申聞、且其後各国公使へ會議之上、尚可被申  
越旨ニ付、右會議之次第早々可被申越旨、申進置候儀  
ニ有之、然ル処其後否御申聞モ無之、俄ニ昨夕、右船  
ニ我国人乗組候俟、当港出帆イタシ候趣ニ承知イタシ、  
右ハ引会不相決、殊ニ免状ヲモ引上置候儀之処、足下  
自俟ニ被取計候義ハ、拙者共更ニ了解難致候間、足下  
御心得之処承知イタシ度、条約濟ト未濟之別難相立、  
不容易筋ニ付、其次第二寄、当方取計方モ有之候間、  
早々御挨拶有之候様存候、右可得御意如是御座候、以  
上、

四月廿六日

高木茂久左衛門

伊藤岩一郎

ウエン・リード様

外務省記

三一九ノ九  
明治元年四月

千八百六十八年第五月十九日金川

呈

伊藤岩一郎殿

高木茂久左衛門殿

昨日之貴簡ヲ落手シ、回答トシテ下条ヲ啓ス、ハワイノ為ノ雇人三百五拾人分之往来切手ハ、新政府ニナル已前十六日余ニ出来セリ、然レ共相当之船ヲ得サリシ故、ソヲ百八十人ニ変革シ、百七十人分往来切手ノ料ハ、政府ヨリ余ニ戻セリ、

東久世少将閣下、着港之砌ハ、既ニ三日前ヨリ日本人凡百五十人、シオット船中ニ乗組在テ、出帆之日ヲ待ち居レリ、

右船旅人等ノ為便利適當ナリシ故、其本数ノ切手ヲ、新政府ニテ造リ給ハン事ヲ余願ヘリ、其信実ナルニ余ニ念ナク、信任シタル旧政府ノ事業ヲ、妨クヘキ理アラサリシ事ト、我方ニテ評決シタレ共、両国ノ為メ、事ヲ鄭重充分ニ整フル事ヲ好ミ、日本政府ノ信義ニ安ンシ、ハワイノ政府ノ為メ、余カ実ニ費シタル金ヲ扨ヒ戻サレナハ、シオット船中ニ在ル日本人ヲ、必ス速ニ戻スヘキ事ヲ書状ニテ報シ、且ツ猶繰返シ告知シ置

タリ、新政府ニテ旧政府ノ業ヲ継キ、且懇篤信義ニ、ハワイヲ待セラルヘキヲ屢啓報希望セシニ、ソヲ採用シ給フ事ナク、他国ノ者ハワイノ為ニ、日本政府ヘ証ヲ為スヘキヲ望マレタリ、故ニ其国ノ廉正信義ニ疑ヲ生シタリ、

此手續採用セラレハ、ハワイヘ与ヘタル免許相違ニ於テハ、世上ニ対シ国辱ナリ、故ニハワイ国王殿下ヨリ、当地ヘ差出セシエゼントノ単ニ請求スルハ、日本政府ノ信義ヲ信スルヨリ、費シタル入費ヲ扨ヒ戻シ給ヒ、無故障新旧政府役々承諾之上、十日前ニシオット船中ニ乗組シ日本人ヲ戻シ帰スカ、或ハ右船ヲ本見込ノ如ク出帆セシメ給ハンカノ両様ナリ、右船多分ノ費用ヲ受シ事ト、或十分ノ約束出来スンハ、運上所并英コンシユル所ニ出港手續ヲナシタレハ、実ニ速ニ出帆スヘキヲ余屢報告シタレトモ、別ニ報告アラサリシナリ、其船出帆ノ旗ヲ揚ケタル後、帆ヲ張り、出帆ノ用意ヲナシ、足下等ノ報ヲ待ツ事二十七時ニシテ、曉天ニ出帆セリ、且外国人ヲ待スルニ、大君ヨリ一タヒ許サレシ事ヲ、外国公使等ニ請合レタル如ク、

皇帝陛下ノ榮名高德正理ナリシハ、当政府ニテ猶發明

セラルヘシ、ハワイニテ日本ノ鉄造ストラン・ウアル船ノ為ニ、洋銀千弗ヲ前払シ、其困難救助之為、何等ノ請合ヲモ望マサリシハ、日本国旗ノ栄名高德ナルヲ信スルニ拠ル也、右ハ隣国ヘ懇信ノ称誉スヘキ処置ヲ証スルニ至ルヘシ(右錯誤ナカランヲ予願フ)

十一日ノ間ニ、数名ノ日本人病氣ニテ、上陸セシ事ヲ予承知セリ、故ニ出帆之砌、船中ニアリシハ百二十人ニ出サルヘシ、巨細ノ数ハハワイ着船ノ上ニテ分明ナルヘシ、謹言、

日本在留ハワイ国コンシユル・ゼネラー

ウエン・リード

外務省記

三九〇  
明治元年四月

千八百六十八年第五月十六日

判事寺島陶蔵閣下

貴下懇諭之回答トシテ、大君政府之所置ハ、百事新政府ニテモ踐行セラル趣、外国公使余ニ保証セシヲ貴下ニ敬報ス、且余ハ右踐行之事ヲ信ス、日本人百八十名之切手ハ、已二十二日前ニ与ヘラレタリ、其者共シ

オット船中ニ滞留セシハ、政府變更之三日ヨリ又其後七日之間ナレハ、都合十日之間也、ハワイハ昨年八月中、大君政府ニテ御老中ヲ以テ諾セラレタリ、余カ公務之趣モ亦然リ、ハワイ船入港之運上ニテモ入港手数ヲナセリ、且他船モ同様之所置ヲ得ント、日々屈指シアルナリ、シオット船旧政府処置之施行ヲ待ツ事已二十日ナリシ、然レトモ失費多ケレハ、最早滞留スル事能ハス、同船運上所ニ入港手数済タレハ、英国コンシユル、本日船主ニ其船ノ書類ヲ渡シタリ、故ニ明朝ハ必ス出帆スベシ、右出帆等之事ニ付テハ、都テ余ハ其權アル事ナシ、若政府ニテ旧政府之踐行フ事ヲ、確乎ト拒ミ給フナレハ、日本政府懇親ナルヲ信シテハ、ハワイ政府ノタメ、余カ費シタル金子ヲ扨ヒ戻シ給ハラサルヲ得ス、或ハ大君ヨリノ免許ニヨリ、日本旅客ヲシオット船ニテ出帆セシメ給フヘシ、我政府ニテハ日本トハワイトノ親睦ヲ望ム事、大君之如ク、勉メテ皇帝陛下ニモ渴望スル也、然レトモ日本人ノハワイ島ニ赴ク免許踐行フ事ニ付、許多ノ時日ヲ費シタリ、且日本人ハ、其国界之外ニモ広ク朋友ノアル事ヲ、睨ト陛下ニ請合フヘキ国ニ出船スヘシ、此書之結末ニ至リ

述フヘキハ、独リ日本政府ニ関スル事之免許ヲ拒ム時ニ当リ、一ツ之外国之事ヲ免許スルニ、他之外国ニ尋ヌルハ、日本政府之所置、最モ不都合トイフヘシ、故ニ余ハ貴下懇篤之免許之事ニ付、例シナキ願フ外国公使等ニ尋ヌル事ヲ拒マサルヲ得ス、余ハ唯已ニ許容アリシ免許ト正理ヲ固守ス、謹言、

ハワイ島コンシユル・ゼネラール

ウエン・リード

外務省記

三九〇一  
明治元年四月

外務省記ニ云、ウエン・リード義ハ、元米国名籍ノ者ニテ、数年横濱ニ在留イタシ居候処、去ル寅年以来、布哇国之コンシユル・ゼネラールト自称シ、米国公使並同公使等附書記官一同、布哇国ト条約取結之義申立、旧幕府外国事務執政ト、米国公使之引合且書簡往復モ有之候処、竟ニ其請求ニ応シ候場合ニ至リ、条約取結之義、外国奉行江連加賀(発則)・石野筑前(則常)・目付新見相摸(正徳)ヘ委任イタシ候処、其後ウエン・リード義、布哇国之全權ミニストルニ被任候旨、吹聴申越候ニ付、条約取結

之義ハ重大之事件ニテ、是迄各国ト条約取結候モ、皆貴重之人ヲ掄撰セラレ候事ニ有之候処、ウエン・リード義、商人之身分ヨリ俄ニ重任ニ転シ候テハ、如何ニモ不都合之次第故、是マテ日本ニ在留、商業ヲ営マサル者ニシテ、条約取結之談判ニ可及旨、江連加賀等ヨリウエン・リードヘ、書簡相達候処、右返書ハ無之、条約取結之義ハ其俣ニ打過、到底旧幕府ニテ、委任之者ハ申付候得トモ、条約書為取替之義ハ勿論、其談判迎一度モ無之由ニ候、

一 前件之次第ニ付、漸条約取結之場合ニハ至リ候得トモ、未其事ニ不及内ハ、矢張条約未済之一国ト認候義ハ当然ニ有之、然ル処昨辰年中、御国賤民多人數横濱港ヨリ乗船、布哇島ヘ差遣シ、右顛末左之通、  
一 辰四月十七日附書面ヲ以テ、神奈川県判官事ヘウエン・リードヨリ申立候趣ハ、日本賤民三百五十人、布哇島ヘ差遣シ度候間、免許状ヲ与ヘラレ度、尤内百八十人分ハ旧幕府ニテ、印章受取置候得共、右ハ返却可致間、全数丈ケ新規之御印章受取度旨ニテ、旧印章ハ其節已ニ返却イタシ候事ニ有之、則神奈川県組頭ヨリ、布哇国之義ハ条約未済之事故、同所ヘ国民共差遣シ候義ハ



難相成、強テ差遣シ度候ハ、条約濟各国公使之内ニテ、証人ニ相立候ハ、望ニ可任、右ハ判事ヨリ御引合オヨヒ候処、勘弁之上所置有之由故、猶各公使へ會議ヲ掛ケ、否被申越度、百八拾人ハ一旦免許受候趣ニハ候へトモ、右ハ旧政府限之取計ニテ、此節採用ハ難致間、何レニモ會議之次第早々可申越旨、回答旁申入候処、再答差出、日本人乗組居候シオツト船、最早出帆之用意整シニヨリ、明朝ハ多分出帆可致、自分ニハ出帆可拒権ハ無之トノ趣、且末文ニ至リ、日本政府ニ關係スル事件ヲ他之外国公使等ニ尋ヌルハ、日本政府之所置最不都合ト云ベケレハ不及其事、唯既ニ許容アリシ免許之正理ヲ固守スルトノ趣申越、就テ猶又神奈川県組頭ヨリ、各国公使會議之次第可申聞旨、兼テ申越候趣モ有之間、右ハ早々承知致度段申入置候処、昨夕俄ニ国民共乗組候俣、シオツト船出帆イタシ、右ハ引合不相決、殊ニ免許状モイマタ不相渡処、自俣ニ被取計候段ハ心得方承知イタシ度、前頭之次第ニテハ、各条約濟国々トノ別相立不申而已ナラス、免許状ヲモ不請段、如何ニモ不筋之義ニ付、取計方モ有之候間、早々挨拶可有之旨申遣シ候処、右返翰之趣ハ布哇之為

メ、雇人三百五拾人分之往来切手ハ、新政府ニ成十六日以前ニ出来セリ、東久世中将閣下着港三日前ヨリ、日本人百五十人シオツト船中ニ乗組、出帆之日ヲ待タリ、旧政府之事業ヲ妨クヘキ理アラサリシ事ト、評決シタレトモ、兩國之為メ事ヲ丁寧ニ整ル事ヲ好ミ、日本政府之信義ニ安ンシ、布哇之政府之為メ、余カ実ニ費シタル金ヲ払ヒ戻サレナハ、シオツト船中ニアル日本人ヲ、必ス速ニ戻スヘキ事ヲ報シ、且猶繰返シ告知シ置タリ、將シオツト船出帆之旗ヲ揚タル後、帆ヲ張り、出帆ノ用意ヲ為シ、足下等之報ヲ待ツコト二十七日ニシテ、曉天ニ出帆セリ、十一日之間ニ数名之日本人病氣ニテ、上陸セシ事ヲ承知セリ、故ニ出帆之碇船中ニアリシハ、百貳拾人ニ出サルヘシ、巨細之人員ハ布哇着之上ニテ、分明ナルヘキトノ趣ニテ、ウエン・リードトノ引合ハ右ニテ相止ム、

三九ノ二  
明治元年四月

米国公使往復五条

以書状致啓上候、然ハハワイ国岡士ゼネラル之由、ウエン・リード義、我国人三百五拾人ヲ農業為手伝ハ

ワイ島へ連行度、就テハ右之モノ共ハ、ハワイ島へ可  
赴免許ヲ与へ可申、尤右之内百八拾人ハ旧政府ニテ、  
免許請候者之由等、追々申越候趣モ有之候処、右ハワ  
イ之義ハ、条約未済之國ニ付、何様申立候共、我國民  
共ハワイ島へ差遣候儀ハ難相成、強テ被連行度儀ニ候  
ハ、条約済各國公使之内ニテ、証人ニ相立候ハ、  
差遣可申旨、寺島陶藏ヨリ及引合候処、勘弁之上、右  
之処置可致旨申聞、猶右一条ニ付、各國公使集会可被  
致趣、書翰ヲ以申越候次第モ有之候処、其後右會議之  
否不申聞、且前書百八十人ハ、一旦免許請候趣ニ候得  
共、右ハ旧政府限り之取計ニテ、此節右ヲ採用イタシ  
候義ニハ難至段、兼テ組頭共ヨリ申遣置候儀ニ有之、  
然ル処当月廿五日、前書我國人共乗組罷在候船、俄ニ当  
港出帆イタシ候間、右ハ前書之通引会未相決、殊ニ免  
状モ不相渡モノヲ、右様自俣ニテ、出帆取計候儀ハ、  
不筋之イタシ方、且条約済ト条約未済之別難相立、不  
容易筋ニ付、一体之心得方承知致度段、猶組頭共ヨリ  
ウエン・リードへ申遣候処、右等之答ハ不致、前書ハ  
ワイ島へ可赴免許ヲ可相与、左モ無之候ハ、右ニ付  
追々費シタル入用ヲ可相払ト之儀而已申越、右ニテハ

是迄我士官ヨリ追々引会オヨヒ置候廉、条理難相立義  
ニテ、此上引会方モ無之ト存候、就テハウエン・リー  
ド義ハ、貴國名籍入之者之由ニ付、前書之次第承諾被  
致、ウエン・リード心得方得ト御聞糺、御申越有之候  
様致度存候、右之趣可得御意如是御座候、以上、  
辰閏四月四日  
(編島直大)  
肥前侍 從  
(通稱)  
東久世中將

米公使

(Dr. J. Van Valkenburg)  
アル・ビー・フアルケンボルグ閣下

三九〇一三  
明治元年四月

千八百六十八年第五月廿六日

日本横濱亞米利加合衆國公使館

呈

外国事務總裁

肥前侍 從

東久世中將

閣下

ハワイ島ニテ農業之タメ、日本人ヲ積送ル一件ニ付、  
昨日之貴簡ヲ落手セシヲ報スルノ榮ヲ得タリ、

亞米利加合衆國之法律ニ拠レハ、作業ノ為メ雇ハルヘキ支那人ヲ、米國ニテ積送ル事ハ法外ナレハ、右犯法ニ付テハ、其船ヲ過代トシテ取揚、右奸商ヲナス者ハ、償金又ハ入牢ヲ以テ罰セラルヘシ、

日本農業者ヲハワイ島へ輸送スル為メ、シオット船ヲ借り雇ヒシ事、又右船ハ貌利太尼亞船ナルヲ知リタレハ、不取敢余此一件ヲ英ミニストルニ報シタリ、

貴翰之趣ニテハ、右船運上所へ常例之出港手数ヲナス事ナク、且船中ニ乗組アル日本人ハ、定例之切手ナク出帆シ、此事ヲ取扱フ人ハ米國臣民ニシテ、当港ニ居住スルウエン・リード氏ナル趣ナリ、但右ウエン・リード氏ハ、ハワイ國王ノコンシユル・ゼネラールトシテ、此事ヲ取扱シナリ、

余ハ英國船且其船司、或ハ他國臣民之所置ニ關係スル事能ハサレハ、ウエン・リード右役目ニテナス所置ニハ、關係スルヲ得サルヘシ、

貴下後來ヲ戒メントシ給ヘル此一件ニ付テハ、余最歎息ス、然レトモ、此難事ヲ取纏メン為メ、貴下如何ナル所置ヲナシ給フ哉、貴下先ツ取極メ給ヘハ、右事件ニ付十分之解明ヲナシ、余貴下ニ力ヲ添フ事、余最幸

甚ナルヘキ旨而已ヲ報ス、余貴答之書ヲ翻訳セシメ、速ニ今日達シタル規則書ノ写ヲ茲ニ封呈ス、謹言、

亞米利加合衆國公使レシデント

アル・ビー・フアルケンボルグ

三九〇一四  
規則

千八百六拾年第六月廿二日、裁判役等之會議ノ約書ノ第四章ニ從ヒ、日本在留合衆國ノミニストル、ロベルト・ビー・ハン・フアルケンボルグ、此書ヲ以テ下条之規則ヲ令ス、ソハ日本ニ在ル合衆國之裁判所之法則トナスヘキ也、支那之事ニ付設ケタル規則、且千八百六十二年第一月十九日ニ取極タル人足之商業ヲ禁スル為之會議約書之事ヲ、日本ニモ適用スヘシ、

三九〇一五  
明治元年四月

其第五月廿六日付、貴答書翰致扱見候、然ハウエン・リード儀、我國人共ヲ暴ニ布哇島へ連行之儀ニ付、此程申進候処云々、貴答之趣致承知候、右布哇國之儀ハ兼テ申進候通、条約未済之國ニテ、ウエン・リード儀、旧幕之官吏へ私交ヲ結フ事モ有之哉ニ聞へ候得共、ソ

ハ自己之事ニテ、公ニ及シカタキ儀ニ有之、然ル処今  
般国内之賤民多人數ヲ免シモナク、暴ニ外国ヘ発帆セ  
シ始末ハ不筋之イタシ方ニ付、此上右発帆セシ多人數  
之モノ呼戻シ、入用ヲ為償候上、ウエン・リードハ国  
地退去為致度存候、右ハ前書御返簡之趣モ有之候間、  
及御相談候、猶御心附之儀モ候ハ、被御申越候様イ  
タシ度存候、右之趣得御意度候、以上、

辰閏四月廿六日

肥前侍 從

東久世中將

アル・ビー・ウワン・ウワルケンボルグ閣下

三九〇六  
明治元年四月

以手紙致啓上候、然ハハワイ島へ我国人ヲ農業為手伝、  
英国シオット船へ為乗組、ハワイ島へ米国ウエン・リ  
ード取計ニテ差遣シ、右ハ我国人差遣シ候儀ハ、素ヨ  
リ難差許筋ニ付、ウエン・リードへ其砌屢及引会候得  
共、シオット船発帆相成候ニ付、同人儀如何之取計オ  
ヨヒ候廉、罰方並我国人呼戻方取計申度、就テハ罰方  
並呼戻方手續如何致可然候哉、御心附モ有之候ハ、  
御申聞被下候様致シ度、右之趣可得御意如是御座候、

以上、

辰七月二十六日

東久世中將

各国公使閣下

三九〇七  
明治元年四月

当月十二日即我七月二十六日附之御書簡致披見候、然ハ米國ト日

本國ト之法ハ、大ニ相違有之候テ、米國人ハ吟味之上、

其罪分明相成不申候テハ、右罰方難致候、依テ米國人

民ウエン・リード氏、日本人ヲ当港ヨリ三乙島Orsted Islandへ送候

ワイ諸島の旧名の所置ヲ以、閣下吟味相成度候ハ、右ハ米國コ

ンシユル所ニテ、ケ様之儀取扱候儀相当ト奉存候、日

本人ヲ運送致候シオット船ハ、英船ニ有之候間、米國

士官ニハ此一件ニ付更ニ関係無之候、就テハ御愁訴相

成、御吟味方御頼相成候ニハ、英国之裁判ヲ御頼ミノ

方相当ト奉存候、右御答迄如此御座候、謹言、

千八百六十八年 亞米利加ミニストル

第九月十六日

フアン・フワルケンボルグ

外務省記

三九〇八  
明治元年四月

外務省記ニ、此返簡独乙・和蘭両公使ヨリモ差出候得共、何レモ關係無之ト而已ニテ、見合ニ不相成候間、不写取トアリ、

按スルニ、二年九月ニ至リ、監督正上野景範ヲ布哇ニ遣シ、売奴ヲ勾還ス、事ハ外務省記ニ詳ナリ、

三三〇 浪華元陸軍所ニテ訓練ヲ觀覽ス

三三〇ノ一  
浪華流行歌

ときかきたれハおさつかくさるそこておはきにかひかさす

四月十四日、浪華元陸軍所ニテ訓練アリ、諸侯二十頭ノ兵丁ヲ悉出シテ 觀覽アラセラル、

一番

- (淺野長敷、芸州藩世子) 安藝新少将
- (信親、栢原藩主) 織田出雲守
- (長和、西大路藩主) 市橋下総守
- 二番
- (池田章政、備前藩主) 備前侍従
- (兵森、狭山藩主) 北條相摸守

(後滋、三日月藩主) 森 對馬守

三番

- (義貞、尾州藩主) 徳川元千代
- (詮、平戸藩主) 松浦肥前守
- (徳澄、因州新田藩主) 池田攝津守

四番

- (毛利元徳、長州藩世子) 長門少将
- (泰秋、大洲藩主) 加藤遠江守
- (英尚、國部藩主) 小出伊勢守

五番

- (慶順、熊本藩主) 細川侍従
- (亀井茲監、津和野藩主) 津和野侍従
- (保甲、郡山藩主) 柳澤甲斐守

六番

- (忠寛、佐土原藩主) 島津淡路守
- (元純、清未藩主) 毛利讚岐守

七番

- (高深、津藩世子) 藤堂大學頭
- (信正、丹波龜山藩主) 松平圖書頭
- (明実、水口藩主) 加藤能登守

以上交代兵ヲ練リ、武ヲ講シ退散ス、

三〇ノ一  
明治元年四月十四日

行在所日誌ニ云、四月十四日卯ノ半刻ヨリ各藩ノ兵隊、  
元陸軍所近辺ニ屯集セリ、操練ノ順序左之通、

第一

安藝新少将

兵隊

織田出雲守

兵隊

市橋下総守

兵隊

第二

備前侍従

兵隊

北條相摸守

兵隊

森 對馬守

兵隊

第三

徳川元千代

兵隊

松浦肥前守

兵隊

池田攝津守

兵隊

第四

長門少将

兵隊

加藤遠江守

兵隊

小出伊勢守

兵隊

第五

細川侍従

兵隊

津和野侍従

兵隊

柳澤甲斐守

兵隊

第六

島津淡路守

兵隊

毛利讚岐守

兵隊

第七

藤堂大學頭

兵隊

松平圖書頭

兵隊

加藤能登守

兵隊

明治元年四月十九日

新潟・府中但馬二裁判所ヲ置キ、北陸道先鋒兼鎮撫副總督

四條隆平ヲ以テ、新潟裁判所總督兼鎮撫副總督ト為シ、

山陰道鎮撫總督西園寺公望ヲ、府中裁判所總督ト為ス、

又北陸道先鋒總督高倉永祐ヲ、北陸道鎮撫總督兼會津征

討總督ト為ス、  
三二ノ一

四條大夫

新潟裁判所總督兼北陸道鎮撫副總督被

仰出候事、

慶應四辰四月

總裁朱印

三二ノ二

四月

高倉三位

北陸道鎮撫總督兼會津征討總督被

仰出候事、

慶應四辰四月

總裁朱印

三二一 新潟・府中但馬二裁判所ヲ置キ、各總督ヲ  
任命ス

三二ノ三

録附軍防局書翰略

一 高倉三位殿北越鎮撫使被仰付候ニ付、參謀トシテ薩州

黒田了介・長州山縣〔有朋〕狂介被差添候事、

一 薩兵四百人・長兵四百人被差向候事、

一 山縣狂介在江戸ニ候ハ、高倉・四條兩卿之御供ニテ、

北越高田〔信弘、熊本藩士〕へ可差出旨、御沙汰書並御伝言之事、

一 津田山三郎・小林柔吉〔落驒、広島藩士〕兩卿參謀被免、佐渡鎮撫使滋野

井殿參謀被仰付候間、高・四兩卿之御供ニテ、高田ヨ

リ佐渡へ渡海之事、

一 長藩小笠原彌右衛門、是迄四條大夫殿へ附属罷在候処、

此度四條侍從殿御頼ニテ、新潟判事被仰付候間、四條

大夫殿並ニ彌右衛門へ其段申通之事、

### 三三三 徳川慶喜ノ処分及継嗣・秩禄ノ議ヲ公卿・

諸侯等ニ下ス

明治元年四月二十五日、勅して徳川慶喜ノ処分及ひ継嗣・

秩禄ノ議を親王・三職・公卿・諸侯・貢士に下さる、

三三三ノ 大久保利通日記

四月

廿四日

一 今朝出殿、徳川家名相統之者領地等之儀就御下問、御

談有之候、太政官へ出席、今夜海江田・岸良・兩皆吉・

牧野入来、尤九平太・牧野ハ明日発足也、

三三三ノ二

得能良介覚書（戦記重出）

四月十九日

得能良介東海道総督江 御機嫌伺之御使者相勤、四

月十九日帰京覚

東海道副先鋒総督

一 柳原卿、当月朔日新宿ヨリ御進入、有馬様御屋敷御一

泊ニテ、本門寺江御移陣、

同先鋒総督

一 橋本卿街道ヨリ、朔日本門寺江御着陣ニテ、柳原卿モ

御合陣、

一 二日本門寺南郷於御前、西郷・海江田・木梨子〔長藩被〕

召出御軍議、

一 四日別紙一印御行列之通ニテ御入城、田安出迎ニテ、

御先立大広間上段へ御着座、下段江田安伺公、若年寄

大久保始五六人相詰、向側へ西郷・海江田・木梨子等

相詰、先鋒総督様ヨリ別紙二印五ヶ条之御書付御渡、



田安ヨリ即座之御請仕、尚慶喜江モ達可仕旨申上ル、

右畢テ御帰陣西郷等モ退城

一六日慶喜江御達之次第申聞候処、有罪之身寛大之御所

置難有奉存候、尚麾下江モ御趣意相達可申旨、及落涙

御請仕候段、田安ヨリ御請書ヲ以申上ル、

(徳川家茂夫人、和宮)

一静寛院様田安邸江御退入、

一天璋院様御機嫌無御差障、一橋邸江御同断、

一同十一日、城并軍艦兵器請取之日限被 仰出、

一慶喜、十一日未明水戸江退去、

但慶喜ヨリ、尚此末御条目御達之事件、相違候事有

之候テハ、重罪之事情間、無相違相運マテ滞在指

揮仕候テハ、如何可有之哉之義、内々伺出ニ依リ、

日限通退去謹慎可然候旨、御達候也、

一十一日、江府城請取方トシテ、東海道諸隊官軍一斉シ

テ入城、持場相堅メ、城地并兵器請取之事、

若年寄 川勝備後守

大目付

堀 錠之助

作事奉行

堀 下野守(利志)

田安家老

平岡莊七

目附

渡邊祐三郎

田付筑後守

右面々玄喚迄出迎、

西郷吉之助

海江田武次

木梨精一郎

大村藩一人

佐土原藩一人

長 藩一人

備前藩一人

御 藩一人

尾張藩三五人

右ヨリ城内鑰等都テ請取、城内ハ番兵入替ル、

肥後藩三五人

右ヨリ兵器都テ請取ル、

右面々城内点檢イタシ相違無之故、無異議城地並兵器

(前)行旧邦秘録材料にて補正

相受取候段、川勝江相達シ、諸事相仕廻候テ、兵隊堅  
ヲ引候、右相濟都テ引弘城地尾張江御預、兵器細川江  
御預之事、

一軍艦

觀光丸 六門

蟠龍丸 四門

咸臨丸 十二門

朝陽丸 十二門

富士丸 十二門

回天丸 十一門

開陽丸 廿六門

右乗組凡二千人計、

右十一日海軍總督大原（童表）様御手ニテ、御受取之筈候処、

当日風浪甚敷、士官共上陸難為仕候付、明朝御請取被

下度、海軍奉行ヨリ願出ル、夫形御聞濟之由ニテ候処、

翌朝一艘モ品川沖江不相見得、脱走之姿故イツレモ当

行列次第

濱松藩四人

割羽織小袴

近習式人

中間  
馬上烏帽子直垂

副總督

加州藩式人

傘

中間

騎馬戎服

雜掌 忝人 同上 小頭式人

木梨精一郎

中間忝人  
騎馬烏帽子直垂  
海江田武次 附屬三人

惑、然ルニ別紙三印（武備）榎本和泉守ヨリ願書、於橫濱備前

蒸氣船江差出、房総之間江出帆之由ニテ、即大久保・

勝等本門寺江御呼出ニテ、御責糺之上田安江別紙四印

之通御達相成申候、

一十三日東海道先鋒總督・副督様城内御点檢之上、有馬

様御屋敷江御移陣、

一十四日總督官様本門寺江御着陣、翌十五日（東京都港区）増上寺江御

移陣、

一北陸道先鋒總督高倉卿・同副總督四條様、淺草六郷之

屋敷江御在陣、

一東山道先鋒總督并副督岩倉（眞定、具經）様御兄弟板橋御本亭江御宿

陣、

一東山道御屋敷兵隊、板橋江宿陣、

一東海道同断兵隊ハ、増上寺江同断、

三三ノ三

一印

中間 近習式人 同

濱松藩四人

加州藩式人

草履

藤堂藩四人

肥後藩式人

中間

近習式人 内卷人 御手鑑 持之

尾州藩式人

附屬式人

中間 同上 安場 一平

附屬三人

備前藩式人

中間

近習式人 藤堂藩四人

馬上風折烏帽子直垂 持之 總督

雜掌式人

割羽織 小袴 近習毛 同服也

傘

中間 △当日御先等之御用ニ 騎馬 付臨期列中ニ不加

△西郷吉之助

附屬七人

小頭式人

草履

騎馬筒袖羽織小袴

吉村長兵衛

附屬三人

三三ノ四 二印

第一条

慶喜去十二月以來奉欺

天朝、剩へ兵力ヲ以、犯

皇都連日錦旗ニ発砲シ、重罪タルニ依リ、為追討官軍

被差向候処、段々真実恭順謹慎之意ヲ表シ、謝罪申出

第二条

城明渡シ、尾張藩へ可相渡之事、

慎可罷在之事、

家名被立下、慶喜死罪一等被宥之間、水戸表へ退キ謹

思食被為在、左之条件実行相立候上ハ被処寛典、徳川

水戸贈大納言積年勤 王之志業不浅、旁以格別之

候付テハ、祖宗以來二百余年治國之功業不少、殊ニ

(徳川齊昭)

第三條

軍艦銃砲引渡可申、追テ相当可被差返事、

第四條

城内住居之家臣共、城外江引退キ謹慎可罷在之事、

第五條

慶喜叛謀相助候者、重罪タルニ依リ、可被処嚴刑之処、  
格別之寬典ヲ以、死一等可被宥之間、相当之所置致シ  
可言上之事、

但万石以上ハ以

朝裁、御所置被為在之事、

右 御沙汰書一通、入城之上大広間ニテ、田安中納言

へ御渡之節、於大広間橋本・柳原兩卿ヨリ田安中納言

へ被相渡、演說書左之通、

徳川慶喜奉欺罔

天朝之末、終ニ不可言之所業ニ至候段、深被為惱

宸襟、依之

御親征海陸諸道進軍之処、悔悟謹慎無ニ念之趣被

聞食、被為垂

皇愍之余別紙之通、被

仰下候条、謹テ御請可有之候、就テハ、本月十一日ヲ

期限トシ、各件処置可致様、

御沙汰候事、

右限日既ニ寛假之

御沙汰ニ候上ハ、更ニ嘆願哀訴等、断然不被聞食、

恩威而立確呼不拔之

勅慮ニ候、速ニ拜膺不可有異議者也、

右相達候処、

御達之趣、謹テ奉拝承候、猶慶喜江申聞御請可奉申上

旨、田安中納言拜答候事、

右ハ昨四日

勅使入城申渡之始末為心得為知置候、猶暴挙之輩有之

哉モ不被計之間、諸陣相警養銳不懈嚴謹屯衛可有之事、

四月五日

先鋒

副將 回

先鋒

總督 回

薩州藩

外々略ス、

明治元年(1868)

三三三 家老新納久脩諸役改唱ヲ達ス

(群書輯録二十九)

御家老座之事、

一 議政所

右此節、改テ右之通相称候様被仰付候、

奥掛筆者之事、

一 議政所筆者頭取、

御家老座筆者之事、

一 議政所筆者、

右之通唱被相替候、

御用部屋之事、

一 御側役所、

右之通、旧名ニ被復候、

御用部屋筆者之事、

一 御側役所筆者、

右之通唱被相替候、

右之通被仰付候条、向々江不洩様可致通達候、

辰四月

(新納久脩)  
刑部

三三四 京都本宮報告

四月

京都本宮報知云

一 当四月十九日、同廿三日野州岩井宿並同所宇都宮ニオ

(茨城県猿島郡)

ヒテ、戰爭有之候処、官軍大勝利ニテ、就中此御方人

数粉骨碎身相働候趣、去ル五日西郷吉之助、関東表ヨ

リ帰京相達、且亦別冊之通、戰爭等之次第相達候ニ付、

差廻申候、イツレモ無比類手柄之程、感激之至御座候、

然ハ旧幕旗本之士、大久保一翁(忠寛)・勝安房(義邦)ヲ初、田安ヲ

押立、恭順謹慎之道ヲ尽シ、社稷ヲ保候計ヲ廻シ候得

共、脱走之激党諸方江致屯集、官軍ニ抗候勢ヒモ有之、

追々鎮撫方差出、精々取鎮候趣、乍然段々流説モ多ク、

詐術ヲ以表ニ恭順ヲ唱へ、内ニハ戦ヲ主トイタシ候モ

難測儀ニ御座候得共、夫程之氣力ハ有之間敷様ニ被相

聞申候、前文通宇都宮於諸所ニ、戰爭之賊兵モ其内ト相

見得申候、勿論慶喜之処ハ、此内御達通水戸表江在退

謹慎罷在候由、且又旧幕之軍艦御引揚ニ付テハ、力ヲ

以不被取、術ヲ以不被計、重ク責ヲ掛候テ及談判、至

極六ヶ敷勢ヒニテ、不漸四艘ハ先達テ御取揚、其内富

士山老艘ハ此御方様へ御預、忝番遊擊隊右江乗付候由御座候、

一會津之儀、国境堅固ニ致手配、其上越後・新潟辺江、

人数千人計モ繰居候由、勿論以前ヨリノ国論、国中江變動有之節ハ、若松城江敵兵引受候テハ、兵粮等ニ故

陣付候付、イツレ之筋新潟辺ニ張出シ可申候評議之由

相聞得候付、此節モ右等之処ヨリ、右通致手配候半、

右ニ付新潟辺出張會賊モ少々相交リ、全体梁田表ニヲ

ヒテ、四番隊ヨリ被打散候殘兵共、信州辺江押出候間

得有之候処、同所松代城主真田侯其外隣国之小名、彼

表江押寄候會賊等變ニイタシ候趣、

朝廷江御届相成、実ニ見事之合戦有之候由御座候、実

以頼母敷次第、追テ此儀ハ巨細御注進可申入候、

一板倉伊賀父子此内ヨリ、日光山江引籠候処、官軍之鋒

先ニ致恐怖候哉、近比軍門江出、降伏イタシ、宇都宮

侯江御預相成居候処、賊兵城ヲ乗落シ候節、混雜之間、

父子共焼死候欵之様子ニ被相聞申候、板倉藩士五拾人

位ハ、近隣之小藩江御預相成居候処、是モ賊兵ヨリ落

城ノ節取返候趣御座候、

一前文通會津国境防禦之次第、堅固ニ手配相見得、右旁

之処ヨリ、先達テ奥羽鎮撫使江被召付、被遣候御兵具

方附士隊隊長大野五左衛門罷歸リ、兵隊又々繰出方之

儀承候ニ付、拾番隊・忝番遊擊隊・諸郷三番隊・同四

番隊・忝番大砲隊半座、都合此四小隊ト半座並長州寄

兵隊一大隊、去月廿四日・廿五日兩日ニ被差立候、北

陸道筋出軍相成候、右ニ付銃薬並玉付ハトロン等之儀、

先便蒸氣船ヨリモ御差統相成候得共、右通諸所出軍御

差出相成候処、別テ御手薄キ折柄、幸兵庫表舶来ハト

ロン売物有之、右ヲ三四拾万發丈御取入相成候得共、

先達テヨリ追々関東表へ差統相成候処、殘打右之通関

東並奥州之勢ヒ致勘考候処、此涯無難ニ平均可罷成哉、

差当リ見留モ無之、然ハ如何様兵隊ニテ、迫モ玉薬相

少ク候テハ、別テ此節柄一大事之境御座候付、別紙ヲ

以銃薬等御差統之儀申遣候間、態ト蒸氣船ニテモ御取

仕立、早々御差統相成候処、御取計給度、遮テ御掛合

ニヲヨヒ候、

右之通、今八日飛脚被差立候付、早々御掛合旁申遣候

間被申上、何分ニモ玉薬等之儀ハ、急速相運候様、御

頼申遣越候、以上、

三三五 岩井・宇都宮戦死傷者報告

明治元年四月廿九日

一辰四月廿日岩井駅

足輕

戦死 二人

手負 一人

本宮ヨリ

手負 二人

下人 一人

大砲隊夫

一人

大砲隊

戦死 一人

薄手 三人

手負 一人

深手 三人

戦死 一人

右五番隊

同日ニ

長州藩

戦死 一人

大垣藩

手負 一人

辰四月廿三日於野州宇都宮戦死手負

戦死 十二人

深手 三人

手負 十八人

一先月廿日・同廿三日東山道岩井駅・野州宇都宮ニテ、  
賊兵攻撃官軍勝利ノ次第、去ル八日 朝廷へ被為及御  
届候段申来候、此段可致通達候、

四月廿九日

(前田久憲  
内膳)

三三六 黒田了介北陸道鎮撫総督参謀仰付ラル

三六ノ一(清徳)

黒田了介儀、北陸道鎮撫総督参謀被仰付、且今般出軍

途中、越後柏崎辺、松平越中領地取扱向之儀、此

御方様並長州兩藩申合、不都合無之様可取計ト之儀、

別紙之通軍防局等ヨリ被仰渡候付、達

貴聞了介並御軍賦役等へ申渡候、此段申越候条、

中將様可被達

御聽候、以上、

辰四月廿九日

島津圖書殿(久治)

御家老中

島津主殿(久壽)

三三六ノ二

薩州

黒田了介

北陸道鎮撫総督參謀被

仰付候条

御沙汰候事、

三三七 木戸孝允ヨリ大久保一蔵へ書翰

卷封

大久保老台

(木戸孝允)  
木圭

内拝呈

拜啓弥御清適ニ引つゝき御尽誠、大賀此上なく奉存候、  
野生も頓ニ帰京可仕と奉存候処、差向きニて御用出来、  
彼是仕居候内、英公使水師提督等罷越、意外之關係等

出来、彼よりおとゞめられ、(三條実美公)條公御旅館へ罷出候ニ付、

參り呉候様にとの事ニて、(伊達宗城公)宇候よりも御沙汰御座候間、

參館仕候処、先達て於横濱日誌東久世卿より頂戴仕、

一見仕候内、彼邪ノ字ニ至り、彼も甚不平之由ニて、

尤東久世卿ニハ一言も不相論、政府へ得と可相論之所

存ニて、罷登り候よし、い細條卿へ及御応接、大略御

答被為在、必竟彼之主意ニてハ、揭示不相成て可然様に

との御旨趣も有之候様被相窺、乍去口実と仕候処ハ、

我西洋各国尽邪蘇を尊信し罷在候事ハ、於日本政府も

御承知之処、今日外国之交際ハ大事件と御沙汰ニも被

仰出候辺ハ、奉窺候得共、総てかゝる御主意ニてハ、

外国御交際ハ水泡ニ属し申候、対日本政府

天照皇之御教ハ邪道と申ときハ、於政府決て落着ハ有

之間敷など、頻ニ条理を立相論じ申候、然し逐々御

相談も仕候通之主意を以、節角於政府も心付居、最初

之意ハ邪蘇と邪宗門ハ別之考ニ候処、一行ニ相認候と

きハ、邪蘇が則邪宗門と申様相響、不可然との事ニて、

兵庫・大坂辺総て未揭示不致都合ニ付、近々被相改候

辺之儀相答申候処、此後御揭示ニ相成候御文面、拜見

仕度との事ニ御座候間、則別紙之通ニ相認示し申候処、



漸無議論処ニ相決申候、付てハ早々御布告相成候様有  
之度奉存候、小河之一字余り小字なる故、失念仕とんだ  
めニ逢申候、御一笑可被下候、尚又先達て御相談申上  
候件々、先日條公よりも御下問有之、取調らべ見候様  
ニとの御事ニ付、其主意大略如別紙相認差出置申候、  
いづれ御添削之上、可然奉願候、〔豊臣秀吉〕豊公祠宇之御布告は  
過日岩卿より被仰聞候、〔信長〕豊公之勲勞御頭表被仰付候ニ  
付てハ、〔元年四月二十一日淡川社創立〕織田右府も贈官ニても被仰付、祠宇再興有之  
度、〔元年四月二十一日淡川社創立〕尚楠公之処格別被仰出候ニ付てハ、北畠氏・兒嶋  
氏其外當時有限忠臣ハ、御詮議被仰付度奉存候、且又  
此度日誌を以拜見仕候得ハ、箱館行之御總督判事も弥  
被仰出候処、彼地ハ実ニ懸隔之処柄ニも有之、殊ニ蝦  
夷開拓之儀ハ、一大任ニ御座候、付てハ御委任之廉無  
之てハ、随て実事も挙り申間敷欵と奉存候、其上魯国  
之処ハおもに此裁判所之關係不少候ニ付、清水谷卿ハ  
副を被差除、真總督ニ被仰付、井上氏ハ真之判事ニ被  
仰付候方、いかにも可然様奉存候、出立前にも井上氏  
之議論段々承知仕、実ニ感服仕候廉不少候、其人ハ真  
ニ御用ヒ無御座てハ、事業も暢ひ申間敷と奉存候、肝  
肘建武先生も近頃耳病有之候欵に伝承仕候得共、於彼

地何欵一事之御委任有之候ハ、屹度成業可有之と奉  
存候、実ニ数百年幕之大醜弊一洗し、天下百之廢棄を  
興し候にハ、実ニ人物甚以不足と被相察申候、箱館之  
処ハ、今一層御委任被為在、井上などハ必真判事ニ被  
仰付候方、御為可然と奉存候、尚愚存之件ハ彼氏ニも  
無腹臆可申陳と存居申候、先ハ不快彼是帰京も余り遅  
延仕候ニ付、禿筆心事を得尽し不申候得共、不得止乍  
乱筆前件申上度、奉捧呈候、よろしく奉願候、其中時  
下別て御自玉第一ニ奉存候、勿々頓首、九拜、

四月二十九日

尚々逐々伝承仕候得ハ、大分會賊も横行仕候由、先  
々是にて寂寥を相助ケ申候、今日天下之有様を想察  
仕候に、一乱暴仕候もの無御座候てハ、却て  
朝廷今日之御為ニ相成不申候、此始末肝心と奉存候、  
大村関東へ被差越候と欵、於軍防吉井君方一同、今  
一際元を立置不申ても、よろしく御座候哉、御詮議  
之御模様ハ不奉存候得共、益御根本之処御大事と奉  
存候、于時軍艦之説種々承り懸念仕候処、幕之米江  
相頼置候製鉄艦、しも月彼国揚碇にて、先頃横濱へ  
着、鍋島之手にて受取候由、先此艦か有之候ハ、

海軍も一戦争ハ思々出来可申と先安堵仕居申候、敬白、

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

三三八 鍋島直大・東久世通禧ヨリ伊達宗城へ

書翰

明治元年四月

一 輪謹呈仕候、愈御清適珍重ニ候、然ハケ条左ノ通、  
一 土佐償金ハ五万弗ツ、

五月・九月・十二月右三ケ度ニ、於坂地可相渡旨、昨  
二拾六日、佛公使申達候処、承知仕候、

一 先達テ和蘭公使ヨリ申立候西国条約、何卒御書付御下  
ケ被下度、〔ケランタ総領事 Dirk de Graaf, a Raabood〕プロックク十月ニハ帰国致候間、夫迄ニハ相

運候様御願度旨、昨日申居候、何卒京師表へ早速御通  
達被下度ト申候間、右申上度於横濱相渡候哉、

一 横須賀製鉄処明二十九日檢分ハ、以書面可申上、旧幕  
吏引払度様子故、横濱ヨリ役人差遣候覚悟ニ御座候、

一 四月三日英女王誕生日ニ付、祝砲廿一発、九月二十二  
日御宸誕ニ付、同様ト申達置候、

一 英公使上坂江戸開市之儀、性急ニ申立候半ト被察候、  
江戸表兎角鎮静ニ立到兼候半ト存候、何レ近日出府可

申上候、書外後便可申入候、

四月二十八日

〔伊達宗城〕  
伊豫守殿

御端書云々

三三九 井關盛良外五名外国官ヨリ小松帯刀へ

書翰

明治元年四月廿八日

以手紙致啓上候、然ハ今般英國公使来着、於  
朝廷厚ク御対遇可被遊御決定ニ付、濱殿石室ヲ以公子  
之旅寓ト被建置候、依之此段申進候、尚病氣小快ニ候  
ハ、至急出府有之度存候也、

四月廿八日

〔高芳、佐賀藩士〕山口五位  
〔久成、薩州藩士〕町田五位  
〔弘、薩州藩士〕中井弘藏  
〔宗則、薩州藩士〕寺島四位  
〔重信、佐賀藩士〕大隈四位  
〔盛良、宇和島藩士〕井關齋右衛門

〔鍋島〕直大  
〔東久世〕通禧

明治元年(1868)

小松玄蕃頭殿(帯刃)

上封

小松玄蕃頭殿

外国官

同裏

四月廿八日

三三〇 大総督府ニ令シ旧幕府ノ凶籍ヲ収メラル

三三〇ノ一 明治元年四月廿四日、大総督府ニ令シテ、旧幕府ノ凶籍

ヲ収メラル、

一官武ヲ初諸法度令条之扣帳

一官・堂上・諸門跡・諸侯並旗本・寺社等へ朱印判物相

渡候扣帳

一右同断ヨリ幕府へ指出候領知目録並郷村高辻帳

一元郡代・元代官支配所ニ付テノ書類

一 国高帳

一 村鑑帳

一 同絵図

一 家数人別帳

但子丑年差出候分

去卯年

一 取筒帳

去々寅年

一 成筒帳

一 外国交際一件帳

一 箱館蝦夷一件帳

一 道中奉行取扱之書類

一 宗門改之書類

右之外是迄於幕府天下之經營ニ付、日用不可欠之記録

類取揃、早々可指出候事、

右之通、

朝廷へ差出ニ相成候様、御取計可有之旨、各中迄可申

進段、徳大寺大納言殿被 命候間、大総督宮へ被仰上、

宜御取計可被成候也、

四月廿四日

内国事務局

判事

大総督宮

参謀衆中

三三〇ノ二

大総督府復書

略上諸帳面類之事承候、只今ヨリ少シ右返取調折合兼候間、左ニ御承知可給候、先鋒橋本ヘモ先達テ御沙汰有之候由乍、同様之儀ニ付、委細彼朝臣ヨリ池邊本姓 御河津士藤左衛門ヘ可申合候、御聞取願入候、仍如此御座候也、

閏四月四日

(記) 四月二十七日、田安中納言(慶類)ヘ達セラレタリ、

三三〇

本条其結局ヲ詳ニセス、因リテ之ヲ慶頼ニ質スニ報復左ノ如シ、

本文御達之書類何レヘ差出候哉、年月日共取調可申上旨、御達御座候処、私方書留無之二付、宗家徳川家ヘ問合候処、左之通申越候、

此御達面書留不相見候得共、城御引渡申上候節、初ケ条之分、右筆所土藏ヘ置付、二ケ条ヨリ九ケ条迄並道中奉行書類ハ勘定所ヘ置付、宗門改書類ハ目付方役所ヘ置付、其俣御引渡仕候、外国交際書類ハ外国官ヘ、箱館蝦夷地之書類ハ、於箱館表御引渡仕候義ニ御座候事、

右之通申越候、此段申上候、以上、

明治六年十月

從二位徳川慶頼

三三一 佐渡国裁判所及ヒ三河国裁判所総督ヲ任命ス

明治元年四月

四月廿四日

滋野井侍(公亮)從

一 佐渡国裁判所総督被 仰出候事、

山本一郎(連犬)

一 徴士内国事務局権判事被 仰付、箱館裁判所所在勤可有之事、

小野 淳 輔

右同断被 仰付、

松方助左衛門(正義)

一 徴士内国事務局権判事被 仰付、長崎裁判所所在勤可有之事、

平松甲斐権介(時厚)

一三河国裁判所総督被 仰出、遠江・駿河可為支配事、  
但限三年、

三三三 大久保利通日記

明治元年四月

廿三日

一太政官へ出席、従大坂神山帰京、還幸一条云々ニ付、  
大総督宮へ御間越相成、參謀西郷へ一封差遣候様承知  
差出、  
長崎浦上村邪蘇教信仰之者有之、右処置ニ付、議事有  
之候事、  
退出ヨリ廣澤旅宿へ參ル、

三三三 松平容保討伐ノ為薩・長以下ノ諸藩ニ

援兵ヲ出サシム

各通

(忠義、薩州藩主) 島津修理大夫  
(敬親、長州藩主) 毛利大膳大夫

右四方へ人数差出候儀ニハ候得共、松平肥後益暴激ニ

募リ、官軍ニ抗シ候段相聞得候付、北国路へ人数差向  
ケ奥羽之官兵へ応援イタシ候様、  
御沙汰候事、

四月十四日

三三四 旧幕府ノ要人稲葉正邦以下五名上疏シテ

罪ヲ謝ス

三三四  
明治元年四月

(淀藩主) 稲葉正邦・(川越藩主) 松井康英・(田野口藩主) 大給兼謨・(加納藩主) 永井尚服・(府内藩主) 大給近説  
ノ旧幕府之要路ニ居テ、匡救道ヲ失スルヲ謹メ、其状  
ヲ具申セシム、正邦等各上疏シテ罪ヲ謝ス、

各通 稲葉美濃守

松井周防守

大給縫殿頭

永井肥前守

大給左衛門尉

徳川慶喜御処分之儀、追々

御沙汰之趣モ有之候通、正月三日以来之挙動、叛逆頭

然其罪天下万民之俱ニ所知ニテ、終ニ恐多モ

御親征

行幸被為遊、深ク被為惱

宸襟候処、其砌其方事元幕府ニ於テ、老中相勸居候、就テハ去冬

大政返上以來大變動ニ及候形行、枢要之職務ヲ以テ、屹度取計振モ可有之筋ニ相当リ、且又慶喜東帰後ニテモ、迅速恭順謝罪之実効相立、不被為惱宸襟候様尽力可致筈之処、無其儀彼是不都合之次第、如何相心得候哉、巨細可申出様被仰出候事、

四月

内国事務局記  
稲葉正邦以下各家家記

尚服・近説之達書ハ、老中ヲ若年寄ニ作ル、

三三四ノ一  
明治元年四月

正邦以下申謝書

一昨廿五日、御書付ヲ以テ御下問之趣、謹テ奉敬承候、先年来於旧幕府、重任被申付候処、元来虚弱之生質ニテ、不絶不快勝ニ罷在、其上近来海内多端之折柄、迪

モ微力之可相及様無御座候ニ付、昨夏旧幕府在京中退役之儀、内達仕候処、聞届無御座、無抛相勸罷在候処、去冬

大政返上以來、不凶早春之變動立至、私在府中トハ乍申、徳川家枢要之職務罷在候得ハ、甚以不行届之次第、就テハ今般蒙御詰問候段、何共恐入候次第ニ御座候、尤旧幕府東帰後、退役之儀申立候処、何等之沙汰モ無御座候ニ付、猶又別紙之通再願書差出候処、漸去々月廿一日聞届ニ相成候ニ付、不快押テ発足仕候次第、呉々枢要之職務ニ乍罷在、如是形勢ニ立至リ、被為惱宸襟候段実ニ恐入候次第、今更以兎角可奉申上様無御座奉恐入候、委細ハ先達テ登京之砌、旅中於テ大総督宮へ証書奉差上候通、於勤王ハ二心無御座候間、其段乍恐御諒察被成下、何分之御沙汰只管奉懇願候、恐惶謹言、

四月廿七日

〔稲葉正邦〕  
淀侍従

弁事務局記  
稲葉正邦家記

三三四ノ二  
別紙〔辞表〕

私儀以不肖之身、奉蒙

御眷顧、

御先代様以来ヨリ御役被

仰付候段、難有仕合奉存候、然ル処不図胸痛相発、本

快モ抄取申間敷病症ニ付、過日退役之儀奉願置候処、

其後一層ト疲労相増、所詮出勤勉勵可仕見留モ無之、

長々引籠罷在候故、私名前ヲ以テ諸向へ御達相成候御

書付等モ、御趣意更ニ不相心得、中ニハ委細之事情恐精

ラクハ情ノ誤ニシテ、其下他或ヨリ被尋候節、答ニモ当惑仕候、

元ヨリ出仕不仕、営中ニテ御書付類相渡可申様無之儀

ハ、三歳之童子モ相弁居候儀故、右様ニテハ下へ御

不信ヲ御布告ニ相成候ニ相当リ可申哉、加之訳柄モ不

相心得候証文等へ、宅ニテ漫ニ調印仕候テハ、品ニ寄

如何様之手違可生モ難計、却テ公辺御不為ト奉存候、

其上弊邑之儀ハ攝京之地、早春不慮之事件ニテ、藩中

市街過半焼失仕、就テハ運送米金等モ一切無御座、必

至当惑罷在候、野・総・常之三国領地之儀ハ、元来狭

少之事故、当地住居家来共之扶助ニモ引足兼、在所ヨ

リ之仕送ニテ、衆命ヲ繋罷在候次第、其上春来之形勢

ニテ、一藩議論沸騰仕、同時御役相願候向ハ、不殘御

聞届ニ相成、私一人而已今以何之 御沙汰モ無御座候

ハ、乍恐公明至正之御趣意相戻リ候様、彼是疑惑相生

心配仕候、早々御役 御免不被成下候テハ、人氣之折

合モ不宜、鎮撫方モ行届兼、殆焦慮苦心仕、当節柄別

テ恐懼之至奉存候得共、昨今之形勢不得止、押テ奉歎

願候、前条之次第、御憐察被成下、至急御役 御免被

成下候様、只管奉再願候、万一此上 御沙汰延引相成

候ハ、最早私始一藩進退相窮候処ヨリ、如何様之姿

動相生可申モ難計、左候テハ对御役儀、尤恐入候儀、

第一御不体裁ヲ釀候テハ、猶以恐入奉存候間、是非共

願之趣、御聞届被成下候様仕度奉懇願候、以上、

二月十六日

稲葉美濃守

弁事局記

三三五 宮・堂上方ノ子弟ヲ度シテ、僧ト為スヲ

禁ス

四月、宮・堂上ノ子弟ヲ度シテ、僧ト為スヲ禁ス、

宮・堂上方ノ庶子等、追々其材ニ随ヒ、御登用可有之  
候間、以来僧徒ニ致間敷候様被

仰出候事、

四月

### 三三六 中外新聞節録

閏四月

此節日本国内ノ騒乱ニ乗シ、当港在留ノ或ル外国人、  
(Channel Islands ハワイ諸島の旧名)  
サントウキス島ノ砂糖竹植附ヲ渡世トイタシ候者ト約  
定シ、日本人三百余人(百四十余人計)ヲ三ヶ年季ニテ  
雇ヒ切り、砂糖竹植附刈込等ニ使役スルカ為、彼地へ  
差送レリ、

或云給銀一ヶ月五ドルツ、ニテ、期限五年ナリト、  
期限・給銀等ハ同シカラズト雖モ、イハユル黒奴売買  
ノ所業ニ均シキ事ニテ、此ノ如キ所業ハ万国ノ法例ニ  
戻リ、且無辜ノ日本人狡黠ノ外国人ニ欺カレ、利益ハ  
悉ク彼ニ奪ハレ憐ムヘシ、日本人ハ酷熱ノ氣候ト辛勞  
煩苦ニ堪ヘズシテ、疾病ニ罹ルノミナラス、万一如何  
程慘酷ノ所置ニ逢フトモ訴フヘキ処ナク、タトヘ死ス  
トモ期限内ハ故郷へ帰ルノ路無ク、不祭ノ鬼トナルニ  
至ラン、嘆惜スヘキノ甚シキニアラスヤ、方今日本全

国平穩ナラス、政府ニテモ此ノ如キ事ヲ処置スルノ暇  
無カルヘシ、然レトモ国乱稍治マリタラハ、政府ニテ  
能々此事件ヲ糺シ、之ニ關係セシ者ニ相当ノ罰ヲ加ヘ、  
後來ノ患害ヲ防クヘキナリ、然ラスンハ民人ノ災害ノ  
ミナラス、日本ノ大恥辱ナルヘシ、

サントウキス島近来天死ノ者多ク、民口年々減少ス、  
故ニ是マテ支那人ヲ雇ヒ使役セシカ、支那人モ炎暑ト  
虐使トニ苦シミ、彼地へ往ク事ヲ好マス、夫故ニ此度  
日本人ヲ雇フ事ヲ試ミタルヘシ、  
黒奴売買ノ事ハ既ニ禁止トナリ、其後英国政府ト支那  
政府ト条約アリテ、支那人ヲ年期ヲ定メテ、外国へ送  
リシ事アレトモ、是亦禁止ニ成タリ、

### 三三七 結城戦況

四月九日、是ヨリ先官軍(茨城県)結城城ヲ復ス、是ニ至リ賊復タ  
結城ニ迫ル、官軍之ヲ小山(下総)駅(下総)ニ邀ヘ撃チテ利アラス、  
結城援絶ユ、水野勝進(探津守)○結城藩(主勝知ノ祖父)其子勝寛皆遁ル、

四月

水野忠愛家記略



三月十七日、〔水野勝寛〕 輿之助儀賊難ヲ避ケ、藩地発足、東京ニ

到着ノ処、四月八日官軍結城へ御討入、城地御取戻シ

相成候ニ付、輿之助儀早々帰邑鎮撫致シ候様、内参謀

ヨリ御達ニ付、翌日発足、十一日結城へ着ス、隠居攝

津守儀ハ南総ニ立退罷在候処、内参謀ヨリ御達ニ付、

同月十五日夜結城ニ帰ル、然ル処賊徒又々屯集致シ、

凡人余襲来之模様報知之レ有リ、此時結城在留ノ官

軍並弊藩人数合セテ二百人ニ不足ノ人数ニ付、援兵ノ

儀石橋宿陣ノ官軍へ頼遣シ、同十六日小山宿ニテ戦争

ニ及ヒ候処、殊之外苦戦ニテ、遂ニ結城へ引取、十七

日賊兵追々湊迫、三方ヨリ相迫リ、諸隊甚苦戦、死傷

モ有之、外ニ応援ノ兵モ之レナキニ付、軍議ノ上一旦

開散、諸方へ立退候処、賊兵遂ニ襲来不致候、此時勝

寛儀ハ、野州大島村村長五郎左衛門ナル者方へ潜居、

廿五日帰邑、勝進儀ハ上総国旧頼成東村陣屋へ立退、

閏四月十日結城へ帰着、

三三八 仙臺藩ニ命シ、米斛ヲ予備シテ大総督ノ

需用ニ供セシム

(記)

四月三日

江戸城下物価騰貴、庶民其生ヲ聊ンセサルヲ以テ、仙

臺藩ニ命シ、米斛ヲ予備シテ、大総督ノ需用ニ供セシ

ム、

〔慶邦、仙台藩主〕  
伊達陸奥守

政道宜ヲ失シ、近年天下之人民安堵之思ヒヲ不成ノ折

柄、早春徳川慶喜暴挙已来、不得已ノ形勢ニテ、殊更

東武之地物価騰貴、小民饑餓離散ノ者モ不少歎之趣、

達

叡聞、深ク被、歎思食候、不日大総督官入城之上ハ、

人民居合之御取締モ屹度可被、仰出候、付テハ米穀等

之儀、現地之模様ニ随ヒ、御沙汰之儀モ可有之候条、

無滞速ニ運輸イタシ候様、早々可取調置

御沙汰候事、

但米穀価之儀ハ、至当之相場ヲ以取扱可申候事、

三三九 長府藩ニ佐渡鎮台随従ヲ命ス

三三九ノ一  
四月二十四日

(元敏、長府藩主)  
毛利宗五郎

其藩兵隊二百人、佐渡鎮台随従被

仰付候、最彼地鎮撫之上ハ、最前之通、越後路出張之

兵隊へ可致合併旨、

御沙汰候事、

四月

毛利元敏家記

三三九ノ二

筑前へ

其藩所持之蒸気船、薩・長両藩之彈薬、越後迄積廻被

仰付置候処、猶又佐渡裁判所総督並毛利宗五郎人数ヲ

乗セ、佐渡へ可致渡海旨

御沙汰候事、

四月廿八日

追テ明廿九日出港之事、

毛利宗五郎人数馬關ニテ乗組セ、越前敦賀港ニ着船、

同所ニテ佐渡裁判所総督為乗組、越後高田辺近辺ニ

着船、彈薬致水上、同所ニテ薩・長兵並ニ土民ニ佐

渡地之模様聞繕候上、佐渡へ渡海可致候事、

一若シ賊兵佐渡ニ屯集候ハ、薩・長兵申談、兵勢相

加へ渡海可致候事、

黒田長知家記

三三九ノ三

長知家記ニ云、右ニ付、環瀛丸ヲ以テ薩・長兵隊並ニ

器械・彈薬等積込、四月廿九日大坂出船、処々往返運

漕相勤、五月廿四日、一先福岡表へ帰船仕候事、

馬關 同四月二日着  
同六日出船

越前敦賀 同十一日出船  
能登七尾 同十二日出船  
同十七日出船

越中富山城下岩瀬川口 同十七日出船  
同日出船

越後榑原領今町 同十七日出船  
同日出船

七尾 同廿四日出船  
同廿五日出船

今町 同廿五日出船  
五月二日迄滞船

敦賀 同四日出船  
同九日出船

七尾 同十日出船  
同十三日出船

今町 同十三日出船  
同十七日出船

同領青村 同十七日出船

萩領須佐 同廿二日出船  
同日出船

馬關 同廿三日出船

三三九ノ四  
記

飯山藩届書

越後新潟辺へ屯集之歩兵共、信州路へ向候趣相聞候ニ付、応援人数差出候様、去ル十九日〔幸民、松代藩主〕真田信濃守ヨリ在所表へ申来、且中之条御取締尾州出役ヨリモ同様掛合有之候処、兼テ

御総督ヨリ御達之趣モ有之候ニ付、先達テ御届申上候通、当時〔長野県〕沓掛宿へモ人数差出置、人少中ニハ候へ共、不取敢ニ小隊差出候旨、在所表役人共ヨリ申越候、委細之儀ハ尚申越次第可申上候へ共、先此段御届申上候、以上、

四月廿八日

弁事御役所

〔上田藩主〕  
松平伊賀守

三四〇 藩庁通達

〔群書輯録二十九〕

一当世態付、平日出勤等之節も、戎服等実用ニ相弁候服合相用候様、於京都 御沙汰被為 在候段、申来候付、於御当地も御趣意通兵隊は勿論之事にて、平日出勤等

之節も、戎服等実用ニ相弁候服合相用候て不苦候条、此旨向々江可致通達候、

辰四月

〔島津久信〕  
圖書  
〔桂久松〕  
右衛門  
〔川上久勝〕  
龍衛  
〔新納久徳〕  
刑部  
〔町田久慈〕  
内膳

三四一 大垣・松代其外ノ藩へ松平肥後等ノ賊徒

追討ヲ命ス

〔氏共、大垣藩主〕  
戸田采女正  
〔幸民、松代藩主〕  
真田信濃守  
〔マヤ〕  
其外十七藩

松平肥後其他賊徒等、益反逆相募リ、北越ヨリ信州表へ侵入ノ段相聞候ニ付、尾張前大納言へ追討被 仰出、其藩之儀モ同様被 仰付候条万端尾州申談、同心戮力速ニ逆賊討伐可致旨、 御沙汰候事、

四月廿九日

三四二 新納久脩申渡書

(群書輯録二十九)

一 御当地居住郷士之事

御用人座附士

右之通此節唱ヒ相改、格式は是迄之通にて、御用人支配ニ被仰付候、左候て即より兵隊組立操練方申付候、

一 初日之御目見等は不被仰付、其外当分通申付候、

一家督継目、其他身分付諸取扱向之儀は、御用人受持、

一 上方限居住之者は一番方限、下方限川内は二番、外は

三番方限と夫々區別定置、右方之内江兩人位ツ、小与

頭申付置、調練引進方は勿論、諸通達事等之儀も時々

致通達、諸事嚴重行届候様申付候、

右之通被仰付候条、当今世態汲受精々勉勵、屹と御

用立候様可心掛候、此旨可申渡旨、御用人江申渡、

御軍賦役頭取其外可承向へも可申渡候、

但諸郷土着郷士之儀は、諸事当分通申付候、

四月

刑部

明治元年四月

四月八日午ノ半刻、佛蘭西国コルヘツトデプレーキス

船ノ指揮官カヒテーンデフリケイト第二船符・ヘルガスヂユ

ペチトワールス名・英吉利国使節館掛リエ・ビミツト

ホルト行在所へ参

上ス、輔弼中山卿御対面アリ、外国事務局判事誘引ス、

蓋シ過日

皇帝陛下御機嫌能

御着輦ノ御歡ビヲ申上奉ル也、未ノ刻退出セリ、

三四三 フランス船指揮官及ヒイギリス使節館掛

行在所へ参内ス

〔表紙〕

忠義公史料

明治元年閏四月一

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

三四四 滯京五旬ヲコユルモノハ帰藩ノ上政治ヲ  
改正シ、備ヲ嚴ニセシム

明治元年閏四月

諸侯参 朝御制度之儀ハ、追テ可被 仰出候得共、先  
頃 御親征 行幸 御出輦前

御誓約済之向ハ、一ト先御暇被下候処、其後上京、  
御留守中滯京、還幸後 御誓約済之面々ニテモ同様  
永ク滞在イタシ、徒ニ疲弊、往々藩屏之任難堪様立至

り候テハ、不相濟段ハ勿論之事ニ付、五十日余滯京之  
向ハ、追々御暇被下候条、帰国之上ハ 御誓約之  
御趣意ヲ奉体認、速ニ家政向改正ハ勿論、方今松平肥  
後等賊徒益暴威ヲ募リ、官軍へ相抗候次第無謂事ニ  
テ、此後之形勢ニ依リ、恐多モ再ヒ  
御親征可被 仰出儀モ可有之哉、全ク  
皇国内 御鎮定ニモ不立至事ニ付、弥以不虞之備ヲ嚴  
ニシ、於国邑 御指揮可奉待旨被  
仰出候事、

但兵隊差残方等、総テ先達テ御布令同様可相心得候  
事、

閏四月十四日

右閏四月十五日、太政官代ヨリ御渡相成候旨、肥前様  
衆ヨリ廻章到来之趣、新納嘉藤<sup>〔立夫〕</sup>二首尾書有之、

三四五 外国人ヲ傷害シタル犯人ノ太政官手配書

当津切戸町

木挽渡世

山田屋

太蔵事

源七

卅六七才

人相

一中背中肉色黒ク

一顔平面鼻低ク

一眼一卜通眉毛濃ク

一薄菊目石有之、其外常体、

ノ但同人女房ヨセ並悴安蔵召連候事、

右之者、外国人江手疵ヲ為負逃去候付、見当次第早々可

申出候、外国

御交際之儀ハ、於

朝廷重大之御事件ニ付、嚴重取調可尋出候、申出候モノ

ニハ、褒賞金可遣候、万一心得違隠置候モノ於有之ハ、

可為曲事候、此段早々可相触モノ也、

兵庫

後四月十六日

裁判所

右之通兵庫・大坂裁判所ヨリ触達相成候条、其他御領・

私領共固ク布告被

仰付候間、其旨相心得、召捕次第早々兵庫裁判所へ可申

出者也、

閏四月

太政官

太政官代ヨリ被相渡候旨、肥前様衆ヨリ廻章到来イタ

シ候事、

閏四月十九日

新納嘉藤二

〔朱〕本文御尋者向々へ申渡之趣ハ回文留ニ有之

島津忠義家記

三四六 村高帳差出ニツキ藩家老往復書翰

諸国村高帳是迄幕へ差出候振合、写相副民政役所へ差

出候様、別紙之通被 仰渡候付、委細御留守居付役遠

武橋秀吉二へ申含越候間、早々取調之上可被差越候、尤細

島之儀ハ御留守居へ為致吟味候処、本幕ヨリ御預之儀

御承知相成居候得共、其後高辻帳ハ勿論、地面ヲモイ

マタ引渡不相成候付、別紙此御方ヨリ取調ニ不及、御

領内村高帳写被差出候節、其趣御届相成可然段、御留

守居申出候付、本幕ヨリ細島御預之儀ニ付、相渡候書

付・書面等写相添、可被差越候、達

貴聞此段申越候条、

中將様被達

御聞、急速取調相成被差越候へ共、何分モ可被取計候、  
以上、

辰四月

島津圖書殿

島津伊勢(広兼)

御家老中

(朱)「本文致承知、則

中將様達 御聴、取シラへ方之儀御文書奉行へ相達候  
処、安政六未年旧幕へ被差出候高辻帳扣、並写二通書  
面勞能々取調有之、右ヲ其許ニオイテ外々御振合モ可  
有之候付、宛書並上書等御取直、一通リハ写之筋ニテ  
御差出相成可然哉之旨申出候付、此節其尽差越候条、  
御留守居へ被致吟味御差出相成儀共、何分モ宜被取計  
候、尤御達書之内元幕府ヨリ預所、並元郡代・元代官  
支配所藩々へ取締被仰付置候向共、帳類写相添可差出  
旨相見得、日州旧幕領之儀ハ、先般

此御方様へ取締被仰付置候処、其後追々延岡外兩藩ヨ  
リ伺之趣有之、是迄之通相心得候様御達相成候由ニ付、  
右帳類ハ三藩ヨリ夫々可差出儀ニ存候、右ニ付委細之  
儀共奈良原幸五郎(繁)へ申含、先日差立候間、申出候ハ尤

細島御預所等之書付写相添、箱入付ニテ差越候間、旁

可然被取計候テ可有之候、別紙御留守居首尾書扣置、  
此旨及御返答候、以上、

辰閏四月十七日

島津伊勢殿

島津圖書

御家老中

島津忠義家記

三四七 小御所ニ於テ三職・公卿・諸侯以下ニ酒饌

ヲ賜ル

明治元年閏四月

同月十九日、小御所へ 出御、供奉ノ三職・公卿・諸侯・  
徴士、及ヒ御留守警衛加賀・薩摩・阿波三侯、玉座近  
ク被為 召、公卿・諸侯御二ノ間、参与・徴士御廂ニ於  
テ 天顏ヲ拜シ奉リ 入御、是ニ於テ公卿・諸侯及ヒ参  
与各左右ニ分列、酒饌ヲ賜ヒ、再ヒ出御、 行幸供奉且  
御留守警衛等、各勤勞ヲ遂ケ候段、 御親シク 綸言被  
仰出、 天杯ヲ被下置、猶公卿・諸侯各錦一卷・御扇子  
ヲ賜ヒ、其他徴士以下賜各差アリ、後ニ左ノ通り、

今度 御親征海軍 (鑑上親王) 天覽之為、浪華へ、行幸有之候処、

慶喜恭順謝罪之条々、大総督宮ヨリ言上有之候ニ付、

還幸ニハ相成候得共、會津ヲ始メ殘党之者共、未タ平

定ニ及ハス、出張 官軍之輩、尚矢石ヲ冒シ、粉骨碎

身苦勞之折柄、御遊宴ナト被遊候 思食ニテハ決シテ

不被為在候、乍去 行幸供奉 御留守等人々モ亦、出

精勤勞不少 叡感之余リ、聊其勞ヲ被慰度 思食ニヨ

リ、今日酒饌ヲ賜候間、各 御趣意ヲ奉戴シ、無斟酌

拜領可致之旨、御沙汰候事、

閏四月 千七百

三四八 逆徒ノ造言ニ惑ヒ、大義ヲ忘失ナキ様戒

諭ス

閏四月十九日御布告之写

大政御一新万機 御親裁、千載之御一時ニ付、被為対

御先靈御至孝之実蹟相立、蒼生之艱苦ヲ被為救度、深

ク被為遊

宸憂候処、逆徒等様々之造言ヲ流布シ、愚民ヲ誑惑シ、

姦徒ヲ誘ヒ、

天子之御保全可被為遊 王土ヲ掠メ、王民ヲ苦シメ、

現ニ攘奪窃取至ラサル処ナシ、然ルニ唯目前之偷安ヲ

事トシテ、往々逆徒ノ鼻息ヲ窺ヒ、臣子ノ大義ヲ忘失

シ、進止曖昧、両端ヲ持シ候藩モ有之軟ニ相聞、御

遺徳ニ被 思食候、他日御吟味之上、可被 仰出旨モ

可有之候ニ付、此段改テ為心得 御沙汰候事、

閏四月

三四九 宮・公卿・諸侯及ヒ社寺等領地受封ノ判物

ヲ差出サス

三四九ノ一

達元年閏四月十九日

王政御一新ニ付テハ、宮・公卿・諸侯并神社・寺院等

領地高之儀、御改正可被 仰付候間、是迄旧幕府ヨリ

受封之判物、急々御用有之候間、内国事務局へ差出候

様被 仰出候事、

三四九ノ二

鎮台府ヨリ社寺・民政・市政三局并各藩へ達 元年六月廿八日

今般各府・各藩・各県所部ニ属スル社家・寺院、已来

其向之可為支配旨、於太政官被 仰出候ニ付テハ、旧



明治元年(1868)

幕府ヨリ受封之判物差出方之儀ハ、各其領主・地頭へ差出可申候、尤是マテ元寺社奉行所直支配受來候向ハ、社寺裁判所へ可差出候事、別紙之通被 仰出候ニ付テハ、各其所部ニ属スル社家・寺院、旧幕府ヨリ受封之判物早々取集、社寺裁判所へ可差出候事、

三五〇 堀田正頌謹慎ヲ命セラル

堀田攝津守(正頌、佐野藩主)

右謹慎被仰付候事、

閏四月

右閏四月十九日、太政官代ヨリ被相渡候旨、肥前様衆ヨリ廻状到來之趣、新納嘉藤ニヨリ首尾書有之、

三五一 桂久武谷山地頭專任ヲ命セラル

明治元年閏四月十九日

谷山地頭

桂(久武)右衛門

右谷山地頭兼帯被仰付置候得共、当御役ニテ右之通地頭職被仰付候条、

御用ノ節々差越、平日ハ兼承候様被仰付候、

閏四月 (新納久橋)刑部

三五一 再ヒ小御所ニ於テ三職・公卿・諸侯以下

ニ酒饌ヲ賜ル

閏四月

翌廿日、再ヒ小御所へ 出御、御留守三職被召出

天顔ヲ拝シ、酒饌ヲ賜フ、公卿・諸侯ヨリ参与・徴士ニ至ル迄、序次皆前日ノ如シ、乃チ

行在所別テ勤勞ヲ遂ケ、御満足 思食、慰勞ノ為酒饌ヲ賜ヒ候間、各其飲ヲ尽スヘキ旨、御親シク被 仰渡 天杯ヲ被 下置、猶各晒布ヲ賜フ、其以下徴士皆

賜モノ差アリ、

詔書モ亦前日ノ通被 仰出候事、

三五三 中山忠能右兵衛督ヲ免セラル

右兵衛督

中山前大納言<sup>(忠能)</sup>

右被免当職、依別段思召、自今御前日參被仰出候事、

閏四月廿日

右御仮建所ヨリ被成御渡候趣、新納嘉藤二閏四月廿

三日首尾書有之、

今般制度規則被相改、不拔之御政体御確定被為在度厚

キ御趣意ヲ以、人材御精選之上、諸職御任用被仰

付候条、一同奉体認、一際尽職掌、速ニ治平之功績ヲ

挙ケ、万民安業、国家之大基礎相建候様、勉勵鞠躬、

可安

宸衷旨 御沙汰候事、

閏四月

三五四 皇居ヲ二條城ニ造営スルヲ以テ、仮ニ太

政官代ヲ禁中ニ移ス

三五六 三十歳未満ノ者小番ヲ免シテ勤学セシム

閏四月廿一日御布告

閏四月廿一日堂上方へ御達

前日被 仰出候通、二條城へ被移 玉座候、就テハ

御造営并太政官代御修覆ニ付、自今廿一日官代ヲ

禁中へ被移候旨、被 仰出候事、

但武家玄関ヲ以テ、弁事伝達所ト相心得可申事、

御趣意ヲ遵奉シ、勉勵可致旨被仰出候事、  
御拔擢可被為在候間、屹度

閏四月

但追々文武場所御取建ニモ可相成候得共、当分大学  
寮代へ出席可致事、

三五五 制度規則ヲ改メテ諸職任用ヲ命セラル

閏四月

閏四月廿一日官中一同へ御達

三五七 小松帶刀從四位下ニ叙セラル

明治元年閏四月廿一日

小松帶刀〔清麿〕

叙從四位下

右

宣下候事、

明治元年戊辰歲閏四月廿一日

込申上候様奉畏候、相統人之儀、当節柄不折合之儀等有之候テハ、不相濟儀ニ付、血筋之内可然者へ被仰付方ニハ有之間敷哉、将又秩禄高之儀ハ、何程ニテモ可然哉、更ニ見込モ無御座、何レ衆議ヲ被尽、公論ヲ以御決定相成候方ト奉存候、

鍋島直大家記

三五八 小松帶刀大船ノ管轄ヲ命セラル

明治元年閏四月

小松帶刀

大船一艘諸事一切管轄被 仰付候事、

閏四月

外国事務局〔朱〕



三五九 徳川慶喜ノ処分ニ付キ諸侯答議ス

三五九ノ一

閏四月四日鍋島直正答議

徳川慶喜家名被立下候ニ付、相統人並秩禄高之儀、見

三五九ノ二

徳川慶喜段々悔悟恭順之趣、愈謝罪之実効相立候ニ付、慶喜之処分、且家名被立下候ニ付、相統人並秩禄高之儀、衆議公論被為執、

御裁決被遊度ニ付、無伏臆見込之程、以封書可申上旨奉畏候、慶喜於身前ハ既ニ寛大之

叙慮ヲ以、死罪一等被宥、水戸表へ退去謹慎可能在候旨被

仰付置候処、更ニ水戸家へ御預、永蟄居被

仰付、家名相統人之儀ハ、徳川同姓之藩々へ、血統之

内人撰被

仰付、親族一同ヨリ願出候者へ相統被

仰付度、秩禄高ノ儀ハ、極テハ難申上奉存候得共、祖宗以来二百余年、治国ノ功業モ不少候得ハ、家族之者

ヲ初メ、祖宗以來累代、召使候家來之者、永ク扶助候  
丈之采地、被下置可然儀ト考合仕候、此段申上候、以  
上、

閏四月五日

安藝新少將

淺野長勲家記

三五九ノ三

一昨日御垂問之旨奉畏候、退テ熟考仕候処、臣廣封父  
子徳川氏トハ從來行掛リモ有之、強テ見込申上候テモ、  
却テ公論ヲ害シ候筋モ可有御座ト、只管痛心罷在候、  
何卒衆議之帰スル所ヲ以、相当之御処置被為在度奉仰  
望候、誠恐誠惶謹言、

閏四月五日

臣廣封稽首再拜

毛利元徳家記

三五九ノ四

徳川慶喜謝罪申出候ニ付、  
御裁斷之見込無伏臆可申上旨、謹承仕候、斯重事件ニ  
付、方向相立兼、雖然從古其事業ヲ觀テ、其情態ヲ熟  
察シ、処分ニ及ヒ候ハ勿論之儀ニ候所、於徳川家ハ祖  
先治国之功績ハ御座候ヘ共、方今  
朝敵ト相成、恐多クモ

御親征之御次第ニ立至リ候ヘハ、悔悟恭順トハ乍申、  
秩祿等之儀ハ自然之理ト、時ト勢トニ出候ヘハ、即今  
之情実ヨリシテ、親敷承知不仕テハ、乍淺案モ決定難  
申上候、尤相統人ハ徳川血統正敷者ヲ被為撰、猶後來  
御見度被為在候テ、御治定ニ相成候御儀、肝要ニ奉存  
候、誠惶謹言、

後四月五日

津和野侍從茲監

亀井茲監家記

三五九ノ五

議定答議九条

徳川慶喜段々悔悟恭順之趣、愈謝罪之実効相立候ニ付、  
慶喜之処分且家名被立下候ニ付、相統人並秩祿高之儀、  
衆議公論ヲ執リ、御裁決被遊度候間、各無伏臆見込之  
程、以封書可申上様被、仰出、令謹承候、抑慶喜所業  
不可言之暴動多端、每事奉惱、宸襟、其逆罪難逃儀、  
天下ニ挙テ所知ニ候、然ル処頃日悔悟恭順、謝罪之实  
行相立候ニ付テハ、祖先家康ノ勲勞モ不被為棄候哉ニ  
モ存、徳川血脈相当之者ヘ家名被立下、祖先之祭祀不  
相絶之秩祿ヲモ被下置候ハ、慶喜之処分モ相立候、  
且人撰並秩祿高多少之論ハ、即今見込付兼候、依テ愚

存二ハ、薩州・長州之如キ為 國家頗ル勉勵確乎タル

誠忠藩之見込被為基、御裁決被為在候ハ、 聖明至

当之公論ト令愚考候、指懸リ御尋ニ付、存慮之俛令言

上候、誠惶誠恐頓首、

戊辰閏四月五日

幟仁

有栖川宮家記

三五九ノ六

林和靖日記ニ云、四月廿五日弁事被達、徳川慶喜段々

悔悟恭順之趣云々一紙、具視窃ニ考フルニ、創業経国

云々一紙ヲ三番所へ御達可有之、尤明日中ニ銘々見込

之処、一封ヲ以テ言上可有之、一同取集、明後日巳刻

迄ニ弁事へ可差出一紙等、各近習原註、三位内々外様近習佐

へ達ス、

三五九ノ七

行在所達書

徳川慶喜段々悔悟恭順之趣、弥謝罪之実効相立候ニ付、

慶喜之処分且家名被立下候ニ付、相繞人並秩禄高之儀、

衆議公論ヲ執リ 御裁決被遊度候間、各無伏臘見込之

程、以封書可申上様被

仰出候事、

閏四月

三六〇 車駕京都ニ凱旋ス

明治元年閏四月

閏四月八日辰刻

龍駕〔述〕澱城ヲ発シ、東殿御小休、午半

刻 還御、堺町御門ヨリ御入、伶人還城楽ヲ奏シテ前

導シ奉リ、三職・公卿・諸侯・徴士之輩、院御所前ニ

テ 蹕ヲ迎へ、在京諸侯九條公邸前ニテ奉迎ス、是日

天氣朗霽、都鄙士民盛儀ヲ拜觀シ、齊シク万歳ヲ唱フ、

三六一 島津廣兼ヨリ島津久治外家老へ、宇都宮

諸所ノ戦状ヲ報ス

先月廿日並同廿三日、五番隊・六番隊野州〔栃木集〕宇都宮諸所

賊兵戦争之形行、一昨五日西郷吉之助帰京申出、且御

軍賦役ヨリ江戸在陣同役へ問合差出、此節ハ賊軍大勢

ニテ嚴重相備、暫時ハ余程苦戦ニ及ヒ候へ共、終ニ打

破賊兵及大敗走、首級等モ百余人打取、残兵モ日光等

弁事局記  
毛利元徳家記

へ散乱之由、右通戦毎ニ得大勝利、実ニ朝廷之御威光且ハ

御国名、愈以相輝、誠以大慶不過之御同意存候、右之通苦戦ニテ戦死モ十五人、其外手負深淺二十余人有之、兵士之盛ル儀不絶銘感次第ニ候、依之右問合書ハ、御軍賦役ヨリ差廻候様相達置候付、

中将様可被達

御聴候、尚委細之儀近々三島彌兵衛・三雲藤一郎出立

之筈ニ付、申合越候付、猶又可被承届候、以上、

但

會津表之儀ハ未相分候付、一左右次第則申越候様

可致候、尤別紙之通

朝廷へ御届被仰上候付、写差越候、

閏四月八日

島津圖書殿

久世

島津伊勢

広兼

御家老中

三六二 新納嘉藤二ヨリ野州戦状ヲ報ス

東山道為先鋒弊藩ヨリ差出置候人数之内、野州辺賊徒

乱入イタシ、官軍為応援一小隊並長州一中隊・大垣一中隊被差出候処、先月廿日岩井茨城縣ニヲヒテ、賊兵千五

百人位ト及戦争、互大小砲打合、頻ニ攻撃ニ及候処、纔半時計之間ニ賊兵散々敗走イタシ、賊首百余級打取、大ニ勝利ヲ得、生捕六人・分捕数多有之、弊藩手負・討死別紙一印之通御座候、

一、同月廿三日壬生城ヨリ弊藩一小隊・大垣一中隊、宇都宮城へ楯籠居候賊兵、為攻撃出軍イタシ候処、城外へ砦ヲ構居候ヲ打破リ、追々相進掘涯迄押詰候折柄、賊兵裏路ヨリ拔出、官軍之後ヲ絶切、前後ニ敵ヲ受、難戦ニ及ヒ候故、伏兵ヲ設、前之賊兵ヲ支へ置、後ノ賊兵ヲ打挫、三時余之戦ニテ味方ヲ一所ニ相円、兵糧相ツカヒ候処へ、本文岩井茨城縣ニヲイテ相戦居候三藩之兵、結城ヲ相発シ、本街道ヨリ押来リ、因州之兵隊ハ壬生路ヨリ相進、両道之応援諸勢会戦ニ及候ニ付、大ニ力ヲ得、又々進撃イタシ候処、終ニ賊兵及敗走、官軍大勝利ニ相成、賊首百数十級打取、分捕モ数多有之、宇都宮城主並藩士モ追々帰城ニ相成、野州辺都テ鎮定イタシ、賊兵日光栃木縣へ逃去候由、其節弊藩手負・討死、別紙二印之通御座候、

右之通函戦共、官軍大勝利ヲ得候趣申越候間、不取敢御届申上候、以上、

島津修理大夫内(忠義)

閏四月八日

新納嘉藤二(主)

島津忠義家記

三六三 家老町田久憲野州戦状ヲ藩内ニ通達ス

明治元年閏四月

一先月廿日・同廿三日、東山道岩井駅又ハ野州宇都宮城ニヲヒテ、賊兵攻撃、官軍大勝利之次第并御国兵隊戦死人数、別紙之通去ル八日、朝廷へ被為及御届候段申来候、此段被致承知候様、向々へ可致通達候、

閏四月

町田久憲  
内膳

廿九日被仰渡候事、

〔以下番号三六一と同文により削除〕

三六四 大久保利通ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

明治元年閏四月

一輪拜呈仕候、向暑之時分相成候処、於其元

中将様益御機嫌能被遊御座、恐悦奉存候、於此地

太守様御同様被遊御座、御同慶奉存候、関東之儀モ、

今般西郷吉之助致帰京、委曲承候処、先々能都合相運、

余賊モ大概相散シ候由、野州辺所々蜂起セシ勢ニテ、

暫於当地モ取々巷説有之候得共、終ニ官軍大勝利ニテ、

残賊凡テ日光へ逃散イタシ候由ニ御座候、詳細同人ヨ

リ可申上候付、相省キ候、信州路へモ残賊并水戸脱走

人数等相起、飯山ヲ抜松代へ懸リ候風聞ニ候処、是モ

真田・尾張人数ニテ打散シ、賊大敗ニテ逃去候由ニ御

座候、右ハ凡テ會津ヨリ進撃ト申訳ニハ無之、梁田・

勝沼辺之残兵ニ候由、會津之儀ハ境ヲ守、越後路ニ手

ヲ巡シ、佐渡迄人数ヲ少々屯集セシメ候様ニ被聞申候、

仙臺之方ハ先無事之由、薩・長・加州等陸路被差出候

人数、追々越後路へ懸リ可申候間、是ニハ戦争相始リ

可申、何方トイヘドモ薩・長ノ人数ヲ以戦、毎戦勝サ

ルハ無之、実ニ兵威之盛ナル前代未聞ニテ、感伏之至

ニ御座候、野州辺ニテハ彦根・大垣ナト、別テ相振候

由ニ御座候、

一徳川慶喜恭順奉仰

王裁候廉ヲ以テ、一先

還幸被仰出、昨七日

御發輦ニテ今日

御着輦被為在候、御同慶奉存候、徳川家名相続人体、

秩祿之員、移封之事故々衆議ニ相成居候へ共、未相決

不申候、三條卿御帰京其外相揃候上、今日モ御評議之

筈ニ御座候、

一御当地別段相替候儀モ無御座候、日誌入御覽候、

一信州路へ西園寺卿總督、細川良公子〔辰岡變志〕副督ニテ出張被仰

付候、当分ニテハ熊藩モハマリ付候模様ニテ、同人右

御願出相成由ニ御座候、横井平四郎〔時在〕上京相成申候、

右今日飛脚被差立候付、大略形行申上度如是御座候、

頓首、

閏四月八日

大久保一藏

衰田〔辰徳〕傳兵衛様

三六五 川上千郎ヨリ家人へ戦状ヲ報ス

明治元年閏四月

一上文略、於関東ハ城明渡シ、慶喜水戸へ退慎、軍艦都

テ差出、四艘御取揚、内富士山此御方へ御預り、四艘

ハ是迄之通徳川へ御渡被置候由、會津・庄内ハ存亡国

ト共ニ決死楯籠リ、今形ニテハ何レ大合戦不相成候テ

ハ鎮リカタクト申事ニ御座候、依テ為応援追々出兵モ

被仰候、且東山道ヨリ出兵、大垣等出軍之途中、去ル

十八日野州岩井駅ニテ戦ヒ、少々官軍死傷モ御座候得

共、纔ニ賊兵打挫カレ、同廿三日宇都宮ニテ合戦之節

ハ、余程苦戦、五番・六番大ニ難戦、戦死・手負此御

方ハ勿論、長・大垣辺モ不打、乍然賊ハ倍々之戦死ニ

テ、悉ク打碎カレ、分捕・生捕等挙テ難数由、去ル五

日西郷氏并筆者竹下氏江戸ヨリ帰京、又々御用濟次第

帰陣之筈ニ御座候、周蔵モ相加里候、四番隊モ板橋へ

残り居候処、右一左右ニ依テ去ル廿三日繰出シ、出軍

之由ニ御座候、其后未一左右モ不相分申候、

主上昨七日大坂 御立、今未刻

御所へ 御着輦、上下貴賤万才ヲ唱テ奉祝、大ニ賑ヒ

申候云々、下文略之、

又四月八日

川上千郎

父上様  
母上様



彦熊殿

追テ鹿菓子一箱進上仕候、川北六左衛門殿、廿三日  
宇都宮合戦ニ戦死、大迫新八郎殿・矢野八次郎殿手  
負被致候由、佐藤彦五郎殿ニモ戦死之由、於戦場モ  
武夫之常トハ申ナカラ、誠ニ歎ケ敷次第之事ニ御座  
候、余程皆々無比類働被成候ヨシ、誠ニ乍不本意、  
此節モ大迫氏等へ別啓得不致候間、宜御願申上候、  
一新藏殿ニハ江戸へ滞陣、至極元氣之由、御安心候様  
加治屋町并有川へモ御申聞可被下候、

三六六 未誓約ノ在京諸侯へ参朝ヲ命ス

明治元年閏四月

誓約未相済

在京諸侯

御用之儀候間、明十日午半刻参 朝可有之候也、

閏四月九日

三六七 在国・在邑ノ諸侯ハ重臣ヲ以天氣ヲ伺フ

ヘキヲ令ス

明治元年閏四月八日

御機嫌能

還幸ニ付、在国・在邑ノ諸侯ハ、十日・十一日之内、

重臣ヲ以太政官代弁事伝達所ニ於テ、可伺

天氣候事、

但仮建ニ於テ不取敢伺相済候向ハ、最早申上三不及

候事、

閏四月

右辰閏四月九日、禁中御仮建へ就御用、御留守居附役  
田中清之進罷出候処、御書付二通非藏人ヲ以被成御渡  
候趣、新納嘉藤二首尾書有之、

三六八 副総裁兼議定三條實美ニ関東監察使ヲ兼

ネシム

閏四月十日、関東監察使ヲ置キ、副総裁三條大納言ヲ以

テ之ヲ兼ネシム、

御沙汰書

三條大納言(實美)

今度徳川慶喜降伏謝罪奉仰

天裁候付、以至仁之

叡慮、寛典之御所置被

仰出候間、速ニ東下億兆人心安堵候様取計可致、總テ

御委任候、且可為關東監察使之旨

御沙汰候事、

閏四月

三六九 萬里小路通房ニ關東監察副使ヲ命ス

明治元年閏四月

萬里小路弁〔通房〕

今度為關東監察使三條大納言被差下候間、為附屬東下

被 仰付候事、

閏四月

三七〇 土方久元日記

閏四月十日 晴

朝拜如例、五時致參殿、夫ヨリ東園中將殿〔幕僚〕へ御使者相

勤、并 禁中ニモ罷出候テ、九時比罷帰候、八時比ヨ

〔幕僚〕

リ三條西様被為召候テ罷出、御相談之有之テ、跡ニテ

御酒共被下、入夜六半比引取候、烏丸殿ニモ御入来ニ

テ、拜謁被仰付候事、然ルニ三條様監察使御蒙、萬里

小路様副使御蒙ニテ、明十一日未刻当地御発、大坂ヨ

リ蒸氣船ニ被為召候テ、御出被遊候ニ付、御供被仰付

度ヲ以テ、屋敷迄御相談有之候由ニ付、夫ヨリ屋敷ニ

行、兩府及第共ニ致面会候テ、八時罷帰候事、

三七一 酒井忠美北蝦夷開拓ヲ従前通仰付ケラル

酒井銚次郎北蝦夷開拓被仰付書

明治元年四月

酒井銚次郎〔忠美〕

北蝦夷地開拓之儀、従前之通精々尽力可致様被

仰付候事、

四月

酒井忠美家記

忠美家記ニ云、四月、忠美江州大津駅到着之處、兼テ

京地へ差出置候家来共迄、右之通清水谷殿ヨリ御達之

趣申来候事、

三七二 酒井家臣ヨリ箱館裁判所御用金献上ノ旨

ヲ申請ス

酒井家臣申請書

明治元年閏四月

申請書

口上覚

今般蝦夷地御開拓之儀、被

仰出候、就テハ副総督清水谷様、近々被成御発途候趣

承知仕、右ニ付箱館御裁判所為御用、乍少分金五百両

献上仕度奉存候、何分之御用ニモ相成候ハ、難有仕

合奉存候、此段宜御執成之程奉懇願候、以上、

酒井銚次郎家来

閏四月十三日

窪田音蔵

弁事

御役所

弁事局記

忠美家記略ニ云、願書差出候俟ニテ、其後何等之 御

指令モ無御座候、

三七三 大坂市中極老者へ賑恤達書

明治元年閏四月六日

達書

兼テ被

仰出候通、厚キ 御賑恤之

思召ヲ以、今般大坂市中極老者之者へ、別紙之通

御恵ミ可被為下置候旨、被

仰出候事、

但シ兼テ被

仰出候孝子・節婦等、尚早々取調可申出旨、更ニ

御沙汰候事、

閏四月

別紙

一百歳以上 老人ニ付給穀 三三石

一九十歳以上 同 二石

一八十歳以上 同 一石

一七十歳以上 同 五斗

右之通 御恵ミ可被為下置候間、早々取計可申旨

御沙汰候事、

閏四月

明治元年閏四月

行在所日誌

同日神祇官并大坂裁判所へ 御沙汰書

明治元年四月

四月下旬 元北組 元南組 元天満組

長寿ノ者書上高

元北組 九拾歳以上 拾三人

八拾歳以上 貳百四拾八人

七拾歳以上 千八百四人

元南組 九拾歳以上 九人

八拾歳以上 三百三拾八人

七拾歳以上 貳千七拾一人

元天満組 九拾歳以上 二人

八拾歳以上 百七人

七拾歳以上 九百四拾六人

ノ 五千五百三拾八人

大阪府記

明治元年閏四月

三七五 還幸ニ付イテノ仰出

此度 還幸被 仰出候ニ付テハ、兼テ

御沙汰ニ相成候御法度之件々堅相守、礼儀廉恥ヲ主トシ、御心得違之所業、屹度無之様相慎、各其家々陪從

三七四 大坂裁判所ニ命シテ衆庶ヲ安撫シ、病院

ヲ創設セシム

之者ニ至迄、不洩様嚴重可申付候、若不心得之輩於有之ハ、屹度

御沙汰可有之旨、更ニ被 仰出候事、

閏四月

三七六 遠近新聞節録

三七六ノ一

閏四月

西国ヨリノ新聞日附、西洋三月二十一日

此度英国ミニストルシヤ・ハレ・パークス大坂ニ到リ、

(公使 Sir Harry Parkes)

皇帝ニ拜謁シ、証拠書ヲ呈セリ、此証拠書ノ儀ハ、已ニ看官ノ知ル所ナリ、此ノ拜謁ニ付タヒシタル事一ツアリ、今迄日本ノ習弊ニテ、独り士分ノミヲ重ンシテ、百姓・町人等ヲ輕ンズルニヨリ、日本国ト条約ノ事ヲ行フニ取テモ、其害甚多シ、今ヨリ後此事ヲ止メン事ヲ、外国ノ名代人ヨリ日本人ニ説進メシ様子ナリ、サテ其席ニ列ナリシ者ハ、ミニストル并ニ公使館ノ書記官・助役ハ勿論、其外諸軍艦ノ甲比丹、大砲船ノリウテナントアトミラーノ書記官、及ヒフラグリウテナントナリ、然ルニ大坂在留ノ英国コンシユル助役ハ除

カレタリ、是レ瑣細ノ事ノ様ナレトモ、向後コンシユルノ權威ニサワル事少ナカラス、予思フニコンシユル助役ハコンマンドル(Commander)ト同位ナリ、故ニアドミラールノ書記官ハ其席ニ列リテ、コンシユル助役ハ列ナラサルノ理一向解シガタシ、且大坂ノ如キ大切ナル港ノ英國コンシユル助役モ、

皇帝ニ近寄ルヘキ身分ノ者ニ非サルカト、日本人ニ思ハスルモ甚宜シカラサルコトナリ、商人ハ外国ニテモ、日本国ノ如ク賤シキ身分柄ノ者ト、日本人ハ必ス考フヘシ、

訳者曰、コンシユル并ニコンシユル助役モ皆商人ノ中ナリ、故ニ本文ニカクイフナリ、之ト似寄リタル間違神戸ニテモアリタリ、兵庫地方ノ奉行ハ王子ナリ、故ニ英国ノコンシユルハ、非常ノ時ハ奉行ト応接ヲ許サレサルニアラサレトモ、常ハ神戸ニ於テ其下奉行ノ伊東ト応接スルコトナリ、日本人ハ其身分ニ拘ハラズ、奉行ノ直談ヲ許サル、ニ、英国ノコンシユルニハ許サズ、何事モ下奉行ヲ経テ奉行ニ通スルコトナリ、

(Arbuthnot)

アヒシニヤ戦争ハ幸ニテヲドリユス死シ、且捕虜釈

(Theobald)

サレタルニヨリテ止ミシトイフ、其委細ノ事ハ未タ  
知レス、

箱館ヨリノ新聞ニ、四月八日ノ夜箱館外国人ノ居留地  
不残焼失セリ、是ハ多分放火賊ノ所業ナリトイフ、

鈴木唯一郎

三七六ノ二  
(前略)

此節横濱碇泊ノ英国軍艦ハ、当月第十五日<sup>我四月三日</sup>ニ大坂港  
ヘ集ルヘシト命セラレタリ、依之第五月九日<sup>我四月十七日</sup>ロドネ  
イ船出帆、明日オセーン船出帆ス、引統英国軍艦ナヲ数  
艘抜錨スヘシ、但シミニストルパークス君ハ、サラミス<sup>Osama</sup>  
ト云軍艦ヘノリ組ム積ナリ、併シ此度ノコトハ至極平穩  
ナル事ニシテ、多分本国ヨリ、ミニストル朝廷ヘ拜礼ス  
ヘシトノ命アリシ故ナルヘシ、

### 三七七 春嶽私記

○春嶽私記ニ云、閏四月十日於官代御内々大御評議有之、  
関東之御処置御決定之由、又云、今朝御宗家之御所分御  
内評之節、公ニハ御統柄之御儀故、御明弁被遊兼候御場

合モ有之二付、御退出之上猶又岩倉殿迄御建白左之通、

慶永以厚顔拭血涙、誠惶頓首頓首謹テ奉呈上岩倉閣下  
候、抑今日於小御所、御相談被為在候徳川家御処置之  
大事件、其支族慶永ニ至ル迄被降 御下問候儀、公平  
至当之御儀、敬服感泣之仕合ニ御座候、別テ公之尊慮  
不首、徳川氏興廢 皇国ノ大幸、上安

宸襟、下蒼生安堵ニ至リ、干戈相休、干羽兩階ニ舞ス  
ル之御処置ニテ、有苗必至リ候儀ハ乍憚奉感服候、乍  
去方今総裁局御用相勤、不包心底奉言上候筈ニ候得共、  
何分支族之身故、恐懼罷在、公之御盛意至当之儀ニ  
モ難申上、只胸中憂悶、涙灑臆而已ニ御座候、扨家領  
百十万石ニテ、城地如旧候得ハ、徳川之主従弥飽 聖  
恩

天威感戴、麾下之鼎沸忽鎮定可致ハ、是亦不トシテ可  
知儀ニ御座候、其上ニモ万一暴挙等有之候ハ、天人  
所共惡、徳川之運命已ニ究シ、其血食ヲ被為絶、天下  
諸侯ヲシテ討伐セシムトモ、決テ異議有之間敷、其節コ  
ソ大義滅親、先支族之諸侯ヲシテ討シムトモ必討伐可  
仕候、是宋祖遇越王錢俶之策ト同轍ニ可有之候、左ナ  
クシテ只今家領百拾万石之食邑ニシテ、地所ヲ駿城ニ

被為移候儀ハ、却テ 朝廷求鼎沸、兵革御招之姿ニ可有之、其先祖家康駿城ニ退隱迄ニテ、旧領ニモ無之、墳墓之地トモ難申、江戸ハ祖先以來之墓所モ有之、二百有余年之居城ニ候ヘハ、容易ニ不忍退去情ヨリシテ、物議紛興可仕哉モ難計、其上再天下之兵ヲ被為動候様ニ立至可申、全国之困弊相極リ、乍恐奉恨

朝廷可申欵、慶永窃ニ胸中察スル処、即今諸侯疲弊相極リ、天下割拠之形勢ヲ孕ミ、極々御大事之儀ト為 皇國ハ勿論、為 皇帝陛下臣之所憂、日夜コ、ニ御座候、且又城地假令駿ニ被為移、徳川主從無異議御請申上、以帥宮江戸之鎮台トシ、副総督迄被置候テモ、広大之江戸、四里四方ハ大凡ニテ、只今ハ中々夫所ニ無之、人民幾千万之衆多、是徳川若干之家臣ニテ、夫々統轄仕候テスラ、容易ニ行届兼候処、況ヤ 帥宮・副督並參謀已下百人ニ過キササルヘシ、如此寡少之人員ニテ管轄服 王化候儀、万々無覚束、殊ニ横濱並江戸モ外国人罷越居候事故、其制馭モ難被及出来、却テ 朝廷之御失体ト乍恐奉憂苦、邪推申上候得ハ、徳川ニ於テ是迄ヨリハ減祿仕候事故、若干之江戸持居候ヨリハ、駿城之方遙ニ有難ク、立派ニ市尹ヲ始、夫々之管

轄之小吏ヲ解

朝廷へ御引渡申上候ハ、鼎沸之裏面ニシテ、今日ヨリ万民生活之業、如何御維持被遊候哉ニ奉存候、只座論之御決定ニテハ兎モ角モ今後治平無覚束、何分 公之尊慮之通候ハ、會賊モ有苗格之古例之如ク、愛度可鎮定候、慶永兼テ随御懇命、不顧忌諱 公へ奉恐疏候、諸卿同座之折ハ何分可否難申上、愚意当惑、奉仰御照察候、且支族之小身決テ徳川鼻負仕候ニアラス、徳川之興廢ハ差置、為 皇國ト為

皇帝陛下、王政千古ニワタリ、史冊ニ載セ不被為恥候テ、聖徳海内海外ニ光被候様有之度、朝暮為 朝廷所至願ニ候、敢犯尊命奉言上候、誠恐誠惶頓首頓首百拜死罪死罪、

閏四月十日

慶永

私言窃ニ聞ク今日之朝議、領地ハ百万石ニ決スト雖トモ、江城ノ移否ハ彼土ノ形勢ニヨツテ未決ノ由、三條卿明日下坂、攝海ヨリ汽艦ニ乗シ、東下ノ由、○今日之議、徳大・廣澤・後藤ハ三條ニ同シ、万里・小松・西郷・大久保・吉井ハ岩倉ニ同ス、三條ハ徳川氏ヲシテ祿位大名ノ上座タラシムルヲ最上トシ、

岩倉ハ百五十万石ヨリ二百万石ヲ上トスルノ由、過日ノ封書、一万石ヨリ三十万石マテノ建議八分ニテ、二百万石唯一人ナリト云、○徳川氏ハ百万石ノ小祿ヲ与へ、僅ニ加州ノ上座トシ、旗下ノ士ハ帰順ノ先後遅速ヲ三等ニ分チ、迅速ハ本領安堵、次ハ本領三分ノ一ヲ減シ、遅緩ハ半祿トシ、共ニ朝臣トナストキハ、徳川氏小祿ト雖トモ、従類扶助ヲ得テ、凍餒ニ至ルマシト云ヘル評議モアリシトソ、

### 三七八 大久保利通建白書

徳川御処分之儀、実ニ御大事ニ候処、畢竟スルトコロ移封之否ニ有之、移不移トハ

朝廷断然之御決議ニ可有之奉存候、可移之論ニ候得は、彼必ス叛スルノ

御着眼ヲ以、今一層ノ御威力ヲ被為備、一言ノ歎願トイヘトモ御採用無之、屹度御推シ詰メ、号令ニ背キ候得は、直ニ干戈ヲ用、仮令

皇国内之大乱ニ及候トモ、御願念不被為在之御根本確定不致候ては、相濟不申候、初メ大総督宮御進軍相成

候ハ、是非賊城ヲ屠ラントノ御趣意ナルヘク候得ハ、今日ニ至テ追討ノ目的

御挫ケ可相成筋ニ無御座候間、

東京ノ説ヲ以、駿府江移封ト、判然

御断決被為在候儀、条理ニおひての当ト奉存候、左之通奉願候、

一 和漢古今遠境ニ師ヲ出シ、敵情ニ通セスシテ眼前ノ無事ニ因循シ、

〔廟堂ハ其実ナクシテ、不決之決ヲ以闖外ノ將師ニ任シ、大敗ヲ取り、禍乱ヲ招、社稷ヲ亡シ候類不少候間、厚ク現地ノ情実ヲ御詳知有之、決て在外將師ノ任ト度外ニ不被為置、今日ヨリ

朝廷上彈丸矢石ノ内ヲ被為蹈候

思食相立、

鳳輦ハ何時ニても被為促、軍兵ハ只今御繰出シ、進テ不顧後、退て不恐前、四方ノ御兵備正整嚴肅、御充実肝要至急ニ可有御座奉存候、

一 御処分之儀

御達ニ付ては、不容易御大事ニ候間、総裁ノ内御一卿急ニ御下向、嚴然



勅命ヲ被伝度奉存候、

〔付箋〕

本文総裁御一卿御下向之儀、第一静寛院宮御迎之 御奉命

〔和宮親子内親王〕

可被為在儀と奉存候、

三七九 福岡藤次建言

間、随從被 仰付候様奉伏願候、頓首、

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

一前条御治定ノ上ハ、殊更厚鉄船御入手ノ儀、大急務ト

奉存候間、早々夜ヲ日ニ継御金策有之、御談判ノ上是

非御入手、海軍ヲ備江戸海江碇泊為致置、万一

敵命違背ノ節、則賊ノ軍艦四艘ヲ奪、厚鉄ハ勿論、回

天・開陽有用ノ軍艦攝海江相廻シ、軍兵ヲ江戸江運送

海陸一挙シテ賊ヲ碎クヘシ、且亦軍艦ヲ分チ、越後江

振向ケ、奥羽追伐ノ官軍ヲ助ケ、大ニ進撃スヘシ、

右之大綱御廟算相立、其実御履行被為在候ハ、願

クハ名分ヲ明ラカニシ、

御英断被遊度奉至禱候、若寸毫も御猶予ノ

思食ニ候ハ、不移ノ論ニ一定シ、其俟江城ヲ与ユ

ルノ外無御座儀と奉存候、謹白、

閏四月

大久保一蔵

追白

総裁御一卿御下向ニ付ては、不肖之私ニ候得共、誠

ニ

皇国ノ御一事候得ハ、一死ヲ以驚鈍ヲ奉尽度奉存候

一御大事多端就中江戸御処置之儀、実ニ不容易御事ト奉

存候、過日モ御下問ニ付、書取ヲ以言上仕候通り之次

第、何分今以同様ニ相考ヘ申候、元来武門ヲ以大都幕

府ヲ構ヘ、天下之政ヲ執居候ハ、宇内之形勢氣運ヲ謀

リ、政權ヲ

朝廷ニ奉還シ、正道ニ帰シ候ヘトモ、慶喜ニオイテ其

実効不相立モノ有之、欺妄之罪ヲ以征伐被

仰付、遂ニ伏罪ニ相至リ、寛典ヲ以、徳川血統之者家

名相統被 仰付候儀ニ御座候処、此上若モ徳川氏相統、

其俟江戸城ヘ御闖キト申筋有之候テハ、万々不可然、

今後江戸ハ前來僭上ニテ、東都ト称ヘ居候ハ、真ニ東

都ト相立可申、則

朝廷ヨリ鎮台ヲ置キ、官吏ヲ以治ヲ為スヘキ之次第ニ

御座候、且鎮台官吏ヲ以治ヲ為サヘモ、足利家鎌倉ノ如キ弊ヲ生セン歟ト申ノ恐レアリ、況ヤ徳川氏ヘ其俛御委任ニ於テ、尤不可然ト奉存候、

一情実ニ於テ、徳川氏其俛御閣ニ不相成テハ、治ヲ為シカタキ次第モ可有之哉、然トモ東都之儀可相立場処ヲ、鎮台官吏ニテ治ヲ為ス不能ト申様ニテハ、今後

朝廷御政令御威權如何哉ト奉存候、且追々ハ乍恐

天皇御親臨、東都行在トモ可被為成訳ニ御座候、於徳

川氏ハ旧業ノ所在ヲ以、駿府・参・遠ノ間ニテ、縦令

石高百万、五十万、三十万ニテモ、旗下等人民撫育ノ

次第相立候様被 仰付可然、唯江戸都上ヲ保子候様被

仰付候テハ、何分一出不可遏之勢ニ相成リ可申ト奉存

候、

一於

朝廷ハ、今度御決定ニモ相成居候官制之次第、何分急々御施行有之度、尤一時ニ首尾御施ニ不相成トモ、先以議定・参与ニ職ノミ御定置ニ相成、是迄之議定職・参与職ヲ被免、局々之官ノミ当分其俛ニ御閣キニテモ可然奉存候、惣テ施行致候筋、必シモ首尾巨細共ニ挙ケ不申トモ、基本ト相立候者ヲ定メ候ハ、夫レヨリ

御大事多端、又亦決スル所可有之、則江戸御処置ニ於テモ、当時ニ職本体ヲ以原註、或ハ議定一人、其地ニ臨ミ、参子一人御差立可然歟治ヲ為ス之次第相立可申儀ト奉存候、

右等御処置之上ニ於テ、未発之筋御秘密之議モ可有之奉存候ニ付、密封書言上仕候、誠恐誠惶頓首々々、

閏四月十二日

福岡藤次

弁事局叢書

三八〇 参与木戸孝允ヲ長崎ニ遣シテ、浦上村ノ

キリスト教徒ヲ処分セシム

閏四月六日

木戸孝允天主教処分ヲ命セラル、書

○参与木戸孝允ヲ長崎ニ遣シテ、天主教徒ヲ処分ス、尋テ予メ加賀・薩摩以下ノ卅四藩ニ命シテ、之ヲ保管セシム、孝允長崎ニ抵リ、裁判所総督澤宣嘉ト謀リ、先其魁首百余人ヲ逮捕シ、之ヲ長門・福山・津和野三藩ニ分付ス、

三八〇ノ一

木戸準一郎

長崎表切支丹宗徒御処置之儀、不容易事件ニ付、取扱

被

仰付候間、早々発程尽力可有之候事、

木戸孝允履歴書

三八〇ノ一

十七日諸藩へ達書

切支丹宗之儀、年来元幕府ニ於テモ堅ク禁止候得共、  
旧染余燼絶切不申、近来長崎近傍浦上村之住民、窃ニ  
其教ヲ信仰之者、追々蔓延イタシ候付、今般広ク

御評議被為在候上、格別之

御仁旨ヲ以テ、御処置御決定被遊候、依之別紙之通、

御預ケ被

仰付候事、

一 右宗門元来

御国禁不容易事ニ付、御預之上ハ人事ヲ尽シ、懇切ニ  
教諭イタシ、良民ニ立戻リ候様厚ク可取扱候、若シ悔  
悟不仕者ハ、不得止可被処嚴刑候間、此趣相心得、改  
心之目途不相立者ハ可届出事、

一 改心之廉相立候迄ハ、住人トハ屹度絶交之事、

一 開発地土工・金工或ハ石炭掘其外夫役等、勝手ニ可召  
使事、

一 山村ニ住居可為致候事、

一 当日ヨリ先ツ三ヶ年之間、一人ニ付老人扶持宛、其藩  
々へ被下候事、  
但長崎表ヨリ追々差送り候間、支度次第早々到着所  
へ、其藩々ヨリ人数差向、受取可申事、

右之通被

仰出候間、此段申達候事、

閏四月

別紙

大和国拾五万五千貳百八拾八石

柳澤 甲斐守 凡百人

伊勢国三拾貳万三千九百五拾石

藤堂 和泉守 凡百五拾人

尾張国六拾壹万五千五百石

徳川 元千代 凡貳百五拾人

近江国二拾五万石

井伊 掃部頭 凡百三拾人

美濃国大垣拾万石

戸田 采女正 凡八拾人

若狭国拾万三千五百五拾八石

酒井若狹守(忠氏、小浜藩主)

凡八拾人

越前国福井三拾貳万石

松平越前守(茂昭、兵庫藩)

凡百五拾人

丹波国篠山六万石

青山左京大夫(忠敏)

凡五拾人

同国亀山五万石

松平圖書頭(信正、京都府)

凡五拾人

丹後国宮津七万石

本莊伯耆守(宗武)

凡五拾人

紀伊国五拾五万五千石

紀伊中納言(茂承)

凡貳百五拾人

三河国吉田七万石

大河内刑部大輔(信吉)

凡五拾人

加賀国百貳万貳千七百石

前田幸相(綱聖)

凡貳百五拾人

右大坂迄、但藏屋敷へ相渡

因幡国三拾貳万五千石

池田因幡守(慶徳)

凡百五拾人

出雲国拾八万六千石

松平出羽守(定安、松江藩主)

凡百五拾人

石見国津和野四万三千石

龜井隱岐守(茲監)

凡三拾人

備前国三拾壹万五千貳百石

池田備前守(章政、岡山藩主)

凡百五拾人

安藝国四拾貳万六千石

淺野安藝守(長則)

凡百五拾人

右尾之道迄(広島県)

美作国津山拾万石(岡山県)

松平三河守(慶徳)

凡八拾人

備後国福山拾壹万石(広島県)

阿部主計頭(正方)

凡八拾人

右鞆津迄(広島県)

阿波国貳拾五万七千九百石

蜂須賀阿波守(茂熊)

凡百三拾人

讃岐国高松拾貳万石

松平讃岐守(頼徳)

凡百人

右丸龜迄(香川県)

伊豫国宇和島拾万石

伊達遠江守(宗徳)

凡八拾人

土佐国貳拾四万貳千石

山内土佐守 (豊前)  
右三ツ濱迄 (愛媛真松山市)  
凡百三拾人

豊後国岡七万四千四百四拾石

中川修理大夫 (久昭)  
凡五拾人

日向国延岡七万石

内藤備後守 (政孝)  
凡五拾人

右鶴崎迄 (大分県)

長門国三拾六万九千石

毛利大膳大夫 (敬親)  
凡百五拾人

右下之關迄

豊前国中津拾万石

奥平大膳大夫 (昌胤)  
凡八拾人

右中津迄

豊前国小倉拾五万石

小笠原豊千代丸 (忠光)  
凡五拾人

右小倉迄

筑前国五拾式万石

黒田美濃守 (長博)  
凡百五拾人

右博多迄

筑後国久留米式拾壹万石

有馬中務大輔 (慶應)  
凡百三拾人

同国柳川拾壹万九千六百石

立花飛驒守 (鑑寛)  
凡八拾人

右若津迄 (福岡県大川也)

薩摩国七拾七万八百合石

島津修理大夫 (忠義)  
凡式百五拾人

右鹿兒島迄

肥後国五拾四万石

細川越中守 (慶應)  
凡百五拾人

右高橋迄 (熊本県)

三拾四家 人数凡四千拾人

官中日記・徳川茂承以下各家家記

三八〇ノ三

附申請書二条

一於尾之道邪教人別請取之儀、同所ニテハ何レノ御役方

ヨリ御引渡相成候哉、

一御引渡相成候上、差掛リ候事件出来仕候節ハ、弊藩進

退ニ御任セ可被下候哉、

一警護人数之多少ハ、弊藩見込ヲ以テ差出不苦候哉、

一護送之道筋、海陸ハ便利ニ從候テ不苦候哉、

右昨日粗御達ヲ以テ奉窺置候得共、国元ニ於テ混雜之儀無之様相運申度、為念今一応以書取奉窺候、急ニ御差図奉願候、

因幡中将内

後四月二十日

河瀬万吉郎

三八〇ノ四  
批紙

第一条 長崎裁判所役人共ヨリ引渡可相成候事、

第二条 窺之通、

第三条 同上、

第四条 同上、

池田輝知家記

三八〇ノ五  
覚

一今般浦上村ノ住民諸藩へ御預ニ相成り候ニ付テハ、

長崎表ヨリ差送御座候頃合ノ事、

一山村ニ住居云々ト御座候ニ付テハ、格別嚴重締リ附居

不申共宜哉、夫等如何相心得可申哉ノ事、

右之通奉伺候、以上、

安藝少将内

閏四月廿二日

熊谷兵衛

三八〇ノ六  
二十五日批紙

第一条 長崎表ヨリ到着ノ頃合ハ難相分候得共、追々

差送候間、受取ノ場所へ早々手数致置可申候事、

第二条 山村ニ住居致候共、格別嚴重取締致候儀ハ勿

論、村民等立交候様ノ儀、決テ有之間敷、改悟ノ模

様不相分迄ハ、屹度心附可申候事、

行政官記

三八〇ノ七

木戸孝允手記ニ云、閏四月十二日、大坂乗艦、山口ニ

立寄り、留マルコト数十日、

五月十一日達崎陽、

十三日午后西役所ニ出、澤公〔實嘉〕・大村候並佐々木三三四郎〔高行〕・

野村宗七〔盛秀〕・楠本平之允〔正徳〕・井上聞多〔忠徳〕及余出席、耶蘇御処

置之御會議アリ、京都御沙汰之趣ト、爰元総督始諸有

志之見込ト、稍齟齬ナル所アリ、移時テ不相決、余窃

ニ思ニ、畢竟将来之為ニ見込有之事ニ候得ハ、仮令今

日ヲ猶予スルトモ、敢テ不都合無之、然シ唯狐疑ニテ

及遷延候テハ不濟事ニ付、強テ前途之為ナラン事ハ、

欲為聞得、逐条理相尋候辺ニテ過半相決シ、未纒ニ不決ノモノアリ、依テ今日ヨリ明日マテ、各熟按致シ候テ可然ト考へ、総督殿へ言上イタシ、一統退出ス、

十四日朝、製造所・造船所ニ至ル、夕西役所ニ出、昨日未定ノ議ヲ決ス、漸邪徒巨魁之連數十人ヲ津和野へ相預ケ、其余可移モノハ他日蒸氣艦ヲ当港へ廻シ、期ヲ刻シテ捕縛センコトヲ決ス、依テ巨魁之徒、吟味ヲ其筋へ被申付タリ、

廿日朝、西役所ニ出、総督ニ謁シ、三參謀ニ逢、耶蘇一条之御処置ヲ論シ、大略相決ス、明日ヲ期シテ着手ス、前途ニ涉ル処之外国事件、当地諸會計等之事ヲ談ス、

廿一日十二字、西役所ニ出、耶蘇党之者今日漸呼出ス、彼等昨日已來巨魁等之居宅ニ集会、出不出之事ヲ相論シ、終ニ出スルニ決シ、尽応命六時前後一統申渡、尽加州蒸氣船ニ乗セ込、明曉ヲ期シ揚碇之手筈定メタリ、加州蒸氣ヲ以運送スル事件、極密十四日ニ決定シ、用意申付タリ、此度初発其巨魁之命分而已先処置ニ及フ、人数百十四人、分テ長州へ六十六人、津和野へ二十八人、福山へ二十人之分配ナリ、

廿三日上艦揚碇、廿九日大坂着、六月三日入京、

三八〇ノ八  
先達テ

御沙汰相成候邪宗門人民、此度先六拾六人、加州蒸氣船ニテ長門国赤間關迄連届相成候付、萩地島々へ分配差置、精々加説論候手組ニ御座候、此段御届申上候、以上、

長門宰相内

六月十五日

寺内暢三

弁事

御役所

行政官記

三八〇ノ九  
覚

先般御沙汰ニ相成候切支丹信仰之者、五月廿一日長崎表出立、同廿五日藝州尾之道迄來着仕候由、廣島藩ヨリ当藩へ受取人急速差出候様、尤夫迄之所ハ彼方ニ預之趣、六月二日飛脚ヲ以申來候ニ付、兼テ受取人申付置候者共、翌三日国許出立、同月十日於尾之道異宗之者請取、直ニ同所ヨリ乗船、藝州廿日市駅へ上陸、同

十七日在所表へ無滞着仕候、人名左ニ、

浦上村山里本原郷

字

辻

仙右衛門

外廿七人

右之段御届申上候様申付越候、以上、

津和野中将内

山田簡司

弁事

御役所

行政官記  
亀井茲監家記

原書人ヲ歴挙ス、今之ヲ略ス、

三八〇ノ一〇

阿部正桓家記ニ云、明治元辰年五月原註日不審、肥前国長崎

近傍浦上村異宗徒之者共、御預之御達有之、同月廿六

日備後鞆津へ着船、於同所受取、同月廿七日福山城下

へ到着、同所護穀庵へ仮住居、人員廿人、

三八〇ノ一一

六月十九日諸藩へ再達書

長崎近傍浦上村住民切支丹宗徒之者、先達テ諸藩へ御預ケ、引渡方被

仰出候処、彼地之都合ニ寄、今一応

御沙汰有之候迄、受取人出張ニ不及候事、

六月

官中日記・徳川茂承以下各家家記

官中日記ニ、長州・津和野・福山三藩ハ除之トアリ、

按スルニ二年十月ニ至リ、余党ヲ逮シテ、加賀・薩

摩・尾張・紀伊・福岡・安藝・因幡・津・備前・阿

波・土佐・松江・郡山・姫路・松山・高松四九・大聖寺・

富山十八藩ニ分付ス、前後通計三千四百三十七人ナ

リ、

三八〇ノ一二

附録三条

於長崎千八百六十八年第七月十三日我五月二十四日

一 貴国許多ノ耶蘇宗信者共召捕ラレ、日本蒸氣船ヲ以長

崎ヨリ送出サレ候旨、長崎ニ住スル各国岡士ナル拙者

共承及候段、尊下へ知告致候、

一 第五月十二日並第六月四日附ニテ、尊下へ宛差出候書

翰ニテ、拙者共彼ノ下賤ノ耶蘇宗信者共ノ患苦ヲ救助



致候義、尊下御了解有之候義ト存候、就テハ彼等ノ送  
ラレシ場所、將彼等尚イマタ浦上ヘ残居候モノ共之所  
置ニ付、如何ナル日本政府ノ御主意ニ候哉、拙者共ヘ  
告ケ賜ハンコトヲ希望致候、

一 拙者共ノ右ヲ查問致候思意ハ、此程モ告知致置候通、  
国内ノ事務ニ関係イタシ候筋ハ無之候得共、彼等ハ只  
耶蘇宗門ヲ信仰イタシ候而已ニ候得ハ、如斯無罪ノ者  
ヘ対シ、仁愛ニ悖リシ無理之御処置有之候テハ、必日  
本政府ノ名節ヲ汚シ、宇内ノ礼儀アル国々ノ謗リヲ不  
免事ヲ只和親懇篤ノ廉ヲ以テ、拙者共尊下ヘ指示イタ  
シ候而已ニ有之候、依之彼ノ貴国耶蘇宗信者共之義ニ  
付、尊下ニ於テ至当ノ御所置、尚御勤考有之度、拙者  
共希望致候、拜具謹言、

葡萄牙岡士

セ・ロウレイロ

亜米利加合衆国岡士

ウイल्ली・ピーメン・ゴム

佛蘭西岡士

トツブルユ・ガイマンズ

丁抹兼白耳義岡士

エツチ・シキフ

瑞西兼和蘭岡士

エフ・ピ・トンブリング

李漏士兼貌利太尼亞岡士

マルキユス・フロウルス

九州鎮撫使総督尊下

長崎県記

三八〇ノ一三

異教信仰之日本人一件ニ付、各国岡士ヘ御返簡下  
案

千八百六十八年第七月十三日附書翰令披見候、耶蘇教  
信仰之日本小民ヲ、蒸氣船ヲ以テ、他所ヘ差送候儀ハ  
相違無之、其次第八元來彼等国律ヲ犯シ候故、京師之  
命令ヲ得、毛利宰相・龜井隱岐守・阿部主計頭ヘ引渡  
シ、相預ケ候、尤其余之者共仕置之儀ハ、是亦議決之  
上、京師ヨリ下知可有之候間、必ス我政府ニ於テ、寧  
ナキ国民ヲ不仁之所置ニ行ヒ候様之筋、聊無之候、併  
シ和親懇篤之廉ヲ以被申越候段ハ悉ク存候得共、右之  
仕合ニ付、各被致氷解度、此段及回答候、謹言、

慶應四辰年五月廿八日

九州鎮撫使兼長崎裁判所総督

之命ニ因テ

楠本平之允

野村宗七

佐々木三四郎

各国岡士宛

長崎県記

三八〇ノ一四

長崎ニアル佛蘭西コンシユル館

役人レツク君へ

前紙日本在留宗法ノ首官モンセンヨールトベツテメー

ジョンへ、余ヨリ遣ワセシ書簡之写ヲ此ニ封シ入候処、

差送ル之書簡アリ、

耶蘇教ヲ奉シ、国法ヲ破リシトイフヲ以テ入牢セシ日

本人ハ、何レモ謹呵ヲ請エルコトナク、總テ赦免セラ

ル、様処置アリシニヨリ、以来日本人ヲ促シ、国法ヲ

破リ犯サシムル類之諸事ハ、總テ差止候様、余ヨリ申

越セシ逆、同人へ申入レ遣サルヘシ、就テハ以来右宗

旨僕社中ノ人、誰ナリトモ日々教法ヲ拈メン為メ、浦

上ハ勿論、其他之場所へ趣クコト出来セサルヘシ、其

理如何トナレハ、当今日本南方之人心騒起之際ニアタ

リ、カトリック宗之僕徒、右様之日本人中へ交加スル

ニ於テハ、多クハ量ルヘカラサル之危難ヲ引起ス之大

患有、公平明敏之処置及ヒ余等カ宗門之裨益ハ、右様

之難事起ラサル様、極メテ尽力スルニ有ヘシ、故ニ其

許ニハ役務上之事ヲ旨トシ、余カ命令並ニ日本ト取結

ヒシ条約之趣意、ソノ文面通り取計フ様注意セラルヘ

シ、

長崎ニアル佛蘭西コンシユル方役人へ、今日差立テシ

本書ト聊ニ相違ナシ、

日本在留佛蘭西全権

レオン・ロセス

長崎県記

本条往々誤脱、読ミ難キモノアリ、然レトモ他書ノ

参考スヘキナキヲ以テ、暫ク原文ニ従フ、

三八一 毛利家記

三八〇ノ一

○毛利家記ニ云、明治元年閏四月(廿九)、甲鉄艦長門藩

へ御預ケニ付、為乗組中島四郎等大坂迄罷登候処、江

戸へ海路良便無之、漸六月ニ至リ江戸罷登候処、甲鉄艦ハ横濱碇泊罷在、亜墨利加之旗ヲ引、局外中立ト唱、朝廷へ差出不申、其后奥羽平定ニ付、引渡之事ニ相決候ハ、明治二年正月ニ有之、二月四郎等同艦へ乗組被仰付候、

三八二

甲鉄艦收領顛末略ニ云、十月東北ノ諸藩降伏、大総督宮鎮定ヲ奏セラル、東国ハ如斯平定ニ及ヒシカトモ、徳川家ノ脱艦箱館ニ迫リ、廿五日同府ノ知事清水谷侍從以下ノ官員、青森ニ避ク、脱艦等暴威ヲ奮テ、王化ヲ妨ケントス、海路征討ニハ軍艦必要ナレハ、今幸ニ奥羽平定ニ至リシヲ、各国公使ニ布達シ、中立ノ為メニ交付延引ニ及ヒシ甲鉄艦ヲ收領シ、征討ノ用ニ供セラルヘシト、同廿六日先書翰ヲ各国公使・領事等ニ達ス、神奈川府ニ於テモ外国官ヨリノ照会ヲ承允シ、米国公使ニ面接シテ、只管政府ノ情状ヲ縷述シ、甲鉄艦ノ交付ヲ促スト雖、公使ハ万国公法ヲ主張シ、局外中立ハ各国政府ノ固守スル所、各国ノ同僚ニ商議ヲ遂、共ニ解停スルニ至ラサレハ、我米國独リ其成規ヲ破ル能ハスト、一円承諾ノ体ナラス、今ハ談判弁論ノ方法

尽キ、何レニモ各国公使ヲ説キ、局外中立ヲ廢止セシメザレバ熟談ノ見認ナシト、暫ク米国公使ニ督促ヲ猶予シ、局外中立ヲ解シムヘシト、十一月四日、外国官知事伊達中納言ヨリ、更ニ書翰ヲ各国公使ニ送致ス、如此種々計策ヲ尽シ、局外中立ヲ解カシメントセラルレトモ、各国公使更ニ肯セス、徒二月日ヲ送ル、然ルニ賊山城ヲ陥レ、箱館地方悉ク賊ニ陥ル等ノ注進日々ニ達シ、討伐ヲ急カルレトモ、海軍必要ノ甲鉄船今ニ收領ニ至ラス、因循スルコソ安カラネ、箱館ノ事件ハ燒眉ノ急ナリト廷議反覆、所詮尋常ノ応接ニテ談判全フスヘキニアラネハ、輔相横濱ニ出張セラレ、各国公使ニ直接彼レヲ説示アラハ、承諾セザルコトアルヘカラスト、十二月三日岩倉輔相(具徳)・東久世副知官事着濱、即日各国公使ト原註、此處接ノ筆記ナケレハ、應接ス談判ノ顛末ヲ詳ニスルニ由ナシ、同日、漸ク閏四月以來請求ノ局外中立廢止一件、昨日ノ面晤熟談整ヒ、本日輔相ヨリ各国公使へ書翰ヲ布達ス、又云、漸ク中立ノ応接先各国公使承諾ニ至ルト雖、全ク解停スルニ至ラサルハ、是奥羽諸藩降伏スレトモ、未タ御処置ナキヲ疑フ所アリテナルベシ、輔相及東久世中将帰京、横濱ノ事情ヲ奏セラル、然ルニ先是奥羽・

北越叛藩処置ノ廷議決シ、来ル十二月八日、還幸御  
發輦ノ御治定ナルヲ以テ、其以前奥羽降伏ノ各藩御処  
置アルヘシト、同七日詔シテ奥羽・北越ノ処分ヲ決メ  
ラル、同八日主上東京ヲ發シ、西京ニ還幸アラセラル、  
是等ノ繁雜ニテ三四日ヲ經過シ、奥羽ノ御処置ヲ各国  
公使ニ報告セラル、暇ナシ、同十一日各国公使ヨリ、  
去ル四日横濱ニ於テ応接ノ後、輔相ヨリ送致アリシ書  
翰ノ回答来ル、同十二日取敢ス東久世中将ヨリ叛藩処  
分ノ宣告ヲ附シ、各国公使ニ達スト雖トモ、未タ水解  
セサルニヤ、中立解停ノ告知モナシ、然ルニ箱館賊討  
伐ハ燒眉ノ急、瞬間モ猶予スヘキニ非ズト、再度岩倉  
輔相・東久世中将横濱ニ至リ、先英國公使ヲ説諭シ、  
同人ヲシテ各国公使ニ説カシメハ、必至急ヲ要スル便  
利ナルベシト廷議決シ、同十五日第二時、輔相・中将・  
知其事・英國公使会同、奥羽・北越ノ各藩、特旨ヲ以  
テ寛典ヲ加ヘラレ、總テ内國平定ノ事状ハ、去十二日  
報告セシ如シ、然レハ最早國中騷擾ノ地ナク、僅ニ箱  
館屯在ノ脱士等カ暴行アルノミ、是ハ一小地ニ僅ノ人  
員恣ナル挙動アリトモ、官軍ヲ發シ、討伐アラバ其鎮  
定ハ近キニアリ、然レハ予メ依頼ニ及フ所ノ局外中立

ヲ解カレン事ヲ冀望ス、願クハ速ニ解停ノ布告アラン  
コトヲト、輔相言ヲ尽シテ説示セラル、此時其言ヲ英  
國公使モ大ニ賛成ス、此ニ於テ佛・米・蘭・伊・李ノ  
五國公使モ承諾シ、不日解停ヲ布告シ、其旨報知スヘ  
シト約ス、

其後解停布告ノ報知ヲ待ツト雖モ、月迫ニ至レトモ、  
何ノ動靜ナク、政府ハ其報ナキニ困却シ、衆議紛紜ナ  
リ、然ルニ各国公使等、其後解停ヲ布告センコトヲ議  
ス、英國公使各公使ニ説ク所アリテ、頓ニ決定シ、同  
二十八日中立解停ヲ布告シ、各国公使ヨリ報知ノ書翰  
ヲ来タス、

是時米國公使ヨリ報告中ニ、甲鉄艦交付ノ商議ニ及フ  
ヘシトノ文ヲ書加ヘタルヲ以テ、明治二年己巳正月六  
日、東久世中将米國公使館ニ至リ、甲鉄艦收領ノ応接  
ニ及ヒシナリ、此應接ヲ始め、甲鉄船全ク收領ノ事状  
ヲ記録セシモノ(アラカ)サレハ、其顛末ヲ詳ニスルニ由ナ  
シ、

又云、抑此事件ハ甲鉄艦收領ヲ急クノ余、各国公使ニ  
局外中立ヲ廢止セシメント、応接數回弁論反覆説明ア  
レトモ、彼レハ万国公法ヲ主張シ、中立不偏ヲ解カス、

彼ヨリ解停スルハ、箱館ノ賊乱、全ク鎮定ノ日ニ至ラサリセハ解クヘカラスト、輔相英國公使ニ説キ、迅速廢止承諾ニ至ルノ愆憑ヲ依頼ニ、公使承諾、大ニ賛成シテ、遂ニ箱館騷擾ノ平定ヲ待タス廢止ノ布告ニ施行セシハ、全ク彼ノ公使ノ厚意ノ致ス所ナリ、

又云、巳年六月十六日、濱殿松御茶屋ニ英國公使（實名）パークスヲ始、外四名ヲ招請セラレ、三條右大臣・岩倉大納言・東久世中将・伊達中納言・大隈四位・町田五位参向、饗応アリ、

三八一ノ三

木戸孝允手記摘認ニ云、十二月十二日十二時、サト（Gard）、ミットホール来ル、局外中立之一条ニ付、英公使ヨリ

岩相公へ答フル処ノ書面之草稿ヲ示ス、此間ニ察知、其旨趣ヲ了得スル事アリ、

同十三日、局外中立ノ一条ニ付、英・佛・蘭・伊ヨリ岩相公へ答書ヲ出、是ヲ史官ニ命シ、日誌ニ出サシム、同十四日、李ヨリ局外中立ノ一条ニ付、英・佛同意之書面ヲ出ス、同史官ニ命ス、

三八一ノ四

大村永敏事蹟ニ云、榎本鎌次郎曾テ其徒ト計リ、徳川（鎌次郎武曾）

船艦ノ品海ニ在ル者七艘ヲ奪ヒ脱航シ、即チ箱館ニヨル、脱艦ノ中回陽丸ナルモノアリ、製作堅牢、艦具全備、其一ニ居ル賊亦頼テ、以テ主命トス、当時別ニ抗敵スヘキ艦ナシ、是ヲ以テ永敏深ク之ヲ憂フ、偶旧幕府米利堅ニ約シ、購フ処ノ甲鉄艦横濱ニアルヲ聞ク、

大ニ悦テ速ニ之レヲ得ンコトヲ政府ニ乞フ、然レトモ米人局外中立ノ故ヲ以テ肯ンセス、苦慮百端竟ニ策ヲ献ス、政府米人ト応接数回、先中立ノ説ヲ解キテ終ニ甲鉄ヲ得、依テ初メテ全勝ノ算ヲ得、

二十七日

車駕氷川神社ニ詣セントス、是日東京ヲ発シ、浦和駅ニ抵ル、養老旌賞及ヒ賑恤ヲ沿路各駅ニ行フ、

三八二 箱館裁判所副総督清水谷公考ヲ総督ト為シ蝦夷全島ヲ管セシム

シ蝦夷全島ヲ管セシム

同四月五日、箱館裁判所副総督清水谷侍従公考ヲ以テ総督ト為シ、蝦夷全島ヲ管セシム、

御沙汰書

(記)

本日、清水谷公考に総督ヲ命し、其任期を三年に限り、  
更ニ全島政務委任を命セらる、

清水谷侍従

蝦夷全島政務一切御委任ニ相成候間、機宜見計、無二  
念尽力可有之候事、

但内国非常之大事件、并魯西亜交際中非常之大事件

ニ至テハ、伺之上所置可有之候事、

閏四月

本藩人井上石見<sup>秋長</sup>を、徴士参与職内国事務局判事を命し  
て附属とし、他に長州藩人堀真五郎及ヒ山本一郎・小野淳  
助・宇野監物を、徴士内国事務局権判事を命して在勤せ  
しめ、同十四日書を以て、魯国領事に総督任命の通牒を  
為し、同日京都を發途、同十七日越前敦賀に着、同二十  
日長州藩所管華陽艦に乗りて同港を發航し、同二十五日  
箱館ニ着航し、即日五稜郭に入り、同二十六日元奉行杉  
浦兵庫より人員・金穀・諸簿冊を受取り、裁判所を設立  
するに至れり、

三八三 還幸ノ沙汰書

明治元年閏四月(西日)

御還幸ニツキ御沙汰書

此度

御親征海軍

天覧被為 遊、時機ニ依リ東海道へ大旗ヲ被為進候  
思食ニ候処、大総督官ヨリ関東之形勢言上之趣有之、  
暫浪華ニ

御滞在被為 遊候、然処此度徳川慶喜恭順謝罪奉仰

天裁候ニ付テハ、不可赦之大罪、嚴譴至当ニ候得共、

祖先之勲勞不被為捨、非常至仁之

叡慮ヲ以、寛典之御処置被 仰出候、依之兼テ御布令

之通、速ニ

還幸被為 在、慶喜伏罪、江戸城平定之廉相立候所ヲ

以、

御先靈へ被為告候

思召ニ付、

山陵御參拜被 仰出候、乍去會津其外殘党之者、尚処

々屯在暴威ヲ張、抗

官軍候趣相聞候、此後之動靜ニ依リ、直チニ

御親征ヲモ可被為 遊候間、公卿列藩益勉勵、敵愾之

氣不相弛様、屹度可相心得候、且又追々内外之大勢被為

知食、海・陸軍之御作興ヨリ列藩之御指揮、海外各國之御扱等、其当ヲ被為得候ト否トハ、御興廢之岐ル所、殊ニ地勢之利不利ハ關係之最大ナル儀ニ付、弥以御勵精、御誠誓ニ被為基、已後屢浪華ニ行幸、官代ヲ被為置、万機、御親裁、内外之大勢、御統馭被為、遊候叡慮之旨被、仰出候ニ付、上下厚ク奉体シ、各々其分ヲ可尽

御沙汰候事、

但今般被、仰出候通、京都ハ先ニ二條城ト被為定候、

御宗廟之地旁以已來別テ御警衛向等、厚ク被、仰付候、浪華之儀ハ屢

行幸被為、遊候ニ付テハ、下民之困苦被為厭、

行在所官代等追テ地利御撰ヒ、御造宮被為、在候

旨、被、仰出候事、

閏四月

三八四 陸軍編制ニ付キ達ス

明治元年閏四月

陸軍編制

一高老万石ニ付

兵員十人

当分之内三人

但京畿ニ常備、九門及畿内要衝之箇所、其兵を

以テ警衛可被、仰付候間、追テ

御沙汰可有之候事、

一高老万石ニ付

兵員五十人

但在所ニ可備置事、

一高老万石ニ付

金三百兩

但年分三度ニ上納、兵員之給料ニ充ツ、

右之通

皇国一体総高ニ割付、陸軍編制被為立候条、被仰出候

間、此旨申達候事、

但勤方心得方等、仔細之儀は軍務官ヘ可伺出事、

閏四月

三八五 還幸ニ付キ沙汰書

明治元年閏四月四日

先般 御誠誓之旨ニ被為基、此度 還幸之上ハ、思食ヲ以不日ニ條城へ

玉座ヲ被為移、万機類敷被 聞召、猶御余暇ヲ以、文

武御講究ヲモ被為 遊候旨被 仰出候ニ付、弥以公卿・

列藩士民ニ至迄、可有勉勵

御沙汰候事、

閏四月

三八六 金札製造ヲ仰出サル

明治元年閏四月十九日

金札製造云々違書

皇政更始之折柄、富国之基礎被為建度、衆議を尽し、

一時之權法を以て、金札御製造被 仰出、世上一同之

困窮を救助被遊度

思召ニ付、当辰年より来ル辰年迄十三ヶ年之間、

皇国一円通用可有之候御仕法ハ、左之通相心得可申候

也、

但通用日限之儀は、追て可被仰出候事、

右之通被

仰出候間、末々迄不洩様、其向々より早々可相触候事、

辰閏四月

太政官代

明治元年閏四月十九日

一金札御製造之上、列藩石高ニ応し、万石ニ付一万両ツ

、拜借被 仰付候間、其筋江可願出候事、

一返納方之儀は、必其金札を以、毎年暮其金高より壹割

宛差出し、来ル辰年迄十三ヶ年にて、上納済切之事、

一列藩拜借之金札は、富国之基礎被為立度

御趣意を奉体認、是を以産物等精々取建、其国益を引

起し候様可致候、

但其藩之役場ニおひて、猥りに遣込候儀は、決して不

相成候事、

一京・攝及近郷之商賈拜借願上度者は、金札役所江可願

出候、金高等は取扱候産物高ニ応し、御貸渡相成候事、

一諸国裁判所初め諸侯領地内農商之者共、拜借等申出候

得は、其身元厚薄之見込を以金高貸渡、産業相立候様

可致、尤返納之儀は、年々相当之元利為差出候事、

但遐邑僻陬といへとも、金札取扱向は、京・攝商賈



之振合を以取計可致事、

一 拝借金高之内、年割上納之札ハ、於会計局截捨可申事、

但正月より七月迄ニ拝借之分ハ、其暮毫割上納、七

月より十二月迄ニ拝借之分ハ、五分割上納可致事、

右之御趣意を以、即今之不融通を御補ひ被為遊度

御仁恤之 思召ニ候間、心得違有之間敷、尤金札を以

返納之御仕法ニ付、引替は一切無之候事、

閏四月

三八七 阿片煙草ノ売買並吞用ヲ禁ス

御布告写一通

阿片煙草ハ人ノ精氣ヲ耗シ、命數ヲ縮メ候品ニ付、兼

テ御条約面ニ有之候通、外國人持渡候事嚴禁之処、近

頃窃ニ舶載之聞ヘ有之、万一世上ニ流布致候テハ、生

民之大害ニ候間、売買之儀ハ勿論、一己ニ吞用ヒ候儀、

決シテ不相成候、若 御制禁相犯シ、他ヨリ顯ハル、

ニ於テハ可被処嚴科候間、心得違無之様、末々ニ至ル

迄堅ク可相守者也、

右御達書、府藩臬一同高札ニ掲示可致被 仰出候事、

閏四月

三八八 淀藩主稻葉正邦ノ謹慎ヲ釈ス

明治元年閏四月

稻葉<sup>正邦</sup>美濃守へ御書

其方事、旧幕府ニ於テ老中勤役中、徳川慶喜去冬大政

返上以來、当正月三日後大變動ニ及候形行、叛逆顯然、

其罪天下万民俱ニ所知、終ニ恐多モ

御親征行幸被為遊、深ク被為惱

宸襟候、就テハ其方枢要之職務ヲ以テ、屹度取計振モ

可有之処、兼テ在江戸且病氣ニ付、退役之儀申出居、

彼是始末尽力難屈情実モ有之候得共、仮令病臥ニテモ

如斯不容易時体ニ立至リ候テハ、全勤役中之落度難免、

相当之御譴責ヲモ可被 仰付之処、右戰爭無間將軍宮

出陣之節、其方国元居合之家来共、速ニ帰順実効相立、

官軍へ随從仕、御用ニ相立候趣ニ有之候ハ、其方平生

示方宜敷ヨリ、方向一定之筋ニ立至リ候、依之出格之

御寛典ヲ以テ、被 免謹慎候条、弥以国論一定、精々

可勵忠勤様 御沙汰候事、

閏四月

内国事務局記  
稲葉正邦家記

三八九 加納藩主永井尚服へ達書

明治元年閏四月

永井肥前守へ御達書

永井肥前守(尚服)

其方事、旧幕府ニ於テ若年寄勤役中、徳川慶喜去冬大政返上以來、当正月三日後大變動ニ及候形行、叛逆顯然、其罪天下万民俱ニ所知、終ニ恐多モ御親征 行幸被為遊、深ク被為惱

宸襟候、就テハ其方枢要之職務ヲ以テ、屹度取計振モ可有之処、兼テ在江戸且会計奉行兼帯ニテ、本役若年寄月番不相勤、専會計而已携リ罷在候段申出居候得共、全無役之者トモ違ヒ、如斯不容易時態ニ立至リ候テハ、相当之御譴責ヲモ可被 仰出之処、家族一同早速江戸表引払、帰国之上東山道鎮撫総督へ帰順之道相尽シ、兵隊ヲモ差出シ、追々 官軍御用ニモ相成、彼是実効相立候事ニ付、出格之 御寛典ヲ以テ被 免謹慎候条、

弥以国論一定、精々可励忠勤様 御沙汰候事、

戊辰閏四月

永井尚服家記

三九〇 池田慶徳・池田章政へ達書写

因・備兩藩へ御達之写

池田因幡守(慶徳)

池田備前守(章政)

松平右近将監家来共、当正月三日後戦争之砌、於伏見官軍へ敵対仕候次第、同人并家来共ヨリ謝罪歎願之旨趣ニテハ、同人儀兼テ病氣、略不弁人事程之容体罷在、殊更在邑中ニテ、全出先家来共之不行届ニ出、徳川慶喜上洛先供ニ被雇罷登候途中、不図戦争相起リ、混乱中前件之通大不敬仕、奉恐入候段申出、就テハ最前右近将監儀入京被止置候処、其事蹟分明更ニ無異心所ヲ以被免入京、早々上京謹慎罷居、謝罪実効之為、先鋒其他格別之御用向可奉願段被 仰出候得共、病氣快方無之、上京御断申出、無余儀事ニ付、於在所相慎居候様被 仰付置候、然処先年長州ト戦争之節、本城自焼

退散、藩屏之任不相立、社稷ヲ失ヒ候ヨリ今日ニ立到  
リシ所業、全ク右近將監病臥中悉皆重臣共所致ニテ、  
唯今作州僅之領地ニ、既ニ三年之星霜ヲ歴、殆ト必至  
困窮、飢餓旦夕ニ差迫リ候情狀、兼テ 御沙汰之通、  
戰爭先鋒勉勵仕度、其志願有之候得共、其費用不弁、  
一日々々因循打過候共、更ニ実効相立之目途無之、実  
ニ不得止次第ヲ以テ、其重臣共其罪難遁、連死ヲ遂ケ、  
右近將監勤王之素志無ニ念段ヲ表シ、国情切迫之情実  
徹上候様、兩藩へ致依頼儀申出之趣被 聞食候、今  
般慶喜始御処分之儀モ、出格之御寛典ヲ以、可被 仰  
出之折柄、難被及 御沙汰筋ニ候得共、実ニ進退困窮  
之次第、更ニ御吟味方モ無之事ニ付、乍不便重臣三人  
之内、重立執事之者一人屠腹、隊長佐野鎮太郎儀ハ永  
禁錮申付可然候、其他ハ一切御構無之候条、此段見届  
之上、更ニ其国情申出候ハ、 御沙汰之品モ可有之  
候事、

閏四月

同別紙ノ写

池田因幡守

池田備前守

今般 御沙汰之旨ハ、重立候者一人之儀ニ付、自然三  
人同等、於一藩其輕重難引分次第モ有之候ハ、上席  
之者一人其罪ヲ負ヒ、決テ連死ニ不立到様可致尽力旨、  
御内諭候事、

閏四月

官中日記、池田章政  
松平武脩家記

三九一 唐津藩主小笠原長國へ達書写

明治元年閏四月

唐津藩へ御達之写

小笠原佐渡守 (長國)

同姓壹岐守儀、旧幕府ニ於テ老中勤役中、去冬徳川慶  
喜大政返上以來、当正月三日後之挙動叛逆顯然、其罪  
天下万民ノ俱ニ所知ニテ、終ニ 御親征 行幸被為遊、  
深ク被為惱

宸襟候、其御壹岐守在江戸タリトモ、枢要之職務ヲ以  
テ取計振モ可有之処、其儀モ不相聞、殊更近年勤役筋  
御聞込之趣モ有之、其方へ取札被 仰付置候処、三月  
上旬江戸表出立之末、今日迄其跡更ニ不相分之段届

出候、然ル処前件之次第自分悔悟致候ハ、速ニ帰順  
実効相立、謝罪可申出之処、無其儀致脱走候ハ、全ク  
松平肥後其他賊徒ニ与シ、益暴威相募候ニ相違有之間  
敷、依之壹岐守被止官位候条、其旨相心得、猶又精々  
加探索可召捕旨被、仰出候事、

閏四月

小笠原長国家記  
官中日記

### 三九二 長州藩世子毛利元徳へ達書写

長州藩へ被仰出書ノ写

毛利長門守  
(元徳)

積年天下ニ先チ 王事ニ勤勞、遂ニ

皇運御挽回ニモ至候事、其方父子忠誠、士卒奮勵之力

ニ依候儀、殊ニ当春以来上京、踴勉拮据有之候段、

叡感不斜被 思食候、然ルニ東国未タ平定ニ至ラス、

今日之形勢ヲ以兵事遷延シ、日月ヲ費候テハ不容易之

次第ニ相及、遂ニ

朝廷之御安危ニ關係イタシ候モ難図、尚此後之動靜ニ  
依リ、

御親征ヲモ可被遊 思食ニ候、就テハ益柱石ト御依頼  
思食候処、帰国御暇願出、内情不得止之次第ヲ以、暫  
ク 御許容候ヘトモ、前条国家艱難之際、軽重相弁シ、  
必ス天下平定ニ至ル迄ハ、

闕下ニ鞅掌有之度 思食ニ候間、父子一層勉勵、速ニ  
出兵之用意致シ、追テ 御沙汰次第神速上京、一藩之  
力ヲ尽シ、奉公従事可奉安

宸襟候様 御沙汰候事、

閏四月

官中日記  
毛利元徳家記

### 三九三 藝州藩世子淺野茂勲へ達書写

安藝藩へ御達之写

淺野紀伊守

昨冬 王政被復候以来速ニ上京、尾・越始メ諸藩一同  
戮力周旋有之、春來奉職精勤之段、

叡感ニ被 思食候、然ルニ東国未タ平定ニ至ラス、賊

兵猶抗官軍候ニ付、形勢ニヨリ候テハ、直ニ

御親征モ可被遊 思食ニ付、当節柄殊ニ奉職中御暇ノ

儀、難被差許儀ニ候ヘトモ、病氣之趣且無扨国情不得已次第ニ有之候間、暫時御暇被下候間、帰国之上速ニ国政向变革致シ、賢材登用旧弊一新、兼テ被 仰付置候

勲旨貫徹候様励精致シ、猶又国事所置之上、速ニ上京可有之候様 御沙汰候事、

閏四月

三九四 米澤藩主上杉齊憲へ達書写

明治元年閏四月

米澤藩へ御達之写

上杉齊憲彈正大弼

徳川慶喜降伏謝罪ニ付、格別之 思食ヲ以死一等ヲ減シ、被処寛典候上ハ、関東表之儀先平定之形ニ候得共、松平會津容保籠城、醜類ヲ聚メ、 王地ヲ奪掠シ、不畏天威、暴虐ニ募リ候大逆無道、絶言語候ニ付、追々討伐之師被差向候、其藩事、隣境要衝之地ニ有之、兼テ御沙汰之次第遵奉決戦用意、勿論之事ニ候処、不日海陸之官軍可及攻撃候間、不失時機緩急相応、可遂力戦

候、依之大隊旗一流被渡下候、固ヨリ天下蒼生之困苦ヲ不被為 忍、動静ニ依リ鳳輦御発向、濟生之功ヲ被為遂度トノ不容易

思食ニ候条、厚奉体認、益以士氣ヲ振興セシメ、名節磨励、家声ヲ不失、全国努力、速ニ奏捷功、奉安

宸襟候様、重テ

御沙汰候事、

閏四月

三九五 仙臺藩外東北諸藩へ達書写

右報知ニ付仙・米兩藩並奥羽・北越

諸藩へ御達写

三九五ノ一

伊達陸奥守

其藩事、松平肥後追討付、重キ御沙汰之旨有之、速ニ朝命奉戴、既ニ出馬ニモ及ヒ候趣之処、豈凶ランヤ、肥後降伏謝罪之名ヲ口実トシ、以テ奥羽諸侯連合、窃ニ彼之凶暴ヲ資ケ候哉ニモ相聞候段、前後如何御不審不少、勿論其状確實ニ候ヘハ、其罪難容、吃度御処置之品可被仰出候処、斯迄順逆ヲ不弁次第、万一国論

一定セサルヨリ被致軟ト被 思食、追テ事跡明細御檢  
殿相成候迄、先家来中入京被差止、屋敷被召揚候旨御  
沙汰候事、

五月

三九五ノ一

奥羽・北越諸藩

先般松平肥後追討被仰付候処、伊達陸奥守・上杉彈正  
大弼盟主ニ、近隣諸藩ヲ連結、肥後之罪戻ヲ弥縫シ、  
歎願相添候次第、奉対

朝廷如何之事ニ候、抑肥後真之伏罪無他候得ハ、開城  
蟄居謹テ可奉仰

朝裁之処、更ニ無其儀嚴ニ封境ヲ鎖シ、剩サヘ東北諸  
路王土ヲ掠奪シ、諸侯之居城ヘ人数ヲ分配シ、暴威ヲ  
張り官軍ニ抗候段、叛蹟顕然ニ候、然ルニ兩藩ヲ始メ、  
猶其逆ニ与シ候藩々モ有之哉ニ相聞ヘ、実ニ不謂事ニ  
候、徳川慶喜始、追々御処分出格之御仁慈ヲ以、總テ  
被処御寛典候御趣意ヲ不奉戴、上ハ奉惱<sup>マヤ</sup>  
宸襟、下ハ万民塗炭ニ陥ラセ候段、天、共ニ御惡ニ候、  
乍併於諸藩從前昇平之流弊、上下之情実不相通ヨリ、  
奸臣其土ヲ要シ、勤 王之宿志ヲ妨害スル等、亦不少

事ニ付、今ヨリ大義順逆篤ト相弁シ、前罪反咎之情実  
相表スルニ於テハ、更ニ可処御寛典候、万一悔悟セズ  
益順逆ヲ誤ルニ於テハ、断然天下ト俱ニ征討被仰付候  
条、速ニ方向ヲ可定旨御沙汰候事、

五月

三九六 酒井忠篤・水野勝知ノ官位ヲ褫キ藩士ノ

入京ヲ禁ス

莊内・結城兩藩へ被仰出書

酒井左衛門尉<sup>(忠篤)</sup>

徳川慶喜御処分之儀ハ、追々 御沙汰之趣モ有之候通、  
叛逆顕然、其罪天下万民俱ニ所知ニテ、終ニ恐多モ  
御親征 行幸被為遊、深ク被為惱 宸襟候処、今日ニ  
至リ、慶喜始メ江戸表ニ於テハ、全ク恭順謹慎之道相  
尽シ候折柄、其方事既ニ当正月三日以来、大變動ニ立  
到候事蹟承知致シナカラ、賊魁松平肥後其他兇徒共ニ  
与シ、益々暴威ヲ募リ、官軍ヘ抗シ、万民塗炭之苦  
ヲ不弁、言語同断之次第、天人俱ニ所惡、不屈之至ニ  
候、依之被止官位候条、家来之者ニ至ル迄、一切入京

明治元年(1868)

不相成旨被 仰出候事、

閏四月

官中日記  
酒井忠宝家記

水野日向守(勝包)へ

酒井左衛門尉ト同文被仰出、末文ニ日向守附家来之者ハ、入京被差止ト有之、

但シ同姓褻之助始メ在邑家来之者共、速ニ官軍へ帰順之方向ヲ定メ、日向守へ諫争致シ、終ニ不得止及相闘候哉之趣相聞得、全ク大義弁別致シ候条、神妙之至ニ候、猶御取札、其事跡於無相違ハ、更ニ御沙汰之品モ可被為在旨、被 仰出候事、  
閏四月

官中日記  
水野忠愛家記

三九七 高田藩主榊原政敬へ達書

明治元年閏四月

高田藩へ御達

榊原式部大輔(政敬)

其方領分賊徒信州松本辺迄通行之由ニ付、応接之趣并賊徒証書受取之上、通行差許候次第、届出之旨取調候処、賊徒通行之主意旧幕府申付之義有之、領地鎮撫之為兵隊引纏、罷越候之由、第一旧幕府領地ト申筋無之、勿論兵隊引纏候儀等、差向朝反賊之所業ニ候処、条理糺明之応接ニモ不及、彼是曖昧之懸合致シ、一通之証書ヲ以テ容易ニ通行為致候ハ、如何之心得ニ有之候哉、右賊徒之党類追々信州飯山城ニ相迫リ、戦争ニ及候趣、頃日四番届出ニ候、右ハ全ク其藩不取締ヨリ差起リ候ニテ、勤王之心組甚以如何敷候、剩へ先般北陸道鎮撫使ヨリ国元取締之為上京之儀、差留置候程之儀ニ有之候処、彼是御不審之事件、鎮撫使出張先ニ於テ、屹度取締可有之候様申達ニ有之、依テハ心得方如何之儀、此表ニ於テ可被聞食候ニ付、重役之者一人、早急可令上京旨

御沙汰候事、

閏四月

三九八 新發田藩主溝口直正賊徒討伐ノ功ヲ賞ス

新發田藩へ被仰出ノ写

(直正)  
溝口誠之進

越後表賊徒乱入、処々暴行ニ及候ニ付テハ、各藩如何  
之間へモ有之候処、其藩ニ於テハ、確守一定之勤 王  
心事貫徹致シ候趣、此節追々伝聞有之神妙之至、猶夷  
効相顕候上ハ、被 仰付品モ可有之候間、愈以勉励尽  
力可致候様 御沙汰候事、

閏四月

三九九 時任清左衛門ヨリ家内中へ書翰

主上モ今廿三日、(京都市東山区) 山階陵・後月輪東陵等 御参拜之

筭候処、雨天ニ付御延引、未タ日限ハ知レ不申、山陵  
之静幽ナルヲ御覽被為遊候ハ、又御孝心モイヤマサ  
セラレ候半、末頼母敷事共御座候、

君公モ去ル十七日 禁中へ御召ニ付、御参

内被遊候処、加州様・阿州様御一同被為拜

天顔、御留守中御警衛大義 思食候旨、御沙汰被為在、

一天盃

一御錦 一卷

一御末広一本

右御頂戴被遊候、恐悦ニ候、

長州様ニモ先日大坂ヨリ御下国、混乱之御申立ニ候由、  
細川モ同断、イツガイツマテモ此御方様バカリハ御ユ  
ルシ無御座候云々略、

日誌 十二、十三

書付 三通

右差上申候云々、

昨日ハ 禁中へ御重臣伊勢殿被召出、 中将様御病キ少

々ニテモ御快方ニ候ハ、早々御上京可被成段、御達  
シ相成候由御座候、御父子様共当分之御勢ヒ、且浮世  
迄之御高名ハ申上迄モ無御座候得共、入費ハナカ  
モツテ一統心配致シ候様子ニ御座候云々、下文略ス、

閏月廿三日 時任清左衛門

進上

父上様

母上様

外略

四〇〇 島津忠義ヨリ英公使パークスへ書翰



明治元年(1868)

明治元年閏四月二十五日

大坂ニ在ル我外国事務全権山階宮、及ビ宇和島少将ニ  
寄スルノ華翰ノ趣、我ニ伝達スルニ曰、一昨年 貴国  
之艦シーコロ<sup>(Oregon)</sup>ン封内種子島ニ漂ヒ至リ、船材破レタレ  
トモ、乗組ノ内三人恙ナシ、此危難ヲ救ヒ、 貴国人  
民ヲ長崎港マテ護送セシハ、是万国交親ノ常礼ノミ、  
豈謂ンヤ、其事 貴国 皇帝政府ニ達シ感悦少カラス、  
右報謝トシテ、馬鞍一具ヲ贈ラル、旨、我  
朝命ヲ伝承シ、来賜ノ物ヲ見ルニ、金装華麗ニシテ、  
望外ノ幸ヒナリ、思フニ我

朝廷ニハ固ヨリ、自ラ報答ノ命有ルヘケレ共、切ニ望  
ムラクハ、貴国近日船艦往反ノ便リアラハ、幸ニ吾ノ  
深ク遠来ノ珍品ヲ感喜スルノ意ヲ、貴国 皇帝政府ニ  
伝ヘ賜フ事ヲ乞フ、書ハ言ヲ悉サス、言ハ意ヲ悉サス、  
諒察ヲ請フノミ、

慶應四年夏閏四月二十五日

薩摩少将

不列顛全権公使

(Sir Harry S. Parkes)

ハーリー・パークス閣下